
IS インフィニット・ストラトス 2人目の操縦者

むー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラatos 2人目の操縦者

【NZコード】

N2815V

【作者名】

むー

【あらすじ】

IS学園に転校してきた、世界で2人目のISが動かせる男のお話。

何を考えてるか分からぬ過去に何かあった主人公がどんな行動をするか。そんなお話。

超 不定期更新です。連続で更新したり、一週間ほど空けたり不定期な更新です。

且指せ面白い一次創作！

1話目　2人目の操縦者（前書き）

オリ主の性格がよく分からぬ話

1話目 2人目の操縦者

白く、白く、とても白い部屋。中央には人が乗れる形状の機械が置かれ、傍には黒い髪の田たにはなにも移っていないうつな少年が立っている。

少年は頭に手をやり砾く。

「うそ、ダルい」

『はいはい、わざわざと触れてみる。シバくよ?』

少年の正面には機械があり、その向こう側には強化ガラスがあり女性が手元にあるキーボードを指で叩いている。

「ヤー」

触らなきや鉄拳と耐久プロレスが待っているんだろうな、といつ恐怖から少年は機械へと手を伸ばす。

それが運命の交差点だったと少年が気づくのはすぐあとだ。

I S

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかつたが、束が引き起こした「白騎士事件」によつて従来の兵器を

凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移つていった。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはない。ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパー・センサーの採用によつて、コンピューターよりも早く思考と判断ができる、実行へと移せる。

しかし、インフィニット・ストラトスには重大なとても無視することができない欠点があつた。それは女性しか扱えないということだった。

この効果はすぐに世界中に染みわたつた。女尊男卑が当たり前となり、男性は街を歩くだけで女性に使い走りされるのも当然の風潮になつた。

ISが発表され、今まで現役だった兵器は破棄され研究中の武器も計画が破棄。ほとんどの軍人が職を失つた。

現在世界に存在するコアの総数は467個。ISの絶対数は少ないが、その圧倒的な性能で各国の軍の予算は殆どがIS開発に回されていた

「あー、まだかー？わたくしそろそろダルくなつてしまひましたー」

空港の待合室の椅子に座ると言つよりも寄りかかつてゐると言つた

ほうが正しい座り方をし、片手に紙コップを持った少年が喋る。少年は独特のなにを考えているか分からぬ雰囲気を醸し出していた。待ち合わせた時間はすでに過ぎた。

幸い人は居らず、遠慮なくだらしなくできる。ならば寝てもいいよなと考え、寝転がろうとする扉が開く音がした。

「すまない、待たせたな。……君が2人目の？」

「はーいそうですよー。僕が世界で2人目の男なのにIISが動かせる人ですよ。どーも初めまして、第1回モンド・グロッソ優勝者の織斑千冬さん。今日からよろしくお願ひします」

やつてきたのは鋭い吊り目にスースの似合ひ長身とボディラインが特徴の女性。少年は織斑千冬が入ってきたのにも関わらず、ニーハコと笑いながら椅子を4つ並べてその上に寝転がる。そしてやる気のない挨拶をする。織斑千冬の田尻が引きつる。

「あーこれは失礼。あまりにもダリーンでつい、いつものようにしてしまいました。どうか許してね、てへりんこ」

「……」

口ばかりで起き上がる」ともしない少年に織斑千冬は言葉がない。少年は思い出したといつも、右手を握り、左手に打ち合わせる。

「そうだ、忘れてた。IIS学園に入学しにきたんだった。さあ、早く行きましょう。実質女子校なんでしょう？ たのしみだなー女の園！」

「……はあ、厄介な奴が来たものだ。行くぞ、ヒーリングだ

織斑千冬は頭が痛い人がするように頭に手を当てながら入ってきた扉から出ようとしたとき、後ろから声がかかる。

「そう言えば僕の荷物どこ行つたつけ？ あれー？」

「ちゃんと受け取ったのか？」

「おお、受け取つてなかつた。ちょっとととつともまーす」

つい、うつかりと忘れてた訳ではなく、本当に忘れていたらしく、少年は走りながら荷物を取りに行つた。

その様子を見て、織斑千冬はため息をつく。

「はあ、どうせ私のクラスに来るんだろうな。あいつは束と同類のにおいがする。まったく頭が痛い」

時間がかかるだろうと考え、コーヒーでも飲もうと自動販売機へ向かおつとした織斑千冬にむけて放送がはいる。

『HS学園教員の織斑千冬様、生徒の蒼崎喜色君あおさききいろがお待ちです。直ちに旅券売り場までお越しください。繰り返します。HS学園の…』

「……なにをやらかした」

織斑千冬の困り事の種がまた一つ増える。

IS学園。それはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があり、それ故に他国のISとの比較や新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

もちろんIS学園へ入学するにはIS適正値が高く、学力も優秀でなければならない。一般的な生徒や代表候補生だろうとこれは変わらない。だが、ISを動かすことが出来る男となれば別だ。喜色は大したテストもなくIS学園への入学が決まっていた。いや、一つだけあつた。ISを使った模擬戦で教師と戦つたが快勝。特に難しいこともなかつた。

織斑千冬の困り事の種が一つ増えた翌日、織斑千冬と少年、喜色は廊下を歩いていた。

「さて蒼崎、教室に入つたら自己紹介をしてもらひわけだが、あまり馬鹿なことはするなよ?」

喜色は首を傾げ、数秒思考、結論が出て右手を握り、左手に打ち合わせる。

「それは押すなよ、絶対押すなよってことですか。それじゃあ思いつきり馬鹿なことをしょーっと」

「ジン

「そんなものは必要ない」

喜色の頭に落ちる黒い弾子。しかも角だ。力を弱くしてもそれなりに痛い。喜色は頭を押さえ涙目になる。

「あー殴つたー暴力だ。体罰はんたーい」

「蒼崎、HHS学園はどの国からも干渉を受けない。つまり治外法権だ。言いたいことはわかるよな?」

「えーと? とりあえずその痛そうな武器を下ろしてくれないかなあ?」

ゴスン

「ほら、下ろしたぞ」

「ツー! ツー! ?」

話しながら、叩きながら、叩かれながら2人は廊下を歩く。

「蒼崎、私が先にはいるから呼んだらはいってきて普通の自己紹介をしろ」

織斑千冬は教室の前で喜色に向き直り、出席簿を振りかぶりながら

忠告する。喜色は叩かれたくないという理由で素直に頷いておく。頷いた喜色に満足したのか扉を開け、教室にはいる。

「パンつ

『今日は転校生がきた。共に精進してくれ。蒼崎入つてこい』

教室にはいると大量の視線に喜色は若干硬直するが、すぐに黒板の前にいる織斑千冬の隣に立つ。

「蒼崎、自己紹介をしろ」

「「ホン、やーやー初めてまして。蒼崎喜色です。第1回モンド・グロッソ優勝者織斑千冬の弟の世界初の男なのにISが動かせる織斑一夏に万が一のことがおこった場合の代替品のモルモットとして來ました。仲良くしてね。」」ってみんな綺麗だねって言つたほうがいいのかな?」

ゴズン

「お、男おー!？」

「やつた、2人目の男!… ツイてる…」

「なんか、幼い感じがするよね」

「目がちょっと怖くない?」

「カツコイい部類にはいる……のかな?」

「どうか新学年始まって1日目に転校生?」

「誰がそんなことを言えといった?」

「ゴスゴス

「私は普通の自己紹介をしろといったはずだが？」

喜色の頭に出席簿が連続で振り下ろされる。その痛さを知っている一夏は顔をひきつらせている。張本人はといえば何で僕は叩かれるの？ といった様子で首を傾げている。

「あ、あのう、織斑先生？ 蒼崎くん、痛そうですし、まだSHRが終わってないです」

喜色に助け船がくる。童顔低身長に大きさが合っていない眼鏡はずり下がつており、なにより特徴的なのがその豊満な胸をもつ山田真耶がオドオドしながら織斑千冬に言ひ。

「ああ、そうですか。

蒼崎、お前の席は織斑の隣だ。織斑、同じ男だ案内してやれ

「え、俺まだよくわかんないんだけど千冬姉……」

「ゴン

「織斑先生だ。さあ、早く準備しろ。時間は有限だ」

「 であるからして、IISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ 」

授業中、山田先生は教科書をすらすらと読んで行く。ほとんどの生徒はノートを書いたり、山田先生の話を聞いたりして、話したりする生徒は1人もいない。もつとも、織斑千冬がいるからだが。だが、熱心なクラスにも例外というものが存在する。喜色と一夏だ。一夏は積まれた教科書の一一番上のものを見て、焦った様子で辺りを見回す。喜色は電話帳並みの分厚さの参考書のちょうど真ん中のページを開いているが、本人は教科書には視線を一瞬たりともむけていない。

「織斑、蒼崎、さつきからびついた。なにもする様子がないが?」

「あ、いや、これはただ考え方をしていただけで……」

「えーと、PICOとか非情報限定共有とかつい最近入学が僕には全然、ちつとも、さっぱりわからんねーんですよ」

織斑千冬は相手から目を逸らさずに見続けるので一夏は畏縮して語尾が小さくなつていく。喜色は一夏とは対照的に開き直り両腕を頭の後ろで組み、心で思つていたことを吐き出す。

「……」

「あ、蒼崎くんは放課後一緒に勉強しましそう! 先生、頑張りますから!」

「織斑くんはなにかわからないところはありますか?」

織斑千冬が出席簿を投げる体制に入つたとき、山田先生が割り込んでくる。一夏は周りを見回し喜色につられると質問する。

「ほとんど全部わかりません」

質問ではなかつた。喜色も顔が引きつり頭の後ろにまわした腕がほどける。山田先生も顔が引きつる。

「え、えつと……織斑君と蒼崎くん以外で、今の段階で分からなつて人はどれくらいいますか？」

拳手を促されて手をあげたのは喜色のみ。他は誰も手をあげない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「パンツ！」

教室の端にいたはずの織斑千冬の手から出席簿が一直線に一夏の頭に飛び、音をたてる。

「必読と書いてあつただろうが馬鹿者。

あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「いや、一週間での分厚さはちょっと……」

「やれと言つている」

「……はい、やつま」

一夏にギロリとあたる視線。眼力に恐れて素直に頷く。その横で知つたこひちゃんねーやと大あぐびをする喜色にその眼力が向けられる。

「蒼崎お前もだ」

「あああ……は？ いやあ、頭の悪い僕にはほりと無理だねって
言つておひづか」

「ゴン！」

「私への返事はYESかはい、もしくは了解だ^{ヤー}」

「……イエスマム」

「ゴン！」

喜色の反骨精神はあつさりと粉碎される。

「私の言つたことが聞こえなかつたか？ いいか、EISの性能は過去の兵器とは段違のだ。そういう『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起くる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解しながら覚える。そして守れ。いいな」

俺は希望してここにいるわけじゃない。
僕は望んできたわけじゃないんだけどなあ。

一夏と喜色の考えがかぶる。一夏は黒服の男に君を保護すると言わ
れ強制的にEIS学園へ入学することになった。喜色も居場所から追

い出されるようにして荷物と僅かな金銭を持たされ、飛行機へ乗せられた。

この2人の考えを織斑千冬は簡単に読んだ。

「貴様ら、『自分は望んでここにいるわけではない』と思つているな？」

2人はなぜバレタと首を竦める。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きていかなくてはならない。それすら放棄するのなら、まず人であることを辞める」とだ」

「……」

やるしかない。俺は家族を見捨てない。一夏は言葉に秘められた真意を理解し決意する。

それに対してもう一人は違った。粉碎されたはずの反骨精神が何時の間にか完璧に再生、織斑千冬に噛みつく。

「せんせーいいですか？」

「なんだ？ 言つてみる」

「まず、僕はすでにいろいろと人の部類じゃないんですけど。それに僕、集団の中で暮らしたのはまだ1年しかないんですけどー？ 暗に現実見ろとか言われても化け物って言われて人として扱われなかつたのが現実なんですけどそこどうなんですかー？」

「そうか。それは大変だったな。辛かつただろう、苦しかつただろう。だがな、それがどうした？過去を見るな。今を見る。未来を見据える。貴様はなんだ。化け物と呼ばれていた生き物か？違う。1年1組1番蒼崎喜色だろう。お前は人間だ、誰がなんと言おうが人間だ。いいな」

「…………」

「山田先生、授業を続けてください」

静まり返った教室で織斑千冬が授業を続けると促す。

「え、えっと、織斑くん、分からないといふは放課後に教えてあげますから頑張つて？ 青崎くんもがんばりうね？ ね？ ねつ？」

山田先生は2人を励まし教壇へ戻る。そして授業が再開し、ノートをとるためにペンを走らせる音がまた響き始める。

喜色と言えば天井を見上げ、体は微動だにしなかつたが一つだけ小さく、注視しなければ分からないほど小さく動くところがあつた。

「なんだよーいいよなー家族がいて家があつて慰めてくれる人がいて。そんな人になに言われてもなんともおもわいんだけどねー」

相変わらずなにもする様子が無い喜色にまたしても織斑千冬の出席簿が飛んだ。

パンツ

「いたあ！？」

1話目　2人目の操縦者（後書き）

ネギまのまつがつまりに詰まつてるので息抜きに……
オリ主のIISが登場するのは結構後の予定ですが、どのようなもの
にするかはまだ決まっておりません。自分の中ではホワイト・グリ
ントにしようかなとか思つてるんですけどね。ちなみに自分、レイ
ヴンです。リンクスではありません。だつてP.S.3が無いんだもの。
頑張りますのでどうか見捨てないで貰えると嬉しいです。誤字脱字、
感想待つてます

2話目 波乱の襲来

授業が終わり休憩時間になった。授業中静かだつた教室は話し声でうるさくなる。

が、騒がしい教室の中に静かのが2人。

「……う、あ」

「……」

一夏は机にうつ伏せになりうめき声をあげる。喜色は椅子にもたれかかり目の瞳孔が開ききつている。2人の共通点といえばどちらも頭が沸騰していることだろう。

「ねえ、主人公？」

「主人公ってのは俺のことか？」

「そうだよ君だよ織斑一夏」

「なんで主人公？」

一夏の疑問にさも当然といったように口をまわす。

「姉は世界大会優勝者。幼なじみの姉は天才開発者。その皮を剥いでやりたくなるようなイケメンフェイス。世界初の人間。君が主人公じゃないなら誰が主人公なのさ」

「いや、蒼崎も似たようなもんだる。というか、さつきの授業で言

つてた化け物つてどうこいつなんだ?」

喜色は卑屈に笑う。

「すぐにわかるよ。すぐに……ね」

「……そうか。改めて自己紹介しておこうか。俺は織斑一夏。一夏
つてよんぐれ」

「うんわかったよ主人公」

「いや、だから……」

「ちよつとよろしくて?」

一夏がちよつと待てと手を喜色に向けたとき、誰かの声がかかる。
一夏と喜色、2人が聞いたことのない声だ。

「ん?」

「う?」

気の抜けタ声とともに2人は振り返る。そこにいたのは金髪碧眼の少女で、綺麗な金髪はロール状で碧眼の目は少し垂れ氣味だ。腰に手を当て2人を見下ろす姿はとてもよく似合っている。クラスは初めて男子との初接觸の様子に固唾をのんで見つめている。

「まあ! なんですかそのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光榮なのですからそれ相応の態度という物があるのでないですか?」

明らかに男を蔑むような態度。世の中の女尊男卑の風潮にのまれた典型的なタイプだ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「うん、僕も知らない。というか、初めて話す人にそれ相応の態度をとれといわれてもどんな態度をすればいいかわかんないし」

「知らない!? このセシリア・オルコットを! イギリスの代表候補生にして入学首席のこのわたくしを! ?」

ヒステリックに叫び一夏の机を叩き、顔を寄せるセシリアに一夏が手をあげる。

「あ、質問いいか?」

「フフッ、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

態度が180°。反転、ヒステリックな状態から貴族の雰囲気を漂わせる余裕がでてくる。

「だいひょー! ほせーつてなんだ?」

ズルツ!

固唾をのんで見つめていた生徒全員がずつこける。

「あ、あ、あ……」

「『あ』?」

「あなたっ、本気でおっしゃりますのー!?」

「あなたの『』劍幕で聞き返す。

「おひ。知らん」

知らなことは素直に聞こいつ。と至極まじめな顔で一夏はセシリ亞を見つめる。

「主人公くん、ちゃんと考えよつよ。日本語には一文字に意味があるんだからせ」

そこに除け者にされて寂しそうな顔をしていた喜色が僕の出番だと張り切って出てくる。

一夏は深く考え出す。

「だいひょーーほせー。代表? 候補生? なんかの代表?」

「そりそり、続けて」

「……だから……國家代表? の、候補生か?」

「そりそりー よく分かりましたー」

「極東の猿にも考える能力はあるようですね。そう、わたくしは

「エリートなのですね！」

声を張り上げ自信満々に一夏の鼻先に人差し指を向ける。その耳に響く声に喜色は顔をしかめる。

「本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのですわ。理解していただけたかしら?」

「そうか、そりや幸運だ」

「……馬鹿にしてますの?」

「でもさあ、あくまでも『候補生』なんだよ。代表とは差がありますが、他にも候補生はいるんだよ。ということは補充要員つまり、補欠つてわけなんだよね？ 換えがきく消耗品なんだ。

それに幸運なのは君だよ、ロールくん。その主人公くんはモンド・グロツツ優勝者の織斑千冬の弟で世界初の男性IS操縦者だよ。かなーり希少性高いよ？」

たしかに一夏は約30億分の1の人間で希少性はとても高い。喜色がISを操縦できっていても、15億分の1まだまだ希少だ。世界には一夏と接触したい人は掃いて捨てるほどいる。政府関係者に研究者、開発者その他etc. そんな注目の的の一夏と当たり前に話すことができるのは素晴らしい幸運だ。

「わ、わたくしは補充要員などではありませんわ！！ 専用機も頂いていますし、適性値はAですわ！！ 補欠なわけありませんわ！ それにわたくしは入試の際に教官を倒したエリート中のエリー

トなのですわ！」

最初は大袈裟なほどに動搖していたが自分の考えを言つことで落ち着いたのか、最後にはまた胸を反らし自信満々に言つ。そこに爆弾を投下する2人。

「俺も倒したぞ？」

「僕も倒したけど負けちゃった」

「ん？ 蒼崎、倒したけど負けたってどういうことだ？」

「なんかね、一回目はそのロールくんみたいに高飛車な人でちょっとイラつとしたから圧勝したんだよ。そしたら打鉄を装備した織斑先生がやってきたんだよ。それで負け。どんな無理ゲーって話だよね。というよりあんなチートに15分もった僕にはくしゅー」

1人だけ手を叩く喜色をクラス全員が見つめる。セシリ亞はショックのあまりに目を大きく見開いている。

「きょ、教官を倒したのはわたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないか？」

セシリ亞の表情が氷のように固まる。喜色がニヤニヤとセシリ亞にさりげなく追撃をかける。

「だよねー主人公も倒したんでしょ？ なら本当に倒したのは3人つてことになるねー」

「いや、でもあれは……なあ？」

「なあと言われてわかるわけがないませんわー、どうこうとかしらーーー！」

「落ち着けって、落ち着いて」

「じゅうじゅ、じゅうじゅ」

「わたくしは馬ではあつま……」

落ち着こうとする気配が一つもないセシリ亞を止めたのはチャイムの音だった。一夏は安堵の息をはき、喜色は残念そうに肩を竦める。

「また後で来ますわ！ 逃げないことーー よくつてーー？」

「逃げなねえよ。じこに逃げろっていうんだ？」

「大変だねえ主人公は。頑張つてね」

「貴方もですわーー よろしいーー？」

「よろしくないです。来ないでください」

セシリ亞が鼻息荒く席に着いたと同時に千冬と真耶が教室に入ってきた、今まで静かに見ていた生徒たちが慌てて席に着く。

「それでは」の時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する

今までの授業は真耶が行っていたが、今は教壇に千冬が立っている。真耶は教室の後ろでノートを手にしていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないととけないな。

クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移をはかるものだ。今の時点では大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更は無いからな」

忘れていたことをふと、思い出したように話した千冬の話に教室が色めき立つ。事前知識がない一夏は自分には関係ない、誰かがやるだろつと気を抜く。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

「私も織斑くんを！」

「蒼崎君を推薦します！」

「あ、私も！」

「では、候補生は織斑一夏、蒼崎喜色……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺が！？ クラス代表！？」

「ちょっと待つてよ！ 僕たちまだISに関わって1ヶ月も経つてない初心者だよ！！ そんなのでいいの！？ もうと、他にふさわしい人がいるはずだ…よ…」

次々と推薦され、立ち上がりて抗議を始める喜色の興氣は千冬の強力な眼力で圧殺される。

「織斑席につけ。蒼崎、うるさい黙れ。さて、他にはいないのか？ いらないならこの2人でじやんけんだ」

「ちよ、俺はそんなのやつたくなー！ 蒼崎も……」

「うるさいだつてよ。当たり前のことを言つたらひみやか…こんなこと初めてだよ。ははは」

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権は無い」

「で、でも蒼崎の言つた通り

初心者だし、と続けようとした一夏の声を甲高い声が遮る。

「待つてくださいー 納得がいきませんわー」

机をたたきセシリ亞が立ち上がる。

「そのような選出は認められませんわー 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリ亞・オルコ

ットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？ 実力から考えればわたくしがクラス代表になるのは当然の話。それを物珍しいからと言う理由で極東の猿たちにされては困りますわ！ わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練にきているのであって、サークスをする気はありませんわ！」

猿と言われた男2人。1人は我慢我慢と耐え、1人は聞きながらものんきに筆入れからあるだけのペンを取りだし積み上げていく。セシリ亞の口はまだ止まる気配はない。

「いいことー？ クラス代表は実力トップがなるべきですわ！ そしてそれはわたくししかおりませんわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で」

プチン

どこかで何かが切れる音がした。

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「そーだそーだ、もつといつてやれー後進的な国の技術の塊を偉そうに持つてる奴なんか國に帰れー」

「あつ、あつ、あなた達ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますのー？」

一夏がそろりと後ろをむくと烈火のごとく顔を真っ赤にして怒り狂うセシリ亞がそこにいた。

「先に侮辱したのはビリッカナ？侮辱するなりヒリヒリ家に帰
れよー」

「決闘ですかー。」

「おー、ここが。四の五の三つ四つわからずこすせー」

またもや机を叩いたセシリ亞に売りし言葉に買ひ言葉。即答の一夏。

「セーのあなたもですかよー。」

「……？」

ビシッと指をさされ、喜色キヨロキヨロとあたりを見回す。

「セーの死んだよつな田のあなたですかー！」

言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

いえ、奴隸にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほどまだ男は腐つていない

「ねえ、ロールくん。敗者が勝者の三つ四つをなんでも聞くつてこ
とだよね？ ね、ね？」

一夏はやる気をみなぎらせ、喜色は異常に食いつきを見せる。異常
な食いつきの喜色に律儀にもセシリ亞は答える。

「いいですわよ。もしもわたくしが負けたのならあなたの三つ四つと
を聞きますわ。た・だ・し！ 勝てたらの話ですわ」

「それなら僕の出すお題を言つておこつかなー」

「僕が勝つたら君は卒業までの3年間裸エプロンで過ごしてもいい!
！食事のときも、エスを操縦するときも、寝るときも、国に一時
帰省するときもずっとだー！」

「…………変態だつー！？」

リスクが大きい勝負にもセシリアは勝てると自分を疑うことしない。

「やはり男は最低ですわ！」

まあ、なんにせよちよどいですわ。イギリス代表候補生のセシリア・オルコットの実力を示すよい機会ですわ！」

「ハンデはどのくらいつけれる？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

一夏がそこまで言ったときクラスが爆笑の渦につつまれる。女尊男卑が当たり前のこの世界、男が女より強いといわれていたのは昔のことだ。そのような世界でこの発言、当然笑い物だ。

「織斑くん、それ本気で言つてるの？」

「男が女より強かったのは大昔だよ？」

「撤回するのも遅くないよ！」

クラス全員が本気で笑う。その様子に喜色が静かに口を開く。

「黙りなよ」

「主人公は本気に決まつてゐるじゃないか」

「なんで男は女に勝てないの?」

「ISを使えないから?」

「動物界後生動物亞界脊索動物門羊膜亞門哺乳綱真獸亞綱正獸下綱
靈長目真猿亞目狹鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亞種の雄と雌に大して違いがあるわけでもない
「世界が一つに別れて戦つたら男性陣営が3日ももたない?」

「バカを言つちやいけないよ」

「戦争は戦う部隊だけで成り立つてゐるわけじゃない」

「作戦の立案、補給部隊の展開、兵器の生産、兵士のメンタルケア。他にもたくさんある」

「戦い方だつて山ほどある。戦後を考慮しないなら女性陣営側に核爆弾を大量に発射すればいい」「毒ガスを撒き散らせばいい」「仲間割れを起こさせればいい」「ISをつかうのなら整備機械を壊せばいい」「整備物資を奪えばいい」「生活必需品の供給を絶てばいい」「物資を渡さなければいい」

「今の世の中男性ばかりが辛く厳しい仕事をしてゐるよね」

「でも、そんな大変な仕事が僕たちの生活を支えているんだ」

「そんな男が敵にまわるんだ。ライフラインを整備する人はいないよ?」

「ライフラインを破壊すればいい」

「敵のトップを暗殺すればいい」

「それに、」

「HSの初心者は候補生に勝てないって言つの？」

「主人公は織斑千冬の弟だよ？」

「ただの男なはずがないよね」

「もちろん僕だって普通じゃない」

「勝てないって決めつけるには早すぎるよね」

「戦いつて言つのは今から始めますってところからじゃないよ」

「いまこのときから始まつているんだ」

「あ、言つて過ぎちゃったね。『ゴメンゴメン』

「さ、主人公にロールくん。続けて続けて。僕はもう、黙つておくからさ」

今までとは違う喜色の雰囲気にクラス全員がのまれ、動く気配もない。

一夏とセシリ亞も話を続けることができない。

「さて、話は纏まつたな。勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。3人はそれぞれ用意しておけ。蒼崎は後で私のところへ来い。それでは授業を始める」

この誰も声を出すことができない空氣を壊したのは千冬で、出席簿を喰らいたくないと皆授業を受ける体勢につづるのだった。

喜色は勢いよく職員室の扉を開ける。

「しつれーしまーす。織斑せんせー、来ましたー」

パンツ！

「語尾を伸ばすな。鬱陶しい」

千冬の手から投げられた出席簿は喜色の頭でいい音をたて、千冬の手に戻る。

「痛いですせんせー」

「いちに来た。話したい」とある

「無視……ハドーフー。」

喜色を無視し続けて、奥にある廊下へ千冬は手招きをする。素直に喜色は部屋に入る。

喜色と話す覚悟を決め千冬は扉の鍵を静かに閉めた。

2話目 波乱の襲来（後書き）

専用機をどうしたものか……
悩むなあ……

誤字脱字、感想待つてます

3話目 波乱が去つて初日が終わって

「うう……」

一 夏は机の上にうつ伏せになり唸る。

「い、意味が分からん……。なんでこんなにややこしだ……？」

I.S学園へ入学する生徒は多少差はあるが参考書を見て勉強をしているが一夏は捨てた。そのため一夏は事前学習を全くしていない。I.S関係の教科書には専門用語がひつきりなしに出てくる。辞書でもあれば多少はマシになるだろ？がそんな都合のいいものは無い。初日にも関わらずI.S学園は授業の全てをI.S関係で攻めてきた。これは公式を知らない数式をヒントも何もなく自力で解けと言われているようなものだ。当然一夏に分かるわけもなく、今日一日何もしていないことになる。

一夏の耳には女子がキャイキャイと騒ぐ声がよく聞こえる。

「（うぐ……。勘弁してくれ……）」

昼休みに喜色と友好を深めようと一緒に学食に行こうとした。授業中に男2人でいけば精神的疲労も少しは休まるかとも思い誘おうともした。おかげで千冬の出席簿が飛んできたが。だが、昼休みになると喜色は何時の間にか教室からいなくなり、一夏は一緒に学食へ行こうとする女子にまわりを囲まれた。そこからは地獄に等しかった。食堂へ向かう一夏の後ろには人が並び、食券を買おうとするとモーゼの海割りの如く人の壁が割れた。俺がなにをした。

「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです。蒼崎

くんは……いないみたいですね

「はい？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

うつ伏せの状態から体を起こした一夏に真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡す。

IS学園は全寮制で生徒は寮で生活しなければならない。これはIS操縦者を保護する目的で行われる。余所の国の候補生に何かあってからでは責任はとれないという、お偉いさんの考えも少しあるが。

一夏は紙と鍵を渡されて戸惑う。

「前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもいいっていう話でしたけど？」

「織斑くんと蒼崎は事情が事情なので、安全性を最優先して無理矢理変更したそうです。……政府から聞きました？」

真耶は最後の部分だけは一夏にだけ聞こえるよう耳打ちをする。世界でたった2人のISが動かせる男。解剖してみたい人もいるだろうし、遺伝子を研究したい人もいるだろう。政府関係者も来るだろう。蒼崎喜色、織斑一夏の二名はいま篠ノ之束と同程度の重要度がある。

「そういうわけで、政府特命もあって、とにかく2人を寮に入れるのを優先したみたいです。1ヶ月もすれば個室が用意できますから、しばらく我慢しください」

「……あの、耳に息がかかつてくすぐったいんですが

「あ、いや、これは、わざとかではなくてつ……。」

真耶は顔を赤くして一夏から離れる。少しの間耳打ちをしていたため、クラスにいる人間の視線が自然と集まる。

「いや、わかつてますけど……。あ、まだ荷物用意してないんで今日はもう帰つていですか？」

「あ、いえ、荷物なら」「

「チフーコ先生がとりに」「

「ゴン！」

喜色が口を挟むが後ろから出席簿が振り下ろされ撃沈。後ろから千冬が現れる。

「私が手配しておいた。ありがたく思え」

「またまた一さつきと違つてシンデレなんだからチフーコ先生はホントは主人公に誉めて」「

「ガンッ！」

「復活。撃沈。忙しいやつだ。」

「ど、どうもありがとう」「やれこまね」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯の充電器があればいいだろ?」

とても大雑把である。人の生活は潤いも必要なんだよ、姉さん。と言いたいがそのような地雷を踏む勇気を一夏は持っていない。

「蒼崎は……朝、すぐにここに来たから荷物は私が持っている。後で渡そう」「う

「もちろん中は見てないよね?」

「安心しろ。私が直々に検査しておいてやるつ。それから夕食は6時から7時、1年専用食堂を使え。大浴場はお前たち2人はまだ使うことはできない」

四つん這いになつた喜色を放つておいて千冬はつづけるが、一夏が尋ねる。

「え、なんですか?」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか?」

「あー……」

「主人公はムツツリだね! 安心して! 僕も同じ気持ちだから! 思春期の男子だから仕方ないよね!」

喜色が一夏の両手を握り大きな声で言つ。それを聞いたクラス内外が若干騒がしくなる。

「ふ、2人は、女子とお風呂に入りたいんですねか！？ だつ、ダメですよつ！」

「い、いや、入りたくないです」

「ええつ？ 女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題のよつな……」

クラスの注目が集まつてゐるなか、真耶のこの騒ぐ様子に早くも騒ぐ女子が出てくる。

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……？」

「蒼崎くんがのぞきに来るかもしないわね」

「どつちともそれはそれで……いいわね」

「織斑くんの中学時代の交友関係を洗つて！ すぐにね！ 明後日までには裏付けとつて！」

なんの話だ、なんの。といったよつに喜色と一緒に顔を見合せた。

「えつと、それじゃあ私たち会議があるので、これで。織斑くん、蒼崎くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くつちやダメですよ」

校舎から寮まではわずか50メートルほどしかない。ISアリーナ、IS整備室、IS開発室など様々な設備があるが今の2人にはどうでもいい。一日中視線にさらされ精神の余裕を示すメーターはどうの昔にレットゾーンに突入していた。

「ふー……」

「んー……」

「蒼崎、行こうぜ。今日はもう疲れた」

「そうだね。でもまだ気を抜くには早いと思つよ。まだ何がある気がするよ」

千冬と真耶が教室から出るのを見て一夏は喜色に声をかけながら立ち上がる。強制的に床に伏せることになっていた喜色も起き上がる。

「えーと、ここか。俺は1025室だな。喜色はどうだ?」

「……ねえ、主人公。部屋交換しない?」

一夏は部屋番号が書いてある紙を見て、冷や汗をダラダラと流し手がガクガクと震えている喜色の手元を覗き込む。

「……寮管室のとなりか。ここは断つておぐぜ」

「そんな殺生なことしないでよ主人公！　僕がストレスで髪が白くなつてもいいっていうのー？」

「シラネ」

キッパリと断つた一夏に喜色は望み薄とみて、首を振りながら歩き出す。一夏も自分に割り当てられた部屋である1025室に入る。

「……疲れた。来週は決闘とかあるし。といつかISは訓練機でやるのかな？　でも腐っても代表候補生なわけで専用機ぐらいもつてるよなあ」

自分の部屋に入った喜色は今まで使っていたベッドよりも何倍も高級なベッドに寝転がる。すでにこの部屋に入る前に寮監室に人がいないのは確認済みだ。寮監が誰なのか後で調べなくてはならない。真耶ならいいが、千冬だった場合は最悪だ。喜色に自由はない。

「ま、なんとなるわ。さて、主人公の部屋にでも行つてみようかな」

柔らかいベッドを惜しみながら一夏のところへ行こうと扉を開けるとき、「あ」と声をあげる。

「忘れてたよ。常に身につけてなこと」

部屋の隅に置かれていた荷物の中から先端にUSBメモリがついたネックレスを大切そうに取り出す。それを一旦目の前に持ち、眺めた後首にかける。

「さ、行こう」

喜色が1025室の扉をノックしようとしたとき、突然扉が内側に開かれ一夏が飛び出してきた。

「ウルルー？」

「助かつた！」

「主人公、なにしてるの？」

いや、不可抗力で第の

ズドン！

一夏の顔の真横に木刀が突き出す。その隙間、僅か2ミリ。素晴らしい幸運だ。

「……なんか楽しそうな感じがするね。主に僕が」

「お前が樂しくてばざつある
つー?」

木刀の切つ先が扉の内側へ引っ込む。

ズドン！

そしてまた打ち込まれる。

「本気で殺す気！？ カわさなかつたら死んでるぞー。」

打ち込まれた場所は数秒前まで一夏の頭があつた場所。まさに危機一髪。くろひげ危機一髪も真っ青だ。

「……なになに？」

「あ、織斑くんに蒼崎くんだ」

「あそこが織斑くんの部屋かー」

「蒼崎くんの部屋はどこー？」

「寮監室のとなりー。寮監って誰だか知ってる？」

騒ぎを聞いて部屋から女子が次々と出てくる。男の田を気にしない格好を見て一夏が一度赤くなつていても喜色はただ、笑つて話を始めるだけで顔を背けたり赤くなつたりもしない。

一夏は頭の上で合掌。邪神でもいいから助けてくれと心の底から願う。

「……篠、篠さん、部屋に入れてください。すぐこ。頼みますお願いします何でもしますから」

「寮監は織斑先生つていう噂があつたよ

「それホント？」つそり遊びに行けないじゃん

「終わった。誰か部屋交換してくれない？主人公に頼んだけど切り捨てられちゃって」

「いやだよー怒られたくないもん」

「もうそう、出席簿が振り落とされそつだよね」

パパパパパンツ！ ガン！

「そう遠慮するな。それほど痛いものでもないだろ。蒼崎も決まつたものに文句を言ひつな」

「 ッ！？ ッ！？」

「少し、聞きたいことがある。ついて来い」

千冬が登場、一瞬で出席簿を振り下ろす。が、一人だけ威力が違う。千冬は頭を押さえ床を転がりまわる喜色の首根っこを掴みそのまま引きずつて歩きだす。壁に当たろうがお構いなしである。

喜色は寮監室に連れてこられ、目の前には千冬が立つ。

「さて、失礼だとは思つたがその前にかけているメモリの中を見させてもらつた」

「何やつてるんですかチフーコ先生。というか見れなかつたでしょう？」

「ああ、おかげでパソコンを買い替えなければならん。一体それはなんだ。とても大切そうに包んであつたが」

首を振り溜息をつきながら聞く。どう考へても普通ではない。読み込もうとするとヤジが爆発するようなHSBメモリなど普通ではない。そして、ジュラルミンケースにいれ、鍵をかけているのも普通ではない。

喜色は当たり前といった顔で答える。床に蹲つたまま。

「せつべき部屋で言つたでしょ？あの時に持つていたものだよ。データの量が半端ないから普通のパソコンじゃ見ようとすると壊れちゃうよ。まあ、ウイルスを仕込んでるってこのもあるんだけどね」

「……まつたく、私が全面的に悪いとは言えそのように言われるとお前を悪く言いたくなるな。それで、そのメモの件はなんだ？」

「現在の普通の技術者では作れない、発想自体できない兵器だよ。ああ、安心して。少しほは世界にばらしてくるから、僕だけが持つてるわけじゃないよ」

「それで一夏に危害を加えようとしたら許さんからな」

「ハハハ」と笑っていた喜色は雰囲気が変わり刺々しくなる。田つきは鋭く、声もすこし低くなる。

「だからさつきも言つただろ。目的を邪魔しなければ殺しはしないし、一生残る怪我をさせたりもしない。しつこいんだよ」

その雰囲気は一瞬で終わりいつものなにを考えているか分からず
雰囲気になる。二二二と笑う。

「とにかく千冬ちゃん、もう千冬ちゃんは超プログラマって事が分かつたんだけど、みんなにばらしていい？ それと今少し驚いてたよね？ ビックリだよ。千冬ちゃんが驚くなんて思つてもいなかつたよ」

ガンッ！

「織斑先生だ」

ガンガン！

「そして何だ？ その言葉づかいは？」

ゴスゴスゴス

「田上のものには敬語を使うのは常識だ」

「痛い、痛いよ千冬ちゃん！ 叩くならもう少し優しく叩いてよ。あ、でも叩かないでくれるほうが嬉しいな、なんて……」

喜色の自分の威儀に関わる言葉を聞き我に返り、誤魔化すように叩きだす。態度の豹変に少し驚いた自分が恥ずかしいのか照れを隠すように叩く。その頬は若干赤い。

「ほりー、早く部屋に戻つて寝るがいい！ 今見たことも聞いたことも全て忘れる！ いいな！」

「わわっ、分かったから叩かないで！」

喜色が逃げるよつに部屋を去る。千冬は赤くなつた顔を冷ますため、しばらくの間立ちぬいていた。

3話目 波乱が去つて初日が終わって（後書き）

千冬H……

がつたりキャラ崩壊……

専用機について考えてみた。

オリ主姫んぐる 誰かゆがんぐる人いたつけ？ オールドキングが
いるじやん いやでも……なんかあつてるようであつてない なら
ばどうする 別に既存じゃなくてもいいじゃない 姿をぼやかして
……いや、でもそれはちょっと……
うーん、悩むなあ……

次はバトル。期待しないで欲しいなあ

ここから独り言

ショタインズゲート、ゲルまゆ、綺、失敗した。……怖かった。

4話目 クラス代表決定戦（前書き）

バトル…… ものすゞく書きにいくなあ

4話目 クラス代表決定戦

一週間がたつた。一夏は篠ノ之簾と一週間使える時間を全て剣道に費やした。おかげでHSの知識、技術は何一つ習得していない。それもそのはず、HSを触ることもせず、授業以外学ぶこともしなかつた。よって今こうしてとても焦っている。

「 なあ、簾」

「なんだ、一夏」

「気のせいかもしないんだが」

「そうか。気のせいだらう」

「HSのこと教えてくれる話はどうなったんだ?」

「……」

「山田先生の補習受けとけばよかつた……」

だからいつて両手を床につけているのだ。

「主人公、どうするのさ。何もしていないんだろう?」

「蒼崎、一夏は私とちゃんと鍛錬している。何もしていないこと
はない。」

「こやこや篠ちやん、IISの武装が刀一本つでいいせ無こでしょ」

「ダイビングステッジのように首元から足首までピチチリとしたIISスージを着た喜色に篠は不快感を隠そつともしない。

「トの名前で呼ぶな。虫唾が走る」

「主人公、篠ノえちやんに嫌われたよー。とにかく主人公のエリツつてこつ来るんだううね？」

「そう、一夏のエリツはまだ来ていない。完成はしている。だが、IIS学園へまだ届いていない。血統の開始時間はすぐそこだ。

「蒼崎つて訓練機を使うのか？」

「やうだよ。まだ出来てないらしいしね。とこうかね、この前開発してくれてるチームの主任と話したんだ……」

喜色の顔が日に見えて暗くなる。

「なにか不味いことでもあったのか」

「うん……。変態だつた」

「え？」

「は？」

「一夏と篠がなにを言ひていいか分からぬといつたよつて首をかしげる。

一週間ほど前、千冬から専用機が来るとこつ話を聞き喜んだのもつ

かの間、喜色の喜びは碎け散ってしまった。

「だから、変態だったの」

「それは一体……」

「どういつ……？」

「変態技術者だつたの！ 僕が電話に出たときまず最初になんて言つたと思う！？ 複数の人が変わり変わりに『大艦巨砲主義つて最高だよな！』、『戦車つてどう思う？』、『一撃必殺つていいよね』、『一点特化は最高、異論は認めない』とか言われたんだよ！？ それに最後は全員が声を会わせて『世界にたつた一つつていい響きだ』だよ！ すぐさま切つたさ……！」

「そ、それは大変だな……」

どちらも続ける言葉が無く辺りに音がなくなつてしまつ。そこには一つ音が割り込んできた。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

いつも危なつかしい人なのだが、今日はいつもに増して危なつかしい真耶がビット内に駆け込んできた。

ここで一夏がしじうもないことを実行する。

「山田先生、落ち着いてください。這い、深呼吸

「は、はいっ。すーはー、すーはー」

「這い、そこで止めて」

「うう」

本気にしなくてもここのに真耶は本氣で息を止める。息をとめた影響で見る見るうらやましく顔が赤くなつていいく。

「……」

「……ふはあつー、ま、まだですかあ？」

「田上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パンツ！

千冬の登場だ。いつもと同じように出席簿が頭に落ちる。

「千冬姉……」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。学齢つい。そもそもば死ね」

弟に対する態度ではない言葉。ここでは教師と生徒なのだから仕方ないのかもしれないが。

「そ、そ、それでですねー！ 来ました！ 織斑くんの専用HS
蒼崎くんのはまだですけど……」

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られて
いるからな。ぶつけ本番でものにしろ」

「」Jの程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せぬ。一夏「

「え？ え？ なん……」

本人が理解していないが周りは理解し、一夏をせかす。
重厚な鈍い音とともにピット搬入口が開く。ゆっくりと開いたその扉の先には白があった。純白の、無の色がそのJの色だった。その姿は操縦者が触れるのを今か今かと待つていて見えた。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用JIS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来れば負けるだけだ。わかったな」

「主人公、せいぜい敵の手札を出させてね。僕が有利になるよう頑張ってね！」

空気が抜ける音とともに一夏にJISが装着されていく。千冬は心配しているように見えたが一夏の言葉に安堵の息を吐く。

「残念だが、蒼崎。お前はこの試合は見てはならん」

「え、ちょ、それは」

「不公平だろ？ だからだ」

「…………」

何か言いたそうな喜色の横で一夏がゲートの外へ飛び出していった。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでその結果か、大馬鹿者。蒼崎、さつさとエスを装備しろ。打鉄かラファール・リヴィアイヴェビアヒラムする」

一夏がなかなか粘ったが負け、ピットに戻ってきた。千冬はセシリアに喜色との対決は翌日にしてもいいと言つたがさすがは代表候補生といったところだろうか、「大丈夫ですわ！ 訓練機などスクラップにしてくれますわ！」と、自信満々に言い放つたので今日のうちにすることになった。

「それじゃ、ラファールにします。正面から刀でキンキンつてやるのはね」

「ふん、さつさと行け」

喜色はエスを装着し、カタパルトへ向かう。向かう途中に武装を選ぶ。

「さて、鈍つてないといいけど。ま、スポーツだし大丈夫だろ」

「ふふん、あなたも負けにきたんですの？」

「あーはーはー、所詮お嬢様には負けないよ。おじょーさまはおじょーをまらしく屋敷で紅茶とケーキでも飲んで食べてたら? ま、僕は紅茶は嫌いなんだけどね」

腰に手をあて空中に佇むセシリアを早々に挑発する。セシリアも挑発に挑発を返す。

「それでは何がいいと言いますの? まさかコーヒーとはおっしゃいませんわよね? あのような泥水を飲めるとは、尊敬しますわ」

テキ、射撃体勢、移行。初弾、エネルギー、チャージ

IISからの警告を聞き喜色は右手にアサルトライフルを呼び出し、左手にショットガンを持つ。まだ構えない。脱力しただけ持つているだけ。

「まあ、今謝るならば許してあげないこともなくてよ?」

「は、攻撃態勢につつておきながら許してあげないこともない? 頭ボケた? 大丈夫?」

「ならば踊りなさい。セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!」

セシリ亞の指がトリガーを引き初弾が銃口から飛び出し喜色の眉間

に向けて放たれる。喜色は首を傾げて避ける。間髪おかずに放たれた一発目、三発目と次々に続くエネルギー弾を最小限の動きでかわす。

「はいはい、円舞曲つてのは体を接して共に回るモノなんだけど、拒否してるんじゃ世話ないよ」

次々と飛んでくる弾をよけながら話す余裕もあるようで動かしている本人も顔には出してないが驚いている。

「ここまで避けているんですの？ それではただの的ですわよ！」

「ちょっと聞いてほしいんだけど、E.Sに似た兵器つてあつたけ？」

「あるわけがないですわ」

「あ、そう。でも、似たような物を動かした感じがするんだけどなあ

ここではじめて喜色が両手に持った銃を構える。ショットガンのトリガーは引かず、右手のアサルトライフルのトリガーだけを引く。もちろんセシリアのスナイパーライフルから放たれる銃弾をよけながらだ。

タタタツ、タタタツ、タタタツとアサルトライフルから弾丸が飛び出す。

「よつやく撃つきましたわね！　さあ、実力差に絶望しないで…」

「ふん、すぐ逆に絶望する」となるぞ

続けて飛び出した弾はまずスナイパーライフルの銃身に当たり跳ねあがる。跳ねあがった銃身に向けてさらに弾があたる。

「ぐう、小賢しい！」

「ほりよそ見しちゃだめだよー」

セシリ亞が銃身に意識を向けているとき、喜色は距離を一気に詰め左のトリガーを引く。一発、二発、三発、四発。右手、左手、右足、左足と撃つていき、ブルー・ティアーズの装甲がそれなりに削れる。

「くっ、ブルー・ティアーズ！」

ブルー・ティアーズからビットが四つ切り離されレーザーが発射される。

「ダメだよ、こんな近距離でビットなんて使つたら。」這是近接武器だよ

上方向に上昇しかわして、両手のトリガーを引きながらセシリ亞から距離をとる。距離をとるときには三メートルを放つて爆炎で目をくらますのも忘れない。

「あ、あなた、ISを動かすのはこれで一回田つやありませるのー。
? どこかで動かしたことがあるでしょ」
「…」

テキ、シールドエネルギー、減少

「ホントだよ。僕、嘘、つかない。田測でいくとあと六割あたりか

「嘘をおつしゃーーー」

喜色は肩を竦めるだけで反論はしない。

「といひで僕が勝つたらちゃんと裸Eプロンしてくれるかな?」

「ふふん、わたくしに勝てたら、の話ですね」

「あーあー、聞こえなーい」

喜色は話している間にアサルトライフルからスナイパー・ライフルに
持ちかえる。まずは機動力を奪つところから始める。
専用機と訓練機の違いだろうか、性能が違いますさて話にならない。

「まずは俺から田を、意識を逸らさせる」

右肩に六連装のミサイルポッドが具現化され、装填されたといひか
ら絶え間なくミサイルが放たれる。セシリ亞は放たれたミサイルを
ビットのレーザーで撃ち落とす。

おかしいことに、スナイパーライフルも使えばさりとて効率があがる
だろうに、手に持つたままで使う気配はない。

「ん、ビットが邪魔だな。潰すか

煙が漂う中、ハイパーセンサーは鮮明にセシリニアとピットを捉えていて、喜色は大して狙いをつける様子もなく、右手の指を二回引く。

「え？」

「よおし、後は一機か

弾はピットのレーザーを発射する部分を三発とも的確に貫いた。セシリニアは止ま起しつたことが信じられず動きを止めた。

「ふわああ……蒼崎くん、す”いですねえ。オルコットさんが一方的にやられてますよ」

ピットでモニターを見ていた真耶は感嘆の声をあげる。

「ああ、私と戦ったときも最初は防ぐので精一杯だった。近づいては離れて、近づくと離れる。厄介な戦法だ」

千冬は防ぐので精一杯と言っているがどのよに来るか見定めていただけであつて、苦戦したわけではない。

「HJDあんな戦い方始めてみましたよ。あんなに急加速したりして大丈夫なんでしょうか？」

真耶が心配そうに咳くが千冬はきっぱりと断言する。

「大丈夫だ。山田先生はラファールを使っていますよね」

「ええ、とても使いやすい機体です」

「では、ラファールの最高速度で急加速や急停止、急旋回を何度もできますか？」

「無理ですよ。Gが大きくて何度も無理です」

一回五回連續でやつたことがあるんですけど『気がついたらベッドのうえでした。』と恥ずかしそうに笑う。

「あいつは一桁以上やつておいてケロリとした顔で笑っていた。私も多少体が痛んだのに。それに、どう考へてもおかしい」

組んだ腕を組み直し苦々しげに咳いた言葉に真耶が首を傾げる。

「なにがですか？」

「機体の能力などだ。スペック以上の性能を引き出している。それも限界性能以上だ。あいつ、まだ何か隠しているな……」

「まだ、何か隠している?」

「ああ、いひちの話です。……そろそろ終わるな」

二人はモニターに向き直つて試合の結末を見届けよつとする。

「ブルー・ティアーズが四機撃墜！？ あなた、何をしたんですの！」

「何つて、弾で貫いただけだ」

「そんなデタラメな……」自分の主な攻撃方法の一つを潰され、呆然とするセシリ亞に喜色は今の内にと距離をつめる。スラスターを全力で吹かし、今出せる最高速度を出す。

普通の人間ならば急加速や急停止はGがかかり苦しくなつたり息がしにくくなる。だが何故か喜色にそのような気配はない。

「考えるのはいいけど、危ないぞ」

「オソンッ！」

喜色の左手には煙をあげる bazooka 炮が握られている。至近距離で bazooka 炮を放つなど正氣を疑う行動だが、与えたダメージは大きい。

ブルー・ティアーズの装甲はボロボロになりフラフラと地面に落ちる。威力の高さに実体ダメージもともないセシリ亞の顔が痛さでしかめられる。

「ぐう……っ！ 一体なんですのあなたはっ！」

「君たち女が見下している約30億人のうちの1人だ。他にもいろいろあるが……まあ、そんなところだ」

「嘘ですわ！ なぜわたくしがこんなにも早くシールドエネルギーを9割削られるのですか！」

「ふーん後1割か。このまま負けたら裸エプロンだよ。どうする？..」

「負けませんわ、ここから……逆転しますもの！..」

セシリアのスカート状のアーマーの突起が外れる。動き始めたビットが放つたのはここまでとは違つてレーザーではなく、ミサイルだった。

しかし使いどころが悪い。接近時に不意をつく形で放つたのなら避けることができるのは殆どないだろう。が、それなりに距離がある時を使つても大した危険にはならない。

二発のミサイルは喜色のスナイパーライフルに迎撃されえなく爆散する。

「さ、タイムオーバー、時間切れだ。君には三年間裸エプロンで過ごしてもうう！ 情状酌量の余地はない！」

右手のスナイパーライフルがセシリアに狙いをつけ固定される。あとは喜色が引き金を引くだけだ。

「ひつ……！」

セシリアは銃口が自分の眉間に向けられ怯え、縮こまる。シールド

エネルギーばもう無いに等しい。絶対防御は生命を確保するだけだ。つまり、痛いものは痛い。

そして、いくら国家の威信を背負っているとはいまだ子どもだ。ISの威力は絶大である。理論上では一機あれば、戦況をひっくり返すことが可能だと言われている。そのような武器が自分に向かっている。恐怖しないわけがない。

「……」

喜色のハイパーセンサーがセシリアの恐怖にそまつた顔を捉える。流石はハイパーセンサー、怯えている顔がよく見える。

気に入らない。恐怖に怯えている状況を作り出している自分が何より気に入らない。心のどこかが引き金を引くのを邪魔をする。

「……やめだ。やめやめ。この試合、棄権する。僕の負け、セシリアちゃんの勝ち。終わり！」

「……は？」

突然の敗北宣言にセシリアは呆然とし、状況が理解できない。理解しないまま試合は終了する。

『蒼崎喜色、棄権。試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

「よへ、馬鹿者が。つまらんといひで止めるなら最初からやるな」
ピシトに戻つて早々に千冬の鋭い言葉が投げかかれ。一夏は何故あそこまで追い詰めて棄権したのだと疑問で一杯だ。

「わうだよ、なんであれいやめたんだ?」

「たはー千冬ちゃんキビシーーー。いやー、あんな加虐心を操られる
ような表情をされたら絶対防御が発動してもせりへりせりへりやつたく
……」

パンツー！

「織斑先生だ。はあ……そんなくだらなことか。そんな事だらつ
と黙つたが」

「ぐだらなこつて何ですかー。耐えるのすいこ苦労したんだからー。」

拳を握りしめ堂々と叫び青色にあきれたのか、面倒になつたのか、
千冬は頭を抑える。

「わうか、明日も授業がある。わざと寮に戻つて寝る」

「はーー」

素直にピットを去った喜色たちが出ていった扉を見ながら千冬はまたため息をつく。

「……はあ。まったく、本当に厄介事の種だったか。どうせやつをの理由も嘘だらうしな……」

フツといやらな予感が頭をよぎる。

「こや、あいつのことだ、本気で言っていたのかもしれん……」

「まだ信頼はしてもらえんか。私も、まだまだ未熟だな……」

そう呟いた後、ピットを出ていった。

4話目 クラス代表決定戦（後書き）

前回の予告通りバトルでした。うん、自分は圧倒的な力で上からねじ伏せさせる戦いのが大好きだつたりします。戦いの書き方こうじたらしいとかアドバイスとかあつたら嬉しいです。

次はいろいろかつ飛ばして中国さんが来るよ！ だつて主人公が入り込む隙間が無いんだもの。

以下どうでもいい独り言

アーマードコア？発売延期……なぜだフロム！
？が出た記念にPS3買おうと思つてたのにっ！
何故延期したつ。このまま発売中止なんてない……よね？

5話目 転入生、襲来（前書き）

グダグダでシリアスともいえないシリアスがちょっと入ってて、場面の切り替わりがとつても多いです。

5話目 転入生、襲来

戦いの翌日、一年一組の教室の教壇に真耶が立ち嬉々として喋つていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね」

一夏は状況が把握できず、硬直。暫し時間を使い把握。質問のため手をあげる。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつているんでしょうか?」

「それは

「それはわたくしが辞退したからですわ!」

シユバツッと立ち上がりセシリ亞は腰に手をあてる。
なんで辞退した、テンションが高い、なんで上機嫌? 一夏は疑問を抱く。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたし、蒼崎さんについても実質わたくしの勝ちですし」

「ちょっと待つてくれ、蒼崎は勝ちまであと一步のところだつたら、蒼崎のほうが強いと思うんだけど……」

「主人公、僕は負けたんだよ。それに敗者は勝者に従つ。当たり前の事だよ。あ、セシリアちゃん、負けたら奴隸とかいうの無しでいい？」

「ええ、わたくしも熱くなりすぎましたわ。蒼崎さん、わたくしが負けたときは、は、裸エプロンも無しでいいですかね？」

「もちろんだよ」

「そ、それでですね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパークエクトな人間がIOS操縦を教えて差し上げれば、それはもう見る見るうちに成長を」

コホンと話題を変えるように咳払いをしてセシリアは手をあてる。

バン！

セシリ亞の言葉に反応したのは篝で、勢いよく立ち上がる。

「あいにくだが、一夏の教官は足りてない。私が直接頼まれたからな」

「あら、HISランクのあなたとAのわたくしではお話しにならないのです？」

篝の異様に鋭い眼光を光らせてセシリアを睨みつけるが、セシリア

も正面から睨み返す。クラス全体がピリピリとし始めたが千冬がいつものごとくぶち破る。

「パパアンツ！」

「座れ、馬鹿ども」

出席簿でたたかれ、すこすこと席にこもどる2人を見て一夏が何かを思いつく。

（凄味とす）（なんつって）

「その得意げな顔はなんだ。やめろ」

一夏の頭に出席簿が落ちる。一夏の文句がありげな視線を無視して声を張る。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな」

セシリアは何か言いたげな顔をするが反論が出来ないらしく、そのまま言葉を飲み込んだ。

千冬はさらににつづける。

「織斑、これは決定事項だ。お前と蒼崎が負け、セシリアにクラス代表の権利が移った。だが、セシリアは辞退しお前を推薦した。すでに決まったことだ。異論は許さん。いいな」

はーい、とクラスが返事をするが、一夏だけは苦虫を噛み潰したような難しい顔をしていた。

時間は流れ、進む。

4月の夜、EIS学園の正面ゲート前に小柄な影が現れる。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

夜風に揺れる艶やかな黒髪は左右それぞれ高い位置に金色の留め金で結ばれている。

「えーと、何せつけてあるんだっけ」

頭の記憶を探つつ、上着のポケットから少しずつこじり紙きれを取り出す。

紙きれはくしゃくしゃで、少女の性格をよくあらわしていた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれでいいよ」

文句を言おうと紙きれが返事をするわけもなく、少女は紙きれを上着のポケットにしまつ。

しまつたときに紙きれがつぶれる感覚がしたが当然気にならない。少女はぶつくれと口を動かし歩きだす。思考する前でまず動く。そういう主義だ。

歩きながら思考するが、その中身は少女以外は分からぬ。

(誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人)

学園内の敷地をあっちこっち歩きながら人を探す。だが、あたりは暗く、校舎の明かりは落ちていて申し訳程度につけられた非常灯が足元を照らす。

少女の耳に人が歩く音が届き、あたりを見渡す。見渡した先には人影が見える。少女はこれ幸いと声をかけるために近づき、肩に手をおぐ。

「ねえ、ちょっとといい？」

「ん？ こんな夜遅くに出歩いている生徒は誰かなー？ 千冬ちゃんの出席簿が落ちてくるよつ」

「あれ？ あんた、男よね？」

肩をおいた人は喜色だった。喜色は今日も今日とて専用機が届くのを待っていたが届くこともなく、またかとすでに通いなれた道を歩いていたのであった。

IS学園は女尊男卑の風潮を色濃く反映し、男が入ることは滅多にない。少女が一度性別を確かめるのも当然だった。

「そうだよー 正真正銘の男だよー 早く寮に帰らないと千冬ちゃんから怒られちゃうよー」

「あんた、ここIS学園よ。わかってるの？」

「分かつてるよ。男がIS学園にいたら悪いの？」

少女は『都市をとつてているだけで偉そうにしている大人』と『男というだけで偉そうな人間』が嫌いだ。少女にとって今の世界ほど心地いいものはない。それなのに、それなのに、自分の目の前には男がいる。IS学園はIS関係者しか入ることが出来ない。

研究者か整備士かとも考えたが、研究者にしては知的ではなく、整備士にしては体の線が細い。

少女が学園への侵入者かと考えISの展開を準備するのも当たり前であつた。そして、敵意を示すのも当たり前のことであつた。

「悪いわよ。ISは女しか動かせないのよ。例外はあるけどね。それで、あんたは何者よ」

「僕？　僕はーそうだね……束ちゃんの知り合いつて言つておいつかな？」

「誰よそれ。もつと分かりやすく言いなさいよ

束と言えばISの生みの親の篠ノ之束がいるが、この人は他人に興味を示さなかつたはずと可能性を切つて捨てた。

「あれ、しらないの？　それじゃあ、どうこう風に言つたらいいかな？……そうだ、クイズをしよう!」

「なんでクイズなのよ……」

「さあ、準備はいい？

ヒントその1。僕は、ここで暮らしている。ヒントその2。ここに来たのは入学式の日。さてわかるかな！？」

少女の呆れた表情を見ても気にすることなく、喜色はクイズを始める。

少女は案外ノリがいいようで、喜色から田は離さないが、考え始める。

「つーん？」

「制限時間後三十秒ー」

「え！ ちよ、ちょっと制限時間あるのー？』

「モチロンサアー！」

「あーもー！ わかんないわよー！」

「それじゃあヒントその3。僕の名前はあ行から始まる。ヒントその4。HSのことは基礎知識は大体知ってる」

「あなたの名前なんて言われても知らないわよ…………」

「はいはい、呆れられると僕悲しいよ。制限時間後十秒ー」

「もつとヒント頂戴」

「しかたないなあ、ラストヒント！ 僕はインフィニット・ストラトス、通称ISを動かすことができます。もつ答えを言つたようなもんだよ？」

その瞬間、少女の警戒心はマックスを通り過ぎた。ISを使える男

は少女も知ってる。だが、このような男ではない。それだけは分か
る。なぜならそのEVAを使える男を少女は知っているからだ。

「嘘よ。あんた何者よ。私はEVAを使える男を知ってる。でも決してあんたじゃない」

「うんうん、そうだよね。そう思つよね。でも、見えてることが現実とは限らないよ。そうだよ、俺だよ。俺が、織斑」

もつたいたいぶつた態度で話す喜色に後ろから近づく人影がある。その人影は気配も足音もなく、忍び寄り腕を振りかぶり振り下ろす。

パンツ！

「いち つたあー？」

「私の弟を名乗るな。蒼崎、今何時だ

「や一千冬ちゃんひどいよー なんで足音と気配消してたのさ」

「いま、何時だと聞いていいる

戦場をぐぐり抜けた強者でも尻尾を巻いて逃げだすような気迫で千冬は再度尋ねる。……尋問と言ったほうが正しいかもしねない。

「僕の体内時計ではまだ夜の6時！」

「そりかそりか、そんなに私にじこかれたいか。いいだろう、明日の放課後首を洗つてしまつてお」

「じーかれたいってなんか卑」

「あのー、ちよつといいでですか？」

「ん？ お前は……ああ、転校生か。どうした」

喜色とは違ひ柔らかな物言ひで返す千冬に少女の緊張は少し和らぐ。

「受け付けってどこですか？」

「ああ、まだ報告していないのか。ついて来い。蒼崎、それと寮に戻れ。私が戻ったときにはなかつたら。分かつてゐるな？」 「え、この人生徒なんですか？」

「ああ」

千冬はツカツカと本校舎へ歩きだす。その後ろに少女が小走りでついていく。

あとに残された喜色は名前を聞いてないことを思い出したが、今から聞きに行くのは面倒とゆづくと寮に向けて歩き出した。

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

翌日、一夏が教室にはいつてすぐにクラスメイトに話しかけられる。

「転校生？」

今はまだ四月。なぜ、入学ではなく転入なのだろうと首を傾げる。
IIS学園の転入条件はとても厳しい。さらば、元の国の推薦がないと転入できない。

「そう、なんでも中国の代表候補生らしいよ」

「ふーん」

「あら、代表候補生ですか？ わたくしを危ぶんだのかしら」

セシリ亞が腰に手を当て、一夏のそばにたつ。

「どんなやつなんだろ？」「

「今のおまえに女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるだろ？」「

今度は篠が一夏のそばに来る。一夏が他の女子を気にしたせいだろうか、若干機嫌が悪い。

セシリ亞が名案を思いついたとばかりに、手を合わせる。

「そう、そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦にむけて、より実践的な訓練をしましょ。ああ、相手は専用機持ちのわたくしにお任せください」

クラス対抗戦とは本格的なI.S実習が始まる前のスタート時の実力指標を作るために行われ、クラス単位での交流及びクラスの団結のためという名目もある。

そして、やる気を出させるため、一位クラスには優勝商品として、学食デザートの半年フリー・パスが配られる。女子は自制をしなければあとで地獄をみることになる。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「織斑くん、がんばってね!」

「フリー・パスのためにもね!」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って、一組と四組だけらしいから余裕だよ」

一夏のまわりには女子が集い騒ぎ始める。一夏は気概そぐのも何かと思い、短くおう、と答える。

そんな騒がしい教室に一つ声が入り込む。

「その情報、古いや

聞き覚えのある声に一夏は振り向く。

振り向いた先には腕を組み、片膝を立てて扉にもたれていいる少女がいた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。ファンリュンイン今日は宣戦布告にきたの

小さく笑みを漏らし、ツインテールが軽く揺れた。そんな鈴音に一夏は一言。

「すげえ似合つてないぞ」

「んなつ……！？ なんてことないのよ、アンタは…」

こんな言葉が来るとは思わず、口を開けてしまった鈴音。クラスは突然の乱入者を見つめるばかりで、声をたてる者はいない。鈴音が言い返そうと唇を運らせたとき後ろから声がかかる。

「はい、どいてねー。そこ邪魔だよ。……あれ？ なにこの空気。なになに？ なんか楽しそうなこと？」

「おー蒼崎か。楽しいかどうかはわかんねえ。とりあえず教室に入れよ」

鈴音の後ろに現れた喜色を一夏は手招きする。

「あれ、その声は？」

「邪魔だつて。どいてよ」

「あ、あんた、昨日の…」

後ろを振り向いて喜色の顔を見た鈴音は驚き、一歩飛びのぐ。そんな鈴音を見ても気にせず都合よく道が開いたと、教室に入り一夏の隣の自分の席に座る。

「主人公、なにがあったの？ それあの格好つけてた子は何がしたかったの？」

「俺の幼馴染だよ。何がしたかったって言われても格好つけたかただけじゃないか？」

喜色の質問にチラチラと鈴音を見ながら声量を控え目に答える。鈴音は聞こえていないようだ、首を傾げ一夏と喜色を見つめている。

「ああ、なるほどね。久しぶりの幼馴染との再開で舞い上がりつてたつて事だよね！ ね、そこの女の子？」

「え、ちょっと一夏ー。」いつになに言つたのよー。」

一夏が声を控えた意味もこれで無駄になってしまった。喜色の言葉は図星だったのか鈴音は顔を赤くし、自分の顔が赤くなつた原因の喜色ではなく、一夏に非難の声と視線を向ける。

一夏を睨みつけていた鈴音の後ろに昨夜と同じように1人、人が立つ。

「おい」

「なによー？ 私は今忙しいのよ あつ

バシンツ！

鈴音に出席簿が落ちる。千冬の顔を見た鈴音の顔がピクピクと引きつる。

「もうSHRの時間だ。チャイムは鳴っている。教室に戻れ」

ショーとホールーム

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。もう、教師と生徒だ。ケジメをつける。ちつさ
と戻れ」

「は、はい……」

すじすじ」と教室から出でていく鈴音は千冬がとても苦手のよひだ。そ
して、捨て台詞のよつに一夏を指す。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ一夏ー それとそこのある
たも！」

「ちつさと戻れ」

「は、はい！」

教室を出て、二組へ向かって走り出す。走り去る鈴音の後姿を見て
一夏は思つ」ことが一つ。

「ちつていうかアイツ、HS操縦者だったのか。初めて知った」

その言葉に過剰に反応した篠とセシリア。2人につられて、クラス
メイトからも質問が火を噴ぐ。

ババババババンッ！

「座れ、馬鹿ども」

静まらないクラスに千冬の出席簿も火を噴く。

有耶無耶になつた一夏と鈴音の関係が篠とセシリアは授業中も離れる「ともなく、授業に集中できず千冬の出席簿が火を噴いた。

一日の授業が終わり放課後に一夏は篠とセシリアと特訓を終え、鈴音に篠と同室ということがバレ、一夏は夕食を終え部屋でお茶をいれてくつろいでいるときにはまた波乱やつてくる。

「どうわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！ なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！？」

「いやあ篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？ 気を遣つてのんびりできないし。 あたしは平氣だから代わってあげようかなって思つてた」

「べ、別にイヤとは言つてない……。それに、これは私と一夏の問題だ。部外者が入り込む余地はない！」

「大丈夫、あたしも幼なじみだから」

「やつこつ問題ではない！」

一人の話は噛み合つ様子も口を挟む隙間もない。二人の相性は例えるなら水と油だらうか。それほど恐ろしく合わない。そして、鈴音はただ部屋を代わるように交渉に来たわけではないようだ、足下にはボストンバッグが置かれている。

「とにかく、今田からあたしもここで暮らすかい」

「ふざけるなー。ここは私の部屋だ出て行けー！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？ じゃあ問題ないじゃん」

「こじで、言葉を区切り同意を求めるように一夏を向く鈴音。籌も一夏に自分の言い分に同意を求めるように顔を向ける。一夏は逃げるよつこ答へる。

「俺に振らないでくれ……」

「とにかく、部屋は変わらないー出でこるのはそつちだー。早く出でこー！」

「とこりや、一夏。約束覚えてる?」

「む、無視するなー。ええい、こいつなつたら力づくで……」

「あ、馬鹿」

自分を無視され、ずつずつしぶしぶ部屋を出て行けと言われた筹は激昂、ベットの横に置いていた竹刀を握り、一夏が止める間もなく無防備

に見える鈴音に竹刀を打ちこむ。打ちこまれた竹刀は大きな音を響かせた。

「鈴、大丈夫か！？」

「大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは 代表候補生なんだから」

「……！」

鈴音の頭に打ちこまれたように見えた竹刀は、部分展開されたISの右腕で防がれていて、竹刀を打ちこんだ筈は驚いていた。
ISは展開しなければただの待機状態にある機械だ。既存のISは危険を察知して勝手に展開されたりはしない。展開して初めてハイパーセンサー や シールドの恩恵を受けられる。ということはIS展開速度はに展開を指示する人間の反射速度を超えることは絶対ない。操縦者が人間でないなら別の話だろうが。

篠ノ之は剣道の全国大会優勝者だ。実力は並ではない。その篠ノ之の打突をしつかりと防いだ鈴音の実力も並ではないことが分かった。

「ていうか、今の生身の人間なら本気で危ないよ？」

「う……」

筈は居心地が悪そうに鈴音から顔を反らす。

「あれ？ なんでIS展開してるの。なに？ 生身の人間とISで戦おうとかいう一歩手前？」

「違うわよ。ただ、ちょっと揉めただけよ」

「ふーん……。ま、篠ノ之内ちゃんと鈴音ちゃんが戦つてこうなら僕も呼んでね。正々堂々不公平にジャッジしてあげるから」

「いや、それ正々堂々って言わないから」

一夏の部屋にてヒョウコリ顔を出した喜色は場のギスギスとした空気を感じ取り、なんとか和ませようとする。そして、一夏も話を逸らして場を明るくしようとする。

「せういえば鈴、約束つてこりのば」

「う、うん。覚えてる……よね？」

顔を伏せ、上田遣いで一夏を見つめる。恥ずかしそうな顔を見て幕が顔をしかめる。

「えーと、あれか？ 鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を

「そ、そつー それ！」

「おうしてくれたひやつか」

「…………はい？」

しつかり思い出せたと血變げな顔で約束を言った一夏にて、鈴音は声が出なくなってしまう。

「だから、鈴が料理できるようになったら、俺に飯をじかそうしてくれるって約束だろ？ こやしかし、俺は自分の記憶力に関心

パンツ！

「……へ？」

乾いた音が部屋に響く。頬を叩かれた一夏は状況が、何故叩かれたか理解できずまず筹と田を合わせる。筹は一夏と同じように状況が理解できない。次に、喜色の顔を見る。喜色は鈴音をチラッとみて何故叩いたか分かったようで、苦笑いを浮かべる。苦笑いをしながらも唇だけを動かす。

「（く・た・ば・れ・ど・ん・か・ん・や・ろ・う）」

「え、えーと」

「.....」

一夏はゆっくりと鈴音の顔を見る。鈴音は、肩を震わせ涙が溜まり怒りに満ちた目で一夏を睨み、唇を固く結んでいた。

「最低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ね！」

そう言つと床においていたバックを持ち上げ、扉を蹴り開けて部屋から出していく。

バタンッ！ と大きな音を聞きに、一夏はやつてしまつたと心の中で呟く。

「……まあい。怒らせちまつた。でもなんで怒つたんだ？ それに泣いてたよな……」

鈴音が走り去る直前の顔を思い出す一夏に声がかけられる。

「一夏」

「お、おひ、なんだ算」

「馬に蹴られて死ね」

グッと声を漏らす一夏に追撃がかかる。

「主人公」

「ビ、ビ! した蒼崎」

「猪にど突かれて死になよ」

「なあ、蒼崎なんでだよ!」

「一応フォローはしどから自分の言つたことをよへ思つ出すといよ、豆腐の角に頭ぶつけてくたばれ」

喜色はそういう残して鈴音のあとを追いかけていく。

「……はあ、わけわからん」

まだ九時前だが、布団に一夏は潜り込む。明日には状況が変わっていることを願つて。

そう簡単に変わるわけがないのだが。

一夏の部屋から駆け出し、がむしゃらに走った鈴音がたどり着いたのは海に近く、薄暗く、人が近寄らない校舎裏だった。今、誰にも会いたくない鈴音にはうつてつけの場所だ。

「なんでそんな風に覚えてんのよ……」

ボストンバッグはそこいらに放り投げ、制服が汚れるのも構いなしに自分も地面に腰を下ろす。

「変な女がいるし……」

「昨日はあの女と楽しげにしゃべってたし……」

思い浮かぶのは一夏の隣にいた自分を攻撃してきたポニー・テールのあの女。一夏はその女の隣にいて、楽しげに笑っていた。本当は自分が行う場所なのに。

一夏は随分変わっていた。背は伸び、声が変わり、見た目も格好良くなつた。でも、中身は自分が転校していった時と全く変わってなくて、一目見てすぐに自分と分かつてくれたのが嬉しかつた。

「なにしてるのかな鈴音ちゃん？」

「……なによ。なにしこきたの」

鈴音を照らしていた僅かな月明かりが遮られる。昨日の夜に聞いた

声が聞こえた。

薄暗くて助かつた。明るいとみつともない泣き顔が見られてしまつだらうから。

「まあ、乙女に男のからのアドバイスみたいな？」

「こりない」

「やう言わすに。隣座るよ、いい？」

「……勝手にすれば」

喜色は鈴音の隣に寝転がつて、お願いしてもないのに勝手に話し始める。

「やうだね、僕はまだ織斑一夏を知つて1ヶ月もたつてないけど分かることはある。あいつ、物凄い鈍感でしょ？」

「……うん」

「鈴音ちゃんが今怒つてて、泣きたいのは織斑一夏が約束をまちがえておぼえてたからでしょ？」

「そうよ。なにが言いたいの」

「その約束を当ててみよつか。そうだね、『私の味噌汁を毎日飲んでくれる』みたいな事を言つたんでしょう？」

「……味噌汁が酢豚だけどね」

「それせどりでもここよ」

鈴音の指摘を切って捨てる。そして喜色の話はまだ続く。

「今一番重要なのは、君の好意に鈍感なアイツがどりやつたり~~ひ~~ひづくか、だよ」

「べ、別にあたしは一夏が……」

「嫌いなの?」

「違うわよー 嫌いなわけないじやない!」

鈴音が顔を赤くするのがわかり、喜色は小さく笑う。

「ふーん……まあ、味噌汁飲んでじや駄目なら直接言つしか無いんじやない?」

「は、恥ずかしいじゃない!」

「なら既成事実を使うしか手がないよ

「無理無理無理っ! 前にそれしようとしたら、千々也んが……」

「やつぱりあの人も主人公スキーか。それなら自分で考えなよ。今言つたのは最終手段だから他にも方法はあるんだから」「

話は終わつたといつよつと喜色は勢いに任せて立ち上がる。

「あたし馬鹿だからわかんないよ…………」

鈴音の囁きに喜色は歩きながら口を開く。

「…………」からは独り言だけど、なにかで勝つて一つ願いを聞いてもらひそばいいんぢやない」

「…………」

バツと伏せていた顔をあげ、喜色の背中にむけて声をかける。

「あ、ありがと……」

「早く帰らないと春と言つても風邪ひくよ」

喜色は後ろを振り向くことなく寮に戻つていった。

鈴音はすぐ後に自分の両頬を軽くたたき、この場所に来たときとの暗い気持ちではなく、若干明るくなつた気持ちになつて歩いていった。

た。

翌日、玄関前廊下に張り出されたクラス対抗戦の紙には一回戦田で

一夏と鈴音が戦うことになつていた。

これをみた鈴音がすぐさま一夏の部屋に走り、負けた方が勝つた方の言つことを聞くという約束をとりつけたのは簡単に分かることだつた。

5話目 転人生、襲来（後書き）

あるえー？ 鈴音こんな性格だつたけ？
といつか最後H……喜色誰だよテメエなレベルwww
といつか篠ちゃんまじ空氣www
束さんが怒つて出てきやつ。

さて、次は閑話を入れる予定です。

まあ、変態どもが出てくるかもよ！？
といつか、予定だと束さんが悪者になつてしまひ。ビハニマヘ……
束さん大好きなのに。

以下、どうでもいい独り言

アーマードコアとHースコンバットとAヒツヒヤヤコシ。アーマー
ドコアで調べよヒタヒと打つたりほほほほほーんが出でへる
Hースコンバット新作やりたいなあ

専用機製作現場（前書き）

ほとんどか余話です

専用機製作現場

「さて、今ここに世界で2人目のIIS操縦者のためにと篠ノ之博士から送られてきた、IISコアと我々の発想力では思いつかないような兵器の設計図が入れられたらメモリがある」

その部屋はカー・テンが全て引かれ日の光が一切入らず照らすのは、そこにいる人が使っているパソコンのディスプレイから漏れる光だけだった。部屋には大きく丸いテーブルがあり、人の顔が簡単に見れるようになつていて、テーブルには複数のパソコンがあり、電源がついていないものもある。

机の上で手を組んだ中年の男がリーダーのよつて、司会のように話を進める。

「各自ディスプレイを見ててくれ。ここにあるのは今の技術力では突破出来ないような装甲や、発想する事さえなかつた兵器の設計図だ。特にこのゴジマ粒子というものは今のエネルギーとは比べものにならない。有毒性があるようだが、ご丁寧にも篠ノ之博士が取り除く方法を添付してくれている」

「それであなたは何をしたいの？」

「そんなことか。決まっているだろう？　なあ、若いの」

「ええ、新しい技術にIISのコア。やることは一つしかないです」

若い女の声がし、中年の男はさも当然といった風に答え、隣にいる男に問いかける。問われた男は他になにがあるというように胸を張つてはつきりと答える。

「「」の技術を使って超ハイスペックで白騎士にも勝てる魔改造で

きるISを短期間で作り上げる！」

「で、その作ったISは人に扱えるの？ 扱えないんなら宝の持ち腐れよ」

男2人で声を合わせ一言一句同じ言葉を言つ。女はあきれ返った声で尋ねる。

ISは人が扱う機械だ。無人機などではなく、人が動かさなければならない。加速するだけで人間が潰れるようなISや、IS適性以外にも適正が無いと扱えないなどもつての外だ。

「安心しろ。篠ノ之博士から操縦者のデータは届いている。見てみろ」

「え、これって……」

ディスプレイに田を落とし新しく表示されたウィンドウを眺めていく女の顔は次第に険しくなっていく。

「ええ、体をいじられているようです。対G耐性や、身体修復能力の強化、神経の光ファイバー化とともに機械信号を処理可能に。さらに全神経伝達速度の向上により反射速度などのスピードが向上します。他にもいろいろありますがまあ、主なものはこれくらいでしょうか。しかし、これだけの事をやってしまう人がいたとは。素晴らしい」

「なかなか面白い事をやられているよな。本人も気にしていないらしいし、やりたいようにやつても大丈夫だろう。なにか質問は？ ないのならこれで第三三五回最高の武装はなんだろなつ！？ 討論会 + を終了」

男が締めくくるとしたそのとき、カーテンがいつせいに開く。明るい日の光が部屋に差し込み、3人は顔をしかめる。

「何バカなことやつてんすか？ あたしが思つてこのIISは最高の物を作らなきゃ篠ノ之博士にこの会社が潰される氣がするつす」
「そんなことがあるわけが……」

男は考える。篠ノ之束のしたことを。IISの性能を世界に知らしめるため世界中のミサイル基地を並列してハッキング、実際に発射する。興味が無いものには徹底的に興味が無い。世界中の裏で違法にIISを研究している研究所が最近よく潰されている。そして極め付けがこの「ニアとメモリ。世界中の組織に呼びかけばこの一つを少しでも見よつと、おこぼれに預かるうと一斉に飛びかかってこられるだう」。

「……あるな」
「あるわね」
「ありますね」
「ヤバいっすよ。しかもタイムマシンは2週間っす」

お互に顔を見て、頷きあう。状況はややまずい。IISを構想から作るのに一週間など有り得ない。IISの制作は普通は長期的なものだ。だがこの四人も所詮天才だ。そして一度何かに熱中し始めると止まらない、止められない、止まる気がない。毎日仮眠三十分など日常茶飯事だ。つまり、なにが言いたいかといふと。

「よし、やるか」
「未知の技術……ああ、ゾクゾクするわあ」
「あまり興奮しないでくださいよ……」
「腕がなるつすねー」

変態が興奮するだけの話だ。それぞれ、腕まくりをしたり、服の襟を正したり、眼鏡をクイッとあげたり、エイエイオーと腕を振り上げたり、2週間完徹を物ともせずに作業にうつるのだった。

IS作成途中の四人の様子

「む、グレートウォール？　ふむ、装甲の部分は見たことがない理論だな……。これをISに流用すれば……」

「ふーん、プライマルアーマーにアサルトアーマーねえ……。随分面白いことを考える人がいるのね。普通は考えもしないわよ」

「クイックブースト、オーバーブースト。瞬間加速より性能は上、しかもコジマ技術を使えばエネルギーは回復する。これが世に出たらIS戦闘がひっくり返りますね」

「うーん、ISの装甲は部分的つすけどこのACってのは全身装甲つすか。……くうう！　口マンツ！　この無機質などフォルム！　戦闘のために研ぎ澄ませたこの設計一組み合わせが無限大！　全てのISがこんなんだつたらいいっすのに！」

「さて、案を纏めよう。私はこの装甲を使いたい。このネクストと
いうACの火力をもつてもしても破れない装甲だ」

「全身装甲の出番っすね！？ その装甲に身を包めば要塞になれる
っす！ 一人要塞……憧れんっす！」

「ではその一人要塞を高機動化しましょ。この一つをIHSに組み
込めば既存の兵器やIHSは追いつくことなどどうあがいても無理で
しょう！」

「ふん、それだけじゃ駄目でしょ？ やつぱり最後に通じるのは力
よ！ というわけで、これの広範囲殲滅が可能になるこれを使うわ
！」

「ほう、それを使うとなればさうに一人要塞になってしまいますね」

「大丈夫だ、問題ない。むしろ足りないくらいだ。こんな最高の技
術をもらつたんだ、最高のものを作らなければ技術者の恥だろ？」

「それじゃあ、デザインはいいですか？ 性能だけが高くて格好悪かったらイヤですよ」

「ああ、当たり前だ。そのようなものはスクランブルにしてくれる」

「もううん幾つかデザインはあるんでしよう?」

「ふつふつふーモチロンですよ。まあ、どれがいいですか？」

「せり……」

「いれは……」

「あなた……」

「「「素晴らしい」」

「こや、複数案出してみますからそれじゃ分かんないつす」

「当然この灰色だわ」

「白はちょっと狙ってさげね」

「この逆関節は少しおまつこ過ぎますわ」

「となればこれしかないだわ」

「えー自分は白がよかつたつす。ま、三人がこれと言つならこれでいくつす。ちなみにこれをデザインしたのは自分っす」

「あ、そつだ。装甲の内側はどりするの?」

「どりする……とは?..」

「内側はスカスカのままよ。特に胴体。どりするの?..」

「ふむ……なうばいれを直接こじにやつてしまえば……」

「それならここもこうすれば……」

「その手があつたわ。これなら素晴らしいものになるわね」

「では、内部の方針はこれでいく?」

「どじろで武器はどうあるつか? やすがにアサルトアーマーとかこののだけじゃキツこと思つてく」

「「「え? それは……」」」

「実弾の大砲身の大砲しかないだろ?」

「高威力のレーザー兵器しかないです」

「ブレード一択でしょ?..」

「あんたらアホっすか！？ なにその極端な武装！ 柔軟性もクソもねえっす！」

「せう地団駄を踏むんじやない」

「アホ。 一 点特化があれば他ほこらなこわよ」

「アホですよ、あなたはどんな状況でも打ち破ることができるものを作れないと？」

「……その一 点特化が複数あったりビリなつすか？」

「せうせう……」

「それは……」

「あまつしゆわよ」

「……アヒトモ画面アヒトとなる」

「アヒツスカ……。 それじゃあみんなが作った武装を全部積みます。 生半可なものだつたら自分が許さないつす」

「よし、持ち場に戻れ。このIIS、妥協は許さん。最高の物を作ろう。ああ、あと有害物質を取り除く装置をもう一度、一から調べなおしておいてくれ」

専用機製作現場（後書き）

……変態っぽくない。

ぼやかしたところも……。

専用機は想像に頼るといつことになりました。

以下、どうでもいい独り言

ヒロイン決めてなかつた。（・・・・・）

どうしよう。これハイスピード学園バトルラブコメでしたよね。

ハイスピード？ いいえ、のろのろです。

学園バトル？ バトルにもなってないです。

ラブコメ？ それなあに？ おいしいの？

どうしよう。一応予定はあるけど一人だけ。こうなつたらラスボス級のちーちゃんを……。

6話目 クラス対抗戦の始まり

クラス対抗戦当日

第一アリーナ第一試合

織斑一夏 VS 凰鈴音

世界の噂の渦のど真ん中にいる一夏とEHS学園への転入生の鈴音の戦いとあってその注目度は半端なものではなかった。アリーナは満席で通路に立つたまま試合を観戦しようとする生徒もいた。会場の外でもリアルタイムモニターを見つめている生徒もいる。

一夏と鈴音はすでに会場で試合開始の合図を今か今かと待っている。喜色や籌、セシリ亞はピットのリアルタイムモニターを見つめていた。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「ズズメの涙くらいだろ。そんなのいらねえよ」

一夏は強がりではなく本心からこの言葉を言つ。一夏は勝負で手を抜くのも抜かれるのも大嫌いだ。勝負とは全力で戦つて初めて意味がある、そう一夏は思つてゐる。

「一応言つておくけど、EHSの絶対防御も完璧じゃないのよ。シリードエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

鈴音の言葉は本当のことでありそのことを目的として作られた武装

もあることにはある。もちろんスポーツであるエスにとつて競技規則違反であり、命に危険が及ぶ。つまり、最強の兵器といわれるエスでも殺さない程度にいたぶる』ことは可能である。

『それでは両社、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響き、鳴った瞬間から2人は動きだした。

ブザーを聞くなり俺は鈴に雪片式型を手に鈴に斬りかかるが、鈴は異形の青竜刀を持つて雪片式型を迎撃つ。

「ふうん、いきなり切りかかるなんて勇氣があるわね。でもね」

両端に刃のついた異形の青竜刀を回転させ鈴は俺に斬りかかる。刃の角度を変え、高速回転させながら斬りかかってくる。このままじゃ消耗戦になるだけだ、一旦距離をとろう。

「甘いわよー」

鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光り、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

なにが起きたのかも分からず慌てて回避しようとする俺に鈴は不敵な笑みを浮かべた。

『今のはジャブだからね』

牽制の後は本命と相場が決まっている。鈴は直感型だ。俺が慌てている隙を見逃すはずが無い。

ドンッ！

「グゥツ！？」

またしても見えない拳に殴られて地表に叩きつけられ、鈍い痛みがシールドバリアーを貫通して届いていた。シールドも既に80近く無くなっている。これは非常にまずいな……

「なんだあれは……？」

「衝撃砲ですわね。空間に圧力をかけて砲身を生成、過剰で生じる衝撃それ自体を砲弾として打ち出す第三世代型兵器ですわ。不可視といつアドバンテージはとても強いですわね……」

ピットにあるリアルタイムモニターを見つめながら幕が呟く。幕の疑問にはセシリ亞が答える。そして一夏にヒントを『え?』といふことができない自分に対して歯がみをするのだった。

「それほど強くないよ

「え?」

喜色が呟いた言葉にセシリ亞は驚きの顔とともに振り返る。振り返つて自分を見たセシリ亞には田もくれず、モニターを見つめたまま喜色は続ける。

「空間を圧縮して砲身を作っているならそれなりのエネルギーを使うはずだよ。それに衝撃砲は面制圧じゃない。エネルギーを感じして、少し早めに動けばいいだけの話だよ」

「い、いや、それが難しいので一夏さんは苦戦しているのだと想つのですが……」

難しい事を当たり前のように言つ喜色とそれに困惑つセシリア。2人の傍で筹は幼馴染の無事をただ願つていた。

強い。

それが鈴と戦つてゐる俺の感想だ。基本の全てを高レベルで習得し、接近すれば青竜刀と衝撃砲で、距離をとれば衝撃砲で攻撃してくる。衝撃砲は弾丸も砲身も見えず、360度全てに弾丸を撃つてくる。何か意表をつかなければ勝ち目は無い。千冬姉が教えてくれたこの雪片一型のバリアー無効化攻撃があれば、一回でも入れば勝ち目が見えてくる。だが、それをやるには鈴の懷に潜りこまなければならない。

「鈴」

「なによ?」

「本気でいくからな」

「いいわ、来なさい。わたしが勝つた時のこと忘れたなら怒るからね」

一週間で身につけた『イグニッション・ブースト瞬時加速』を使えば一瞬で鈴の懷に潜り込め

る。

「「おおおおおおおお」」

バリアー無効化攻撃を放ちながら鈴に接近する。

ズドオオオオオンッ！

「！？」

刃が届くと思った瞬間に鈴の衝撃砲とはケタ違いの威力と範囲の衝撃がアリーナに響く。

ステージ中央から煙が立ち上がっているようだ。

『一夏、試合は中止よー。すぐここピットに戻つて!』

状況が読み込めず混乱する俺に鈴からプライベートチャンネルが飛んでくる。

なにを言つんだと言い返そうとした瞬間、ステージ中央からレーザーが飛んできた。

「んなつ！？」

レーザーは何かキラキラした物質を放出しながら俺のすぐそばを通り抜ける。ハイパーセンサーが感知した熱量はセシリ亞のレーザーより出力が上。自分の背中に汗が噴き出すのが分かる。

煙が晴れてきてレーザーを撃つてきた本人を確認することが出来る。アリーナへの乱入者はISだった。手が異常に長く頭と肩が一体化しているような形で随分とおかしな形だった。そして一番目を引い

たのがそのI-Sの装甲だった。

『全身装甲』と呼ばれ、体全体を防ぐことが出来る。だが、I-Sにおいてはそれは異常だった。I-Sの防御は殆どがシールドエネルギーがになっている。なので普通は部分的にしか装甲はない。

『織斑くん！ 鳳さん！ 今すぐアリーナか脱出してください！ すぐに先生たちが制圧に行きます！』

山田先生から通信に入る。

引く？ 無茶な話だろ。遮断シールドを簡単に突破してきたI-Sを放つておいて俺たちが逃げると観客席にいる人たちにターゲットが移る可能性がある。ならば絶対防御もあるI-Sを使っている俺たちが足止めしておくのが最善だと思つ。

「俺たちが食いとめます。じゃないと他に被害が及ぶかもしれない。いいよな鈴？」

「当たり前よ！ 行くわよ！」

鈴の気合も十分。まだエネルギーには余裕がある。俺と鈴は飛び出した。

「もしもしー？ 織斑くん！ 鳳さんー？ 返事してくださいーーー！」

非常に焦り、声を出す必要のないプライベートチャンネルに声を使

「ついでに焦つてこる真耶を千冬がなだめる。

「本人たちがやると言つて居るのだ、やらせてみよつ」

「お、お、織斑先生のんきなことを言つてる場合じゃないですよー。？」

「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイフイフするんだ」

落ち着けと言つて居るが一番落ち着いていないのは千冬だ。その証拠にコーヒーを混ぜる手は小刻みに震え、コーヒーに入れている白い物体は砂糖ではなく塩だ。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「何故塩があるんだ」

「え、まあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど

「……」

「……」

沈黙。部屋は沈黙し、真耶は自分の息すらも止めたくなる。しかし唐突にその沈黙を破る者はいる。

「先生！ 蒼崎さんと篠ノエさんを見当たりません！」

「避難したのだらつ。オルゴット、お前も避難を……」

部屋に飛び込んできたセシリ亞は髪を振り乱しながら千冬の言葉を遮る。

「違います！ 蒼崎さんが急に立ち上がりて……どこかに駆けだし

て……」

「どうこういじだ? 詳しく話せ」

セシリアのただならぬ様子を見て千冬はセシリアを見つめる。セシリアは切羽詰まつた様子で話しだす。

「煙の中からレーザーが出たあとにこきなつ『ゴジマ粒子』と書つた後どこかに……」

「ゴジマ粒子? その時の蒼崎の顔はどうだった」

「なにか……そう、世界の終わりを見たような、そんな顔でしたわ」

「世界の終わり? あの常に笑つている蒼崎くんがですか?」

喜色は常に笑みを浮かべていて捕らえどいのない人間だ。この数週間喜色の補習を受け持つていた真耶はそれが少し信じる」とが出来ない。

千冬はセシリアを促す。

「ふむ……それで、篠ノ之は?」

「篠さんはわたくしが蒼崎さんに戦をとりわけいたとき二つの間にか

「やうか。ひとまずお前も避難しろ」

「逃げるなんてできませんわ! わたくしに出撃許可を!」

「無理だ」

千冬は簡潔に答え端末の画面を数回たたき、表示された画面をセシリ亞に見せる。

表示された画面には第二アリーナのステータスチェックの数値が表示されていた。

「遮断シールドがレベル4に設定？ 麻が全てロック……。あの工Sの仕業ですかー！？」

「そうだ。オルゴット、お前に出来ることは無い。当然私にもない千冬の手は画面を忙しなくたたいており、その苛立ちが目に見えて分かる。

「IISでシールドを突破すれば……」

「スナイパーライフルとビットでビットやつてレベル4設定のシールドを突破する気だ？ 雪片か超高出力の兵器でもないと不可能だ。避難しろ」

「しかしつ……！」

「これは命令だ。避難しろ」

何もできない自分が悔しくてセシリ亞は手を握りこむ。そのセシリ亞の隣で千冬は異様に鋭い視線をアリーナの方向にむけていたが、それに気づく人はいなかつた。

俺は突然現れたISを無人機と仮定して、次は全力で当てると言った。鈴も俺を信じてくれておれに全てを任せると黙つてくれた。

「一夏、どうしたらいいの？」

「俺が合図したらアイツに向かつて衝撃砲を撃つてくれ。最大威力で」

「いいけど当たらないわよ？」

「いいんだよ、当てる必要は無いんだから」

絶対に勝てる方法が一つだけ、一つだけあるんだから。

「それじゃあ、早速」「

俺が構えて、鈴も衝撃砲の発射態勢をとつた瞬間アリーナのスピード

カーが大きく振動した。

「一夏あつ！」

「な、なにしてるんだよ」

その声は筈のもので中継室を見ると筈が審判とナレーターをしてマイクを握っている。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてどうすんなー。」

キーンとハウリングが起こる。ハイパー・センサーで見た簫は怒つていふとも焦つているともとれる言によつがない表情をしていた。

「……」

気がつくとエリはいまの大きな音に興味を持ったようで俺たちではなく簫のほうにセンサー・レンズが向いている。

まづい。まづいまづいまづいまづい！！

「簫、逃げ」

体感時間が急に短くなり、見るものすべてがゆっくりと見えた俺が見たのは砲口のついた腕を簫に向くよつとしているエリだった。俺は突撃体勢をとり加速しようとする。まだ、エリは腕を上げ切つてない。まだ、簫に向けられていない。

「……え？」

時瞬時加速をしようとした俺のすぐそばを一つの影がゆっくりと見える俺の視点でも残像しか見えないスピードで通り過ぎていった。

その影は一気にエリに接近し上がりかかつた腕に向かつて脚を振り上げ、そのスピードをはるかに上回る早さで振り下ろした。そのままエリに余裕をとえず回し蹴りを繰り出し壁に向けて蹴り飛ばした。

「主人公、鈴音ちゃん、生きてる？」

そのエリを蹴り飛ばした人がようやく止まり姿を見ることが出来た。

その人は俺の隣の席にいつもいる蒼崎だつた。

いや、待て。ちょっと待て。待ってくれ。蒼崎がISを蹴り飛ばした？ 見る限りISを展開もしていない蒼崎が？

「ちよ、じつこいつと一緒に…？」蒼崎、アンタ今生身よね…？」

「ちつだけど、じつかした？」

「アンタISを吹っ飛ばすってなにをしたのよ…？」

鈴が俺の言いたいことを言つてくれた。鈴の質問には興味を示さず俺の目を見つめしていく。

「主人公、早くここから出て。シールドのレベルは跳ねあがつてんだろ？ それならシールドを破れるから」

「ここから出て…蒼崎、お前生身だろ…？」

「いいから早く出て。僕は大丈夫だから」

「そんなのできるわけないだしそ。ISは最強の兵器なのよ」

大丈夫って言つても無理なものは無理だ。生身でいる蒼崎をおいて逃げることなんてできない。しつかにはISが2機ある。勝つこともできるだら。

「なんでもんなに出来ないといふんだ！ それになんて危険などいりに入ってきたんだ！」

「ホントに危険な場所になるからだよ。あんな鉄くずは危険とも言

えない。頼むから、出て」

冷たい感情のない目で俺を見る。いつもの一コ二コとした顔ではなく鋭い千冬姉が戦うときみたいな目。ハイパー・センサーが敵ISの方に動き警告してくれる。

敵IS 攻撃体制に移行。危険。

「伏せて！」

「え？」

「伏せるのよ！ 一夏！」

突然蒼崎が怒鳴り、困惑する俺を鈴が押しとばす。直後、俺のすぐ横をまたしてもレーザーが通り抜ける。レーザーが通ったあとにはキラキラとした綺麗な何かが漂っていたから手に取ろうと手を伸ばす。

「触るな！」

「つー？」

「主人公、絶対にそれに触るな。それは核物質よりタチが悪い有害物質だ」

「え、それってここにいるのもヤバいんじゃないかな？」

隣で鈴が息を大きく吸い込み止める音が聞こえる。核物質よりタチが悪いってどんだけ凶悪なんだよ。

「主人公、鈴音ちゃん」

「詳しく述べから今は出て行ってくれ」

「……断る」

なんで敵が目の前にいて戦うことが出来るのに逃げ出さなきゃいけない。俺はそれほど弱いと思われてるのか。

「弱いよ。どうしようもなく弱いよ。例えいまこので織斑千冬が来たとしても戦力にはならない。むしろ足手あとついだ」

「 プハアッ！ 千冬さんでも足手あとついだりしないことよー。」

蒼崎は今まで出したことがない大声を俺たちに向ける。

「 君たちは分かるのか！ 核物質の数百倍のスピードで汚染される恐ろしさが！ 理解しているのか！ 以降超長期間もの間草木が一本たりとも生えず砂漠化することの クソッ！」

またレーザーが飛んでくる。今度は一本だけじゃなく大量に飛んてくる。全て蒼崎に向けて。

俺のハイパー・センサーが感知するより先に蒼崎は動き出した。動きながらも俺たちに声をむける。

「 ああ、もうつ！ シールドと汚染が！ じょうがない！ 一夏、鈴音、隅で体を小さくしていろー。」

「 鈴、行くぞ」

蒼崎が初めて名前を呼んだ。この数週間、どんなに驚いたりじょつ

と決して崩せなかつた呼び方を。よほど切羽詰まつてこむと理解し
鈴を呼ぶ。

「行くひでビー」へよー、まあか言ひついとを聞くへ氣ーー。」

「アリだよ」

「なんだよー、なんで龜に言つひとを聞くのーー。」

「呼び方だよ。あの蒼崎が呼び捨てで俺たちを呼んだ。それだけ切羽詰まつてるんだろ? よー」

「た、確かに呼び捨てだつたけど……。でもそれだけで言つことを聞くのーー?」

何時までも経つても戦う氣でいる鈴。なんで分からんんだろ。やつぱり男と女の差か?

このままだと埒があかないから鈴の肩と膝裏に手を通して抱きかかる。多少失礼かもしれないが緊急時つてことで許してもらおう。

「ちよ、一夏、なにを」

「暴れるなつて。落ちるぞ。といつか隅に投げるぞ」

「ア……」

急におとなしくなつた鈴を抱え避難する。

一つもレーザーが来ないのを不思議に思つて、中心を見ると蒼崎がこっちに攻撃が来ないよう立回つていた。

蒼崎の邪魔は出来ないな。おとなしく小さくなつてこよー。

俺は蒼崎の無事を願うしかなかつた。

6話目 クラス対抗戦の始まり（後書き）

IS蹴飛ばすって……

次の話で謝りたい人がいるので今のうちに謝つておきたいと思います。

篠ちゃんごめんねえええ！！ ひどいこと言つてごめんねえええ
え！ 許してくれとは言わないけど許してえええーー！

以下、どうでもいい独り言

15日に韓国が2回にサイバー攻撃とか言つてましたけどなんも
なかつたんですよねえ。何があつたんです？

→話題一　壁の戦闘（牆壁や）

幕ぢやんじぬんねえええ！

7話目 一瞬の戦闘

ゴジマ粒子

それは取り出すことの出来るエネルギーが既存のものの何倍も、何百倍もある夢のようなエネルギー。しかしそう夢のエネルギーなどあるわけがない。

ゴジマ粒子を使った機関を使用する機械は今までの機械と比べ、比べものにすらできない性能を叩き出す代わりにどうしても無視することの出来ない欠点があった。

汚染物質の散布

汚染物質は土地を不毛の大地に変え、空気を汚染し、生物を住めなくする。無視することなど出来るはずが無かつた。研究者は真っ当な人間だった。完成した研究結果をすぐさま自身が所属していた研究所の最高機密ファイルに隠した。

だが、世界とは奇妙なものだ。奇跡とは簡単に起る。

もし一人の子どもが実験台では無かつたら。もし世界に名を知らしめる天才が気まぐれで研究所を破壊しようとなれば。もし実験台の子どもが気絶していなければ。もし天才が気まぐれで実験台だった子どもが大変そうに持っていた記憶媒体を見ようとしなければ。もし、もし、もし。一つでもこの『もし』がなかつたらこのような事にはならなかつただろう。

しかし奇跡は起こり今の光景がある。

IS学園第一アリーナには一機のISがあった。そのISは濃い灰色。全身装甲。二メートルを超える巨体。地面につくかというほど長い腕。そしてその腕から発射されるレーザーが主な武装だ。その主武装が問題だった。ゴジマ粒子を使ったレーザーで環境への

被害は甚大になる。喜色は汚染を防ぐためアーナに乱入した。だが濃度予想したものより随分と低かつた。低かつたといえど無視出来るレベルではないが。

篠ノ之束がこのE.Sを、コジマ粒子を使用するレーザー砲を作った。もちろん天才の名を欲しいままにする彼女はコジマ粒子の危険性は知つており、なんとかコジマ粒子を使おうと有害物質を取り出すことに成功した。しかしそれは成功で失敗だった。それは安置していて有害物質を100パーセント取り除けるのであって、それ以外、例えばE.Sに搭載すると100パーセント取り除くことは出来ず決して見逃すことの出来ない量の有害物質が漏れ出してしまつ。喜色と一夏、鈴音がはなしている間にも汚染は進んでいた。

「篠ノ之束……。また、また俺のしようとするのと邪魔すると……？」

「……」

いぐり喜色が静かに怒りを抑えながらE.Sに静かに問おうと答える。い。

「答える篠ノ之束。どうせ聞こえてるんだろ?」

「……」

喜色の言葉に返ってきたのは容赦のないレーザーの連射だった。

「やうか。そういう返事か。いいだろ?」

喜色の脚が動く。生身の人間がどう足搔いても出すことの出来ない速さで I.S.に向けて走る。狙うは腕の砲身部分か頭のセンサーのどちらか。攻撃手段を封じるか動きを封じるか。

喜色は動きを封じるためにセンサーを潰すことを選んだ。

ガシャンッ！

喜色のとび膝蹴りは綺麗に決まりセンサーは破壊された。

勢いはセンサーを破壊するだけでは殺しきれず喜色はそのまま I.S の後ろ側に着地する。そのことを喜色はしくじつたとは思わず好機と考える。

センサーが壊れた I.S. はその場に立ち尽くして動く気配もない。喜色は後ろから蹴り、地面に倒させる。

「ああ、これでもう動けないよな」

I.S. の背中に乗った喜色は特徴的な長い腕を持つ。

「つたく、いない人を侮辱すんのもいい加減にしろ。こんな不細工なもの作られてよろこぶわけがないだろ」

バギィ！

右腕を力任せに引きちぎる。

バギィ！

左腕も同様に力任せに引きちぎる。一仕事やり遂げたとでも言つよう I.S. に腰掛け汗を拭うような仕草をする。

「よーし、これで汚染はちょっとは防げるか。……おい、篠ノ之束。ここに有害物質をなんとかしどけ。早くしないと大好きな千冬ちゃんたちが死ぬぜ」

「……」

「おい答える。しゃべれねーのか？ それとも天才サマは化け物とは話したくないと？」

「……」

「……」

沈黙。ISに腰掛けた喜色の足が小刻みに揺れ始める。

「……」

「……」

「……」

「……なんか言えよ！ 話したくないなら早く自爆させりゃいいだろ？ ああっ！？ 喋れってんだよ！ いつまで私は悪くないですか？ 無言で語りてんじゃねーよー」

立ち上がりISをハツ当たりに蹴り始める。本気で蹴れば速攻で破壊してしまうので手加減はしている。

「答えるー。いまも俺は汚染されてるし一夏たちも汚染されてるん

だよー。」

「……わかったよ。有害物質は消しとく

HSのスピーカーから漏えて、怖ず怖ずとした若い女の声が聞こえる。

「やつと喋ったか。それよりなーんで一夏の名前が出たらすぐ答えたのかなあ？ やっぱり化け物とは話したくなこととか？」

「ち、ちがつ……」

「ああ、言わなくともいい。分かつてるから。乗り込んだ研究所にいた化け物を底う無抵抗の女性を殺したのをなんとも思つてないのも分かつてるし、化け物と話したくないのも分かつてる」

「そ、そんな」と……

「否定しなくてもいい。全て事実で現実で変えることなんか出来ないんだから。怖かったんだろ？ 化け物が。一夏たちにどんな危害を加えるのか怖かったんだろ？ 安心しろ。それが普通だ。それが人だ。」

怖かったからこそお前は行動した。ゴジマ粒子の有害物質が漏れ出す不良品をくつづけてここに来るよう命じたんだろう？ 唯一ゴジマ粒子の危険性を知っている俺がどんな行動をするか予測して

「束さんは、束さんは……」

否定しようとする束の言葉を意図的に無視して喜色はやがて続ける。

「認める。自分の弱さを。臆病さを。言い訳を。過ちを。周囲との違いを。人間なんだから仕方ないと認める。諦めろ」

「でも、でも、でも……」

スピーカーから聞こえる声はすでに泣き声で何かを言いたそうだが言葉はかたちになつていない。

喜色は声がする場所を踏み抜く。ブツリと音がし、束の声が聞こえなくなる。

「ま、話はこれでお終い。あとは一夏にエネルギー無くしてもひりつだけでいいか」

「おーい、蒼崎ー！ 無事かー？」

都合よく一夏が警戒しながら近寄つていぐ。喜色は手を振り無事なことを伝える。

「主人公、ちょうどいいところだ。あのショバーッとなるやつでこいつをぶつ刺しちゃつて」

「ショバー？」

「ほら、あのバリアーが無くなる理不尽攻撃だよ。……あれ？ シールドあるんだから避難させなくともよかつたのか？ いや、でもシールドすら汚染しそうだし……」

急に考え込む喜色を横に一夏は前に出て雪片式型を開け、バリアー無効化のために構える。

「『零落白夜』な。間違えないでくれよ」

一夏は零落白夜を発動し、コアがあると思われる胴体の中心に突き立てる。

零落白夜はエネルギーを無効化し、ISのエネルギーは無くなり動かなくなつた。

「終わつたぜ。ていうか、これ誰が作ったんだろうな?」

「……」

返事をしない喜色を不思議に思い一夏は後ろに振り向く。

「蒼崎?」

「……あ、駄目だ。主人公、これから氣絶するからよろしく」

「はい?」

ちょっと「コンビニ」行つてくるみたいな軽口で言われた一夏は戸惑つてしまつ。

喜色の顔をよく見ると田はどこを見ているかも分からず、顔も高熱が出たときのように赤い。一夏が確認できたのはそこまでで、喜色の体からはフツと力が抜け糸が切れたようにその場に倒れ込んだ。

「おい、蒼崎!? 大丈夫か!?」

「……ん」

喜色の意識が覚醒する。まず見えたのは天井。上半身だけを起こしてあたりを見渡すとカーテンがあり、よく分からぬがいるのは保健室だらう。外からは西日が差し込んでいてもう夜が近い。

「起きたか。調子はどうだ」

「あー千冬ちゃん。大丈夫じゃない?」

「熱と足の骨に軽く蟻が入っている程度だ。心配することはないだろ?」

「どれくらい寝てた? 第二アリーナに誰か入らせた?」

「寝てたのは6時間程だ。東から電話があつて第二アリーナには誰も入らせてない」

「ふーん、興味のある人がいるから、かねえ。ずいぶんと対応の違うこと」

最後の言葉は呟く程度だったので千冬が聞き返したが何でもないと首を振る。

千冬はため息をつきながら傍にあつた丸いすを引き寄せ座る。

「なぜお前は危険を犯してアリーナに侵入した」

「なぜひて言われてもねえ。体が勝手に動いたんだし理由を聞かれても返しようがないよ」

「ならば「ジマ粒子とはなんだ? ずいぶん慌てていたらしいが」

千冬は常に喜色の目を見て話す。嘘は見逃さないと構えた。

「どうせ聞いてたんでしょ? 核物質よりどつても恐ろしいモノだよ。後で束ちゃんと聞けばいいよ」

「やうか。もひとつ詳しく話して欲しいのだがな。私はまだ仕事がある。お前は元気なようだからさつと部屋に戻れ」

それだけを言つと千冬は立ち上がり扉に向かつ。なにかあったのか扉の前でため息をつくとそのまま扉を開け、出て行つた。

「蒼崎! 大丈夫なのか?」

「アンタ足折れてないの?」

「大丈夫だよ。千冬ちやんに怒られた?」

一夏と鈴音は千冬とすれ違いで保健室に入り、まず喜色に質問する。喜色はへりと笑う。

「いやすっげえ心配そつな顔で怒られてもな……」

「やつぱつね。そんなことだらうと思つた。篠ノ花ちやんはどひこ

いるか知ってる?」

「や、こ、こ、るわよ。扉に隠れてるつもりみたいだけど、隠れてない
から」

鈴音は扉を指差す。喜色が指の先を見ると特徴的なポニーテールの
一部が見えた。

「う……」

三人の視線に耐えられなくなつたのか気まずそうに保健室に入る。
喜色は布団から出て両足で立つ。

「あ、蒼崎、ぶ、無事……」

「君、り、さ、あ、何、な、の、? 姉妹揃つて僕の邪魔をするの、? 考えなよ。
あんな異常で危険な場所に行つてわざわざ敵の氣を引くことをする
なんて馬鹿なの、? 阿保なの、? 死にたいの、? 死ぬよ、?」

幕にかけられる言葉はとてもきつかつた。

「蒼崎! なにを言つてるんだ!」

「主人公はちょっと黙つて。常識で考えなよ常識で。もし主人公が
やられたとしても他にも専用機を持っている人はたくさんいるん
だよ? 国家代表までいるんだから勝つ必要はないんだよ」

「だ、だかもし一夏がやられたら……」

「それなのにわざわざ、あんな、危険な場所に行く必要はあったの

かな？ もしやられたら？ 何のために絶対防御がついてるの？ 篠ノ之束の妹なのに知らないの？ 妹なのに？」

篠ノ之束の妹。筈にとつて鬼門だった。姉のせいで家族はバラバラになり、自分も転校を繰り返さなければならなかつた。姉は恨まれて当然、自分は恨んで当然。『妹なのに』といつ言葉は筈が喜色を掴みかかるには充分な言葉だつた。

「あの人と一緒にするな！ あの人せいでのせいで家族はバラバラになつたのに！ あの人と私は違つ！」

「一緒によ。そつくりそのまんまだ。感情が高ぶればすぐに泣くか掴みかかる。自分の思い通りにならなければ拗ねる。自分の興味あるもの以外には興味を示さない。ほら、どこが違つって言つのぞ」

「違つ！」

筈は左手は喜色の服を掴んだまま右手を振りかぶる。これを見た喜色はなぜか笑う。

「ほら、殴りたいなら殴りなよ。なんならE.S用の武装で殴ればいい。篠ノ之束と同じようにな。さつすが姉妹、こんな時の行動も一緒だ」

「ツ！」

振りかぶっていた手から力が少しづつ抜け、腕もゆっくりと下ろされる。服を掴んだ手からも力が抜ける。そして保健室から駆け出でいった。

「せつときなよ。主人公だつてあれりで出でへるとせ思わなかつたでしょ。こまーいじで言つとかないとまた回じーひとを繰り返すよ」

「……でも放つておけねえよ」

やつ血に残し一夏も同じように保健室から離はだしてこつた。それを見た鈴音が喜色をうつづつと時でわき腹のあたりを抉る。

「で、あんたは向者なのよ。せり、れひわひと話しぬなれこよ」

「蒼崎喜色だナどへ」

「せつこひじじやないわよ。なごで生氣でーひを戦鬪不能にできのゆ」

「あ、化け物だからだよ。それじゅある僕は部屋に来るよ。篠ノ木ちやくとくらまつたまつたまつてこと」

やつ血ひで倒れた後だといつもと回じみで回じみでいつとしめた足取りで保健室を出しこつた。

「……………ハア」

ペツ！

夜の闇に携帯電話の発信音が響く。発信音がして十秒も経たないうちに電話はつながる。

『 もすもすひもねす？ ちーちゃん久しぶりだねー！ いきなりどうしたの？ もしかして束さんのところに来たいとか！？ あわわわわ！ 散かつちゃつてるよー』

「やかましい黙れ」

「ひとつ聞きたいことがある」

千冬の一言で電話先の束はぴたりと喋るのをやめる。静かになつたのを確認して千冬は話し始める。

『ちーちゃんが質問？ めずらしねー。よし、なんでも来なさい

！猿にもフェルマーの大定理を理解させられる束さんの頭脳で答えてあげるよ！』

「ゴジマ粒子とはなんだ」

『……あーそれ聞いたやうか。えーとねー、とんでもない出力を發揮する代わりにとんでもない汚染を引き起こすものって考えてくればいいよ。昼にも言つたけどしばらく第一アリーナには誰も入らないでね。汚染しちゃったみたいだから』

「そうか。今度あつたら容赦はせん。それと蒼崎喜色は知っているか

『ツー？…………』

長く黙り始めた束を根気よく千冬は待つ。

束は思う。なぜいきなりその人を知っているかと聞いてくる。思い出すとその時の光景が視界に広がる。匂いを感じる。雰囲気を察知する。喉からからに乾く。手が汗ばむ。背中に汗が噴き出す。音が、声が聞こえる。あの時のある場所での叫び声が。

『……知ってるよ』

話すこととした。親友はこのくらいの嘘は寝ぼけていても見破るだら。ならば隠すだけ無駄。

『知ってる。今のところだれよりも知ってる』

「なにをした。あいつがお前の名を言つ時の口調。親の仇でも見るような目だつたぞ』

『……うん、親の仇だよ。親の、仇。それに大事なものも奪つた』
「やうか。聞きたい」とはそれだけだ。いきなりすまなかつたな

千冬が耳から携帯電話を離そうとしたとき束が大きな声を出す。だが、最初だけで後にじくほゞ小さくなる。

『あ、あの子のー。学園生活、どうなの……』

「やうだな、特定の仲がいいやつはいないが一夏たちとそれなりに仲は良いみたいだな」

『やうじやなくてー。わみしゃうつな顔をしてない?』

「いや、常に笑っているな。本心を覆い隠すよつこな

『……そつか、やうだよね。それじゃあねー。ちーちゃんー。』

ブツツ！

唐突に電話は切れた。こんな風にいきなり電話を切るなどはいつものことだ、千冬は大して驚きもしなかった。

携帯電話を懐にしまうと明日の授業に向けて準備をはじめる千冬がそこにいた。

7話III - 習の戦闘（後書き）

篠ちゃん、「めんねええええ！」

束さん、「めんねえええ！」

束さんは挽回の予定があるから勘弁してねえええ！ 許してええ

えええ！

膝蹴り…… I S 涙田……

これで1巻は終わりの予定。2巻も随分と飛ばし飛ばしになる予定。
でも3巻からは結構長くなる予定。

篠ちゃんに束やん、「めんねえええ！」

以下、どうでもいい独り言

s t e i n s ; g a t e 8 b i t 体験版やりたいよおおおー… で
もやつたら気になつて買わなきやならなくなるひつひつ。秋はMS3
が豊作なのにいいい。

8 四三一 夏の回級生（前書き）

一巻突入……か。
さあ、頑張りう

「あんたが一夏が言つてた世界で2人目の男か。俺は五反田弾。よろしくな。こいつの鈍感具合には苦労してるだろ」

「蒼崎喜色だよ。仲良くなしてね。うふ、モゲロつて書いてなくなるべらー」

「誰が鈍感なんだよ誰が」

六月、日曜日。

俺はI-S学園の外 といふか五反田の家にいた。まえに行くという内容のメールを送つたらもう一人の男も連れて来いつて言つてきたので、蒼崎も連れてきた。

2人は会つなりがつしりと手を合わせ俺のほうを見て話す。俺は敏感だぞ？

「もつと毎飯は食つたか？ 食つてないならつちで食べてけよ」

「お、それじゃあ御馳走にならつかな。蒼崎もいいだろ？」

「やつれせてもいいよ」

五反田の家は食堂をやつてこる。それはとてもつまこやすいはやいの三要素で中学の時はすぐ世話になつた。まあ、中学の時は弾と鈴とよくつるんでたつてのも原因の一つでもあるんだけど。中に入つて隅の席に座る。厨房の奥では弾の祖父で五反田食堂の大将の巖さんが新聞を広げてこる。弾は最初つから俺たちに毎飯を食

べさせる気だつたみたいで机の上には皿が置いてある。

「で、喜色。こいつは何人おとしたよ？」

「少なく見積もつても超がつくレベルを3人は固いね。しかも一人は金髪碧眼のイギリス上流階級のお嬢様」

「マジかよ……ちくしょうそのスリムフェイスをよこしゃがれ！」

「まだ増える可能性は大だね」

「そのハーレム行きの切符をくれよ。片道でもいいから

2人がなにを言つてゐるのかさっぱりだ。といふか今言つた1人つてセシリ亞のことみたいだけど、なんでセシリ亞の話がいま？ もしかして弾と知り合いだつたり。

「兄い！ 部屋にいなんならいなつて」

厨房のあたりから弾の妹の蘭が出てくる。

「あ、久しぶりだな。邪魔してるよ」

「い、いい、一夏さん！？」

やつぱり女子は家ではラフな格好がいいのかね。ショートパンツにタンクトップという今までの俺なら田をそらす服装だがこの一ヶ月で鍛えられた俺は前とは違うのだよ！

「で、この子も落ちちゃつてるわけ？（ボソボソ）」

「ああ、がつづり一目惚れしてやがる。俺の妹で蘭つていうんだ。
(ボソボソ)」

「この様子だと中学のときの同級生も落ちてるでしょ。(ボソボソ)
」

「それどいつもから5歳から25歳までバッヂ落としてやがるよ。(ボソボソ)
」

「なんといつキラーフェイス。(ボソボソ)」

なんか蒼崎と弾が話してるけどわざと俺に聞かせてないみたいで聞こえやしない。除け者は断固反対します。2人に気をとられてたら目の前にいた蘭がいなくなっていた。

「一人でなに話してんだ? 俺も入れてくれよ

「なに? 最高の水着は何か! に参加したいの?」

「俺は断然スクール水着だな。一夏はどうだ?」

「こんな所でなに話してるんだよ!」

ちなみに俺はその人にあつたものが最高のものだと思つ。

「兄い! なに話してんのよ! あなたもそんな話をしないでください!」

蘭がものすごい剣幕で2人を怒る。蒼崎が反論出来てない。……あ

れ？

「蘭さあ、着替えたの？」

「は、はいっ！」

蘭はいつの間にかラフな姿から出かけるような服に着替えてくる。ああ、そうか。蘭もお年頃だもんな。

「デートにでもいくのか？」

「い、いえ、違います！ いつもこんな格好です！」

「よく言つや。お前がそんなに気合いでいることなんて数ヶ月にい

「

ガシツ！

蘭の右手が弾の顔を掴む。弾の口が強制的に閉じられる。

「ああ、主人公が来たから可愛くして少しども田を」

蘭の左手が蒼崎の顔を掴む。蒼崎の口が強制的に閉じられる。男2人を片腕で持ち上げるなんて生徒会長やつてるからできるひとのか？

「……！ ……！ ……！」

「（コクコクコク）」「

2人に目と口の動きだけで何かを伝える蘭に必死に頷く。ものすごい必死な顔で。弾は許しを願う罪人の顔だった。

「なあ、蘭と蒼崎つて知り合いだつたのか？」

「違いますよ！ 初対面です！」

だよなあ。でも、初対面の人の会話には見えないんだよなあ。

「じゃあ、なんでそんなに仲いいんだ？」

「よくありません！ それよりこの人は誰なんですか？ 見たことが無い人ですけど……」

「さすがIIS学園の生徒さんです！ これから仲良くしていきまるなら学園での一夏の様子を教えるよ

「さすがIIS学園1年1組所属の蒼崎喜色でーす。仲良くしてね。希望するよう！」

待て待て待て。プライバシーと人権は何処にいつたんだ。それから蘭も手を組むなよ。

「いつまで話してやがる。食わねえんなら下げちまうぞ」

のそつと厳さんが現れる。あいかわらず筋肉は盛り上がりついていて浅黒い腕が特徴的だ。

この拳から繰り出されるげんこつは千冬姉の威力と大差が無い。もう喰らいたくない威力だよな。

合掌して食べだした俺たちを満足げに見ながら厳さんは次の料理に

取り掛かつた。

「でよ、一夏。鈴と、ファースト幼馴染に再開したつて？」

食事の合間に弾が話を振つてくる。というか蒼崎と飯を食べるのはこれが初めてじゃないか？

「ああ、弔の事か」

「ホウキ？ 誰ですか？」

「主人公の幼馴染だよ。ポニー・テールに巨乳といつらやましい属性持ち。ちなみに剣道の全国大会優勝者だよ」

「ちなみにもう一人の幼馴染は鈴な」

「ああ、あの」

なぜか弔の話で蘭の持つている箸にひびが入つて俯き加減になる。鈴の話になると僅かに表情が硬くなる。名前が似てるから同族嫌悪でもあんのか？ でも弔は全然違うよな。

「ああ、蘭ちゃんに報告。今は別の部屋だけど、一ヶ月半、主人公は弔ちゃんと同じ部屋で過ごしてました。ちなみにラッキー・スケベもあったよ。例をあげるならシャワー上がりのタオル一枚の弔ちゃんと出くわしたりー」

ガタツ！

蘭が突然立ち上がり、椅子が転がつて大きな音をたてる。

「同じ部屋ー？ タオル一枚！？」

「ビ、ビウした？」

「アリだよ落ち着け」

弾に向けて敵さんの恐ろしい視線が向けられる。ビードの配管工の
ように弾は縮こまる。

相変わらず巌さんは蘭に甘いみたいだ。俺たちが椅子を転がしたら
お玉が頭に飛んでくるか包丁が鼻先をかすめる。やべ、思い出した
ら鳥肌が。

「一ヶ月半同棲してたんですかー？」

「アリだよ。出来るなら男同士の部屋がよかつたんだけどな

ほんと蒼崎と同じだつたら精神をすり減らさずには済んだのに。
なぜか隣でダラダラといつ音が聞こえる。弾、なんでそんなに汗を？

「兄い、知つてましたよね？ ゆっくり聞かせてもらいましょうか
？」

「……俺、これから喜色と親睦を深めるために遊びに行くんだ

「では夜に。……決めました」

蘭は弾から田を離し決心したよつづぶやく。何をでしょつか。

「私、IIS学園に入学します」

「え？ は？ ハアツ！？」

ビュッ　スツ

弾の耳を包丁が掠めて髪がパラリと落ちる。弾はフリーズする。

「蘭の学校つてエスカレーター式の超有名校じゃなかつたか？」

「私の成績なら余裕です」

「あ、IIS学園は推薦、ないぞ。ていつか今恐怖で死ぬかと思った」

弾の取り得でもある素早いリスボーン。最近よく叩かれるから意外と欲しいスキルだ。

「兄いと違つて、私は筆記で余裕です」

「で、でも…… そだあそこ実技あつたよなー？ な？」

「ん、ああ。そこで適正がないヤツは落とされるらしい」

「ちなみに一人倒したら天然チートの千冬ちゃんが完全武装ででてくるよー」

その試験を元に入学時のランキングがつくられるらしい。

というか千冬姉が天然チートって。いや、反対とかじやなくて逆にしつくりぐるな。

「千冬さんだが、HSで完全武装？ 勝てっこねえじやん」

「……」

蘭がなにか紙を取り出して弾に渡す。喜色も一緒に覗き込む。

「げえつーー？」

「HS簡易適性試験……判定A……」

「問題はすでに解決済みです」

「おお、かつこーい。一回でいいから書いてみたいよな。

「凄いね。主人公は適性がBだったからよかつたね。蘭ちゃん勝つてるよ」

「喜色はどうなんだ？」

あ、それは俺も気になる。蒼崎は自分のことを全く話せないからほとんど知つてることがないし。

「ん？ 僕の適正？ うらしくよ。あ、このカボチャおーしゃー

「え？ うー」

「うん、S。HS生みの親直々の測定だから間違いは無いんじやないの？」

カボチャをつつきながらじうじうとほいみたいに答える。適正

「うー、それですね、私が受かっただらいこうお願いしますね」

「おー、もううんだ

仕切りなおすみひな蘭の言葉で講じての返事をする。

「絶対、絶対ですからねー」

俺に強く何度も念を押して頷くと、口と笑に素早く食器をまとめ立ち上がる。

「それでは、これで

そのまま食器を立づけて蘭は立ち去つていった。
なんで服を着替えてたんだね。」

「あひそろ外にひきせ。ここにこたら包丁がびゅんびゅん飛んでくるからすぐえこわい

「それで何処行ぐの?」

弾の提案に俺たちは同意する。もう目にあつたのはたいらげたし、いつまでもここで詰してこむのも包丁が飛んできただけ怖い。

「あそこか。いいぜ」

「あそこでこいだろ。なあ、一夏?」

青崎は俺たちの言つているあそこがわからず首をかしげている。まあ、今日で蒼崎の事をもつと知れるだろうな。蒼崎との話の話題が少しでもできるといい。学園じゃ常にどつかに行つてるし。俺は今後の良好な交友関係のために気合を入れるのだつた。

翌日の朝、山田先生の口から驚きの言葉が飛び出した。

「今日はなんと転校生を紹介します！ しかも一名！」

「ええええええっ！？」

突然の発表にクラス中がざわめく。そりやあ、転校生がいきなり現れたんだから驚きもざわつきも、腰抜かしたりもするよな。二人も来るんだから。

ていうかなんで分散させないの？

教室の扉が静かに開いた。転校生が教室に入つてくる。

「失礼します」

「……」

一人の転校生を見て一瞬で静かになる。

それも当たり前だと思う。
だって二人のうちの一人が男だったんだから。

四三一 夏の同級生（後書き）

弾がIISを動かせてもいいと思つ今日この頃。
専用機はあと二話くらいだと思われ。

以下、どうでもいい独り言

宿題終わってないいいいいいい！ ヘルプミー！
まあ、いいや。夏休みに墓参り以外どこも行かなかつたなあ。
ああ、またあの暑い日々が始まるというのか……。

9回目 転校生へーーふたりー（前書き）

「都合主義発動！

どんな無茶も可能に！

副作用としてあとにつなげていくくなるー

9回目 転校生くるー ふたり！

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

転校生のシャルルはにこやかに一礼する。

一夏も喜色もクラス全員があっけにとられていた。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「

お人よしそうな顔、中世的な整つた顔に濃い金髪を首の後ろで束ねている。体はスマートですっと伸びた足が格好いい。

「きや……」

「はい？」

「きやあああああ つー」

クラスの中心を起点として歓喜の叫びは一瞬で伝達する。一夏と喜色は耳をふさいで鼓膜を保護している。

「男子ー 三人目の男子ー」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守つてあげたくなる系のー！」

「織斑くんの無自覚系と蒼崎くんの不思議系に続けて…」「地球上に生まれてよかつた～～～！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

仕事で黙れと言つたというよりも、こいつに十代女子の反応が鬱陶しく面倒くわざつに千冬がぼやく。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わつてませんからー」

もう一人の転校生は忘れることがきわめて難しい容姿だった。
伸ばしつぱなしの腰のあたりまである白に近い銀髪。左目に医療用などといふものではなく軍人が使うような黒い眼帯。開いている右目は赤色。

身長はシャルルより小さいが、気配はまるで軍人だつた。

「……」

少女は腕組みをして騒いでいる教室の女子たちをくだらなそうに見ていたが、すぐに逸らし千冬に向いていた。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「「」ではそう呼ぶな。」」では私は教師でお前は生徒だ

「了解しました」

短く答えるとラウラは手を体の真横につけ、押しをかかとで合わ

せて背筋を伸ばす。その様子はまるで軍人。どう間違つたとしても軍関係者であることは間違いない。

「ラウラ・ボーテヴィイッヒだ」

「…………」

クラスは沈黙。クラス全員が続きを待つてゐるが、ラウラは名前のみを口にして黙つてしまつ。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

真耶撃沈。泣きそうな顔をしている。その時、一夏とラウラの目があつた。

「貴様が　！」

つかつかと靴を鳴らし一夏に近づく。

「おーい何やうつとしてんのかなー？　殴るぞ！」
「…………え？」

ガツ！

ラウラの平手打ちが一夏に当たる瞬間に喜色の足が腕に当たる。蹴られたラウラの腕は上に跳ね上がる。

一夏は状況が理解できず何度も瞬きをする。

「…………え？」

「貴様、なにをする！」

「それはこいつちのセリフでしきつが。初対面の人を殴るつとしたやつの言ひ言葉じゃないよ」

クラスは何が起きているか理解できず一夏、喜色、ラウラの三人を見るだけにしている。真耶はまだ撃沈したままで涙目。唯一千冬だけが頭を押さえている。

そのまま喜色とラウラは数十秒睨みあう。ラウラが一方的に敵意をむき出しにして睨みつけていた。

「くつ！ 織斑一夏。わたしは認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

そう言い來た時と同じように靴を鳴らして一夏の前から立ち去つていいく。空いている席に座り、腕を組んで目も閉じる。組まれた腕の指先がラウラの心境を表すかのように忙しなく動いていた。

「あー……んんっ！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第一グラウンドに集合。今日は一組と合同でHS模擬戦闘を行う。解散

「

千冬は手を叩いて行動を促す。一夏はなにがあつたかまだ理解できていないが授業に遅れると鬼の出席簿が落ちてくるのと、このまま教室にいると女子と一緒に着替えてはならなくなるので喜色とともに更衣室へ走つて向かおつとした。

「おい織斑、蒼崎。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ？」

「はーい」

「君が織斑くんで、君が蒼崎くん？　はじめまして僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ」

「女子と一緒に着替えたいなら別だけどねー」

千冬は一人にシャルルを任せるとそのまま去っていく。シャルルが自己紹介を始めようとするが一夏は手をとり走り出す。

「男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めになれてくれ」

「まあ、僕みたいに走りながら服を脱げて、あらかじめTシャツを着てるならそれほど急ぐ必要は無いけどね」

「なつ！？　蒼崎お前……」

一夏が横を見るとそこには制服を脱ぎながら走っている喜色がいた。しかもかなり早めに走っている一夏に並走しながら。さらに今は階段を駆け下りている。

「ああ、転校生発見！」

「しかも織斑くんに蒼崎くんと一緒に！」

H.R.が終わり各クラスから生徒がわらわらとあふれ出る。三人は捕まるわけにはいけない。捕まつたら最後、遅刻して鬼教師の特別カリキュラムが笑顔で待っているのだから。

「いたつー！ うつむきよー！」

「者ども出念え出念えい！」

「きやああつ！ 見て見て！ 手！ 手繫いでるー。」

「蒼崎くん制服脱いでるんだけどー!?」

「ビービーー？ ……なんだISースーツ来てるじゃない」

「な、なに？ なんでみんな騒いでるの？」

状況がのみこめず、シャルルが一人に戸惑いながら尋ねる。

「そりゃ男子が俺らだけだからだわ」

「……？」

「いや、いISを動かせる男って、今のところ俺らしかいないんだから」

「あつ！ ああ、うん。そつだね」

そうだったと頷くシャルルをちらりと見ながら、一夏たちは走り続ける。

「よし、到着」

空気が抜けれる音がして、扉がスライドして開く。一夏が時計を見ると授業開始五分前。時間は切羽詰まっている。

「時間ないな！ すぐに着替えちゃまおづか」

「だからISースーツ先に着とけって言つたのに」

「いや、言つてないからなー！」

一夏が制服のボタンを一気に外しTシャツを脱ぎ捨てた隣で喜色は制服を丁寧に畳みだした。

「わあーー？」

「？」

「……とにかく、シャルルちゃんって本当に男？」

「えー？ ど、どうしてそり悪いつのーー？」

突然の喜色の言葉にシャルルは戸惑い、一夏は怪訝な顔をする。シャルルの目を見つめて喜色はだつてと続ける。その横で一夏は着替えながらさりげなく耳を傾ける。

「だつて高校生つていう年齢にしては喉仏がないし、声が高い。それに足の出てる位置が男にしてはちょっと外側すぎる気がするんだよ」

「あ、あは、あははは。よく言われるんだ。女っぽいって。僕は男だよ」

「あれ？ そう？ 『めん』『めん嫌なこと』聞いた？」

「大丈夫。気にしてないよ」

「そう？ 僕は蒼崎喜色。仲良くしてね。それじゃあ、僕はもう行

つてゐるよ

「ピシュウ」と音がして扉がスライドして開く。開いた扉から喜色は実習が行われるアリーナに向けて歩きだした。

喜色が出ていつたのを見てシャルルは大きく息を吐く。ふと、自分に視線が向けられた気がして後ろを振り向く。

「……」

「うーん……」

一夏がシャルルのむかづ腰辺りをマジマジと見つめていた。

「織斑くん？ バレを見てるの？」

「いや、言われてみると確かに外側に見えない」ともない気が……」

「……僕は男だからね」

「おひへ、了解だ」

シャルルのジト目には気まずそうに一夏は顔を逸らす。

そのままゆっくりと準備をしていた一夏とシャルルに千冬の出席簿が振り下ろされるのはわかりきったことだ。

転校生が転入して数日。

「はー終わった終わった

一夏は寮の自室に向けて歩く。

白式の所有者の登録書類を書くために職員室へ行っていたのだ。枚数は多かつたものの名前を書くのがほとんどだつたため、さして時間は必要なかつた。

「ただいまー。って、あれ？」

先に戻っているはずのシャルルが見当たらない。その代わりにシャワールームから水音が聞こえてくる。

(シャワー中か。そういえばボディソープが切れたつて言つてたな)

クローゼットから予備のボディソープを取り出し洗面所へ入る。もちろん男同士なので遠慮はしない。

(蒼崎と飯食つたことないんだよな。今から誘つてみるか)

ガチャ

一夏は首を傾げる。シャルルはシャワーだし、部屋には俺がいる。誰が入ってきたんだ? といひまで考えて思いつく。

(シャルルが扉を開けたのか)

「あ、ちょっといい。これ、替えの」

「い、い……、いや、……か？」

「え？」

シャルルが顔を出すと思っていた一夏の前には女子がいた。

金髪碧眼ですらりとした体は足が長い。胸はこくらいだろうか。

一夏は浴室のシャワールームにあらわれた全裸の女子から田が離せない。

「あやあつー？」

我に返り胸を隠しながらシャワールームに逃げ込む。

「ほ、ボディソープ、お、置いとくから」

「う、うん」

一夏はシャワールームの扉のそばにボディソープを置いて洗面所を出る。

(胸、結構あつたな……)

洗面所から出た一夏が考えるのはいま、シャワールームであったことばかり。しかし考えているどじょうしてもそむきに思考がそれる。頭を何度も振つて煩惱を振り払おうとする。

ガチャ

精神統一をする一夏には扉を開く音がよく聞こえた。

「あ、あがつたよ……」

背中から聞こえた声は紛れもないシャルルのものだった。

「……」

「……」

すでに三十分はこのままだろうつか。一夏はいい話の切り出し方を考えるが何一つ思い浮かばない。シャルルもどう切り出せばいいか思いつかない。

「ンコンガチャ！」

ノックと同時に扉が開けられる。返事をする暇もなく、扉を押さえる暇もなかつた。

「一夏ちやーん、シャルルちやーん、親睦を深めるためにご飯食べに、行！」……う…………よ？」

喜色が飛び込んできた。珍しく一夏を名前で読んでいる。

「……」

- 1 -

「……えーと、失礼しましたー。ごゆつくり

ガチヤ

一夏とシャルルは突然の出来事に思考停止。喜色は静かにフェードアウトしていった。

卷之三

『ねえねえ、織斑——夏の部屋でどこだつたけ?』

『いきなりビックリしたの?』

卷之二

『元のうた』

『なにがあつたの?』

「みんな、大変だよ！　一夏ちゃんが部屋でおん

一夏は素早く行動する。シャルルは女の子だつた。性別を隠してI.S学園に入学することは、なにか理由があるのでどうと考へて。今ここでシャルルが女の子ということばれたらその理由が聞けなくなる。

扉を蹴破り廊下に飛び出る。喜色は扉の目の前にいた。口を塞ぎ、部屋に引きずり込む。扉に鍵をかけておくのも忘れはしない。

「…」

「ふう、危なかつたな。男装してたのがばれると拙いんだろ?」

「うん……」

「あれ? シャルルちゃんじやないか」

「うん……」

「なぜか主人公の部屋にワープしたみたいだけどみんなに話していくねー 女の子とこちゅこちゅしているでー!」

「うよ、お、待てー!」

また廊下へ出る^{トトムル}喜色を一夏は羽交い締めで引寄せめる。

「……僕はね、愛人の子^こどもなんだ」

「は?」

「え?」

シャルルは突然自分の過去を語り出す。一夏は無意識に腕の力を緩め聞くことに意識を集中する。喜色はやれやれと首を振りながら床に座り話を聞く体制となる。

「それもデコノア社社長のね。一年前にお母さんがなくなつたときに引き取られたんだ。それでPS適正値が高くて非公式にだけどテストパロットをやることになつたんだ」

思い出したくないと話すシャルルの顔は何かを我慢しているようにも見え、一夏と喜色も無駄に口を開くこともしない。

「父に会つたのは一回だけ。話すことは何回かあつたけど。いつもは別邸で暮らしてたんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときは驚いたなあ。本妻の人に『泥棒猫の娘が！』って殴られたんだよ。母さんも言つてくれてたらあそこまで驚くことは無かつたんだろうけどね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルの声は乾いていて笑っていない。

一夏はどうからか怒りが湧いてくる。それをじらえるために渾身の力で拳を握りしめた。

「それから少し経つて、デュノア社は経営危機に陥つたんだ

「ああ、そうこうことなるほどね」

「え？ どうこうことだ？ デュノア社はIFSシェアの第三位だろ？ それに蒼崎は何が分かつたんだよ」

一人納得する喜色に一夏は首をかしげる。

「じゃあ主人公は企業がIFSの開発にかかる費用をすべて自社で賄えると思つてるの？」

「え？ 賄えないのか？」

「無理に決まつてるじゃん。一機開発するのに億単位の金が動き回るのに国からの支援が無いと何もできないんだよ。それで、まあ面倒くさいところは省略するけどフランスにとって第三世代IFS開発はより大事なことなんだ。まあ、国防っていう建前があるけど金

が無い国は最初の開発段階で有利な位置に立たないと、それはもう目も当てられないことになるんだ」

フランスは欧洲の総合防衛計画『イグニッションプラン』から除名されている。そして、いま欧洲では第三次イグニッションプランの次期主力機の選定中だ。

トライアルに参加しているのはイギリス、ドイツ、イタリアのみで実用化の点ではイギリスが一步リードしているが、まだ完成には程遠い。

そのためにイギリスからはブルー・ティアーズがドイツからはシユヴァルツ・レ・ゲンが実稼働データをとるためにIFS学園へと送られてきた。

「それで、デュノア社も第三世代を開発していたんだけど、データも時間も全くなくて形にならなかつたんだ。追い打ちをかけるみたいに政府から予算を大幅にカットされて次のトライアルで選ばれなかつたら援助を全てカット。さらにIFS開発許可も剥奪するって通常が来たんだよ」

「なんとなく事情はわかつたけどどうして男装つてことになるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに」

シャルルは一人から視線を逸らして、吐き捨てるように続ける。

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能なら使用期待と本人のデータをとれるだろう……ってことだよ」

「それは

「

「そうだよ、白式のデータと盗んで来いつて言われてるんだ。でも一夏と蒼崎くんにもばれちゃつたから僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は潰れるか他企業の傘下に入るだろうね。僕には関係ないことだけね」

諦めた顔で言い切るシャルルを一夏と喜色は見ていた。

「ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとうございます」と、
それと嘘をついて、「めん」

深々と頭を下げるシャルルの肩は小さく小刻みに揺れていた。これから自分の遭遇についてか、一夏たちに幻滅してほしくないと、いう気持ちのせいか、このように謝つて済まそうとしている自分が嫌になつていいのか、それはシャルルにしか分からないが、喜色は肩の揺れを見るなり一夏に声をかけていた。

「一夏、僕の部屋からホールド取つてきて。すぐ見つかるから」

「こちなつびうしたんだよ。自分で取りに行けば……」

「いいからー！」

追い出すよにして一夏にドアを取りに行かせた喜色はシャルルに話しかける。

「……急にどうしたの？ 一夏を部屋から追い出したりして。僕に何かする気なの？ いいよ、別に何しても。もう、面倒だしね」

「それでいいの？」

「は……？」

氣の抜けた声を上げるシャルルに再度問い合わせる。

「本当に、それで、いいのか？」

「よくないけどどうしようもないんだよ。もう面倒なんだ」

「……もう一度だけ聞いておこつか。妾の子どもって馬鹿にされて、他人みたいな父親に利用されて、男装してEcole学園に来てもすぐばれて、牢屋にはいる。そんな人生で本当にいいの？」

「……」

「……」

「いいわけないよ……」

顔を上げたシャルルの顔は真っ赤になり目には今にも泣きぼれそうな量の涙をためていた。

「それならどうしてそのまま流れに身をまかせようとするの？」

「じゃあどうすればいいの？ 僕には権力も、身分もお金も何もないんだよ。どうにかできるならどうにかしたいよ……」

「ならどうにかすればいい！」

大きな声が聞こえ、シャルルが振り向くと扉の前に一夏がいた。

一夏はほとんどを聞いていた。喜色の部屋は一夏の部屋から往復しても三十秒もからない。

ほとんどを聞いて、シャルルを自分と重ね合わせた一夏は感情を露わにする。

「親が子どもになにをしていいなんてことがあつてたまるか！ 人の生き方を親が邪魔をする権利なんかあるわけがない！ 白式の機体データや俺のデータなんかシャルルがどうにかなるならいくらでもくれてやる！ 友達の一人も救えずに男をやつてられるか！」

感情があふれだす。止めることが出来ず思つたことをそのまま口にしてしまう。

「それに！ 特記事項第一二十一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない！ 本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする！」

口を乗つ取られたみたいにすらすらと言葉が出てくる。これは使える。この言葉で一夏の頭は急に冷えてくる。

「IJの学園にいれば三年間は大丈夫だ、それだけあれば方法なんかいぐりでも見つけられる！」

「一夏……すごいね。国を相手にするつていうことだよ？」

「いぐらでもかかつてこい！ 全部跳ねのけてやる。それに、仲間だつているんだ」

「ふふ、頼もしいね。それじゃあ、少しだけ厄介をかけるね」

シャルルが軽く笑う。表情はまだ少し硬いがぱつと見て気が付くよ
うなものではなく、明るい笑顔だった。

「それで、主人公？　ぼくのノートパソコンは？」

「ああ、これだろ？　だけどこれがどうしたんだ？」

喜色はノートパソコンを一夏から受け取り電源を入れる。いきなりの
喜色の行動を読めず一夏とシャルルの顔の眉間に何本かしわが入
る。

「ちょっと人を一人社会的に潰そうと思つて。それとフランスの大
企業のトップを取り替えよう」と

「そんなことができるのか？」

「出来るからやひつじつてるんだよ。まずはさぢつじつて陥れようか
な」

喜色は軽快にキーボードを叩く。十秒もしないうちにディスプレー
を一人によく見えるように向ける。

「これって……」

「そ、最近流行りのマフィアとの繋がり。もちろん裏では物凄く黒
いことをやってた事にするよ」

「でもこれくじりじや足りないんじゃないか？」

せりにキーボードを叩く。

「それなら児童ポルノの製造、所持もお付けしますー。シャルルちゃんの父親のＰＣにはその類のものを突っ込んでおくよ?」

声高らかに話す喜色はいいのかといつ確認のためにシャルルの顔を見る。

「あ、あはは……」

シャルルは苦笑いをしていたが止める気はないはずとやれと語っていた。

喜色はマスクに向けと政府向けの一いつに分けて捏造した証拠を送りつける。やがて手持ちのハッキングツールの中で一番強力で凶悪なものを起動。デュノア社社長のＰＣに『お子様は見ちゃ駄目よ』なファイルをいれまくる。

「わざわざ、あとはＨＵの開発許可を譲渡させなくちゃね

「え、そんなことをするのか?」

「当たり前だよ。そうしないとシャルルちゃんがＩＳを持てなくなるよ? 拡張装備も届かなくなるし、ニアの行方は何処だつて大騒ぎになるよ」

「そ、そうなのか

「んーどじがいいかなあ……潰れそつなどこりはダメだし大きすぎるとこりもダメだし結果が出せそつになことじりもダメだし……」

適任な会社が見つからず空いている指で床を叩くがいい案が出てくるわけでもなく、決めることができず時間がたつていく。一夏とシャルルはにこやかに談笑。役に立たない。

ピロンシッ！

ＰＣがメールの着信を知らせる。

「ん？ 誰？ ……げつ！」

「どうした？」

「メールみたいだけどなんでそんな声を出すの？」

着信音に気付き一夏とシャルルがＰＣを覗き込む。ちゅうどいと弦きシャルルに場所を明け渡す。

ＰＣのメールを見て戸惑いの声を出す。

「ねえ、これって……」

「シャルル、読んでくれよ

「うん……。

『やつほーみんなの アイドル束さんだよー。きいくん随分困つているみたいだねえ！ 優しい束さんが助けてあげるよー。束さんはデュノア社の傘下中でのトップの会社がいいと思つた。束さんが言うんだから間違いないよー！

いまきいくんはデュノア社の開発許可を譲渡させようとしてるんだよね？ 天才の束さんにはお見通しなのだよ（ズビシイッ！）

その会社に開発許可を譲渡させたら添付ファイルを送るといいよ！
束さんが考えた最強の第三世代機の設計図があるんだけどそれを
その会社に束さんからつてことで送っちゃて！あの会社の人は普
通より上の頭を持つてるからすぐに第三世代が作れると思うよ。そ
れに私が設計したISなんだから性能は余裕で現行のISをぶつち
ぎるよ！それじゃあまた今度、具体的には海で会おうね！

P・S・

きいくんの専用機はもう少ししたらできるみたいだからもう少しう
つとがまんしてねー

by みんなの アイドル束さんより（キラッ

だつて……

長い。無駄に長い。非常に長い。

喜色の額には青筋がいくつも浮かぶ。顔の筋肉は引きつり目元が
ぴくぴくと動く。

「その会社つてのはキサラギつて名前みたいだな。なんで日本語？」

「知るか。あいつの言つとおりにするのは癪だけど……いい手が無
かつたし仕方ないかな」

キーボードを叩きデュノア社のIS開発許可をキサラギ社に譲渡
したという証拠を捏造する。デュノア、キサラギ、政府。三つの捏
造が終わるなり喜色はその場限りのメールアドレスをつくりファイ
ルを添付し、短文とともに送る。これのメールはデュノア社社長の
スキャンダルとなる。

これでシャルルのもつてたのPCアはキサラギ社の物となる。シャ
ルルもデュノア社のテストパイロットではなく、キサラギ社のテス
トパイロットになつた。

「はい、終わり。シャルルちゃんはキサラギ社のテストパイロットになりましたー。しばらくしたらこの会社は第三世代になるかもね」

パタンとノートPCを閉じながら話す喜色の顔は何故か心の底から安堵したという表情で、一夏とシャルルはそろって首を傾げていた。

「さて、そろそろ飯食べに行こうぜ。蒼崎も誘いに来ててくれたんだろ?」

「そうだけどもつと楽しそうなことがあったから頭から吹っ飛んでた」

「それじゃあ僕は後から行く」

ノンノン

ビクビクビクッ!

「一夏さん、いらっしゃいます? 夕食をまだ取られていないんですけど、体の具合でも悪いのですか?」

三人が揃つて体が跳ね上がる。

「一夏さん? 入りますわよ?」

今のシャルルを見られるのはとてもまずい。今のシャルルを見ればどんなに鈍感で鈍い人でも女だと分かるだろう。

「あ、どうするの?」

「どうすればいいの?」

「とりあえず隠れれば……」

「また! 居留守でやつ過! セサム……」

「や、それで行こう!」

なにか対応策を考えればいいのに三人が息を殺して扉を見つめる。ノブに手をかける音がする。

鍵をかけたかどうかも分からず出来るのはただ願うだけ。

その手がかけられたノブがゆっくりとまわされる。

ガチャ……ガツ!

「あら? 居られないのかしら。もう食堂へ行かれていますの?
まさか、あのお一人が一緒に……」うしてはいられませんわ!」

どこかへ駆け去る足音が聞こえ三人は止めていた息を緊張とともに吐き出す。
鍵が掛かっていなければどんな恐ろしい事になっていたかと声には出さず思つ。

「あ、一緊張した!」

「籌じやなくて良かった。あいつだったら鍵を壊して入ってくるだ

「……まつて！ 篠ノ沢さんの話し声が聞こえる」

扉に耳を当て外の音を確認していたシャルルが喜色と一夏に同じように耳を扉に当てるよつジョスチャードしめす。

『……かさん……は……堂……にはいま……』

『いや…………見当た…………』

『…………では…………扉に？…』

声の主は歩いているのだろうか声が徐々に鮮明に聞こえてくる。

『……あ、そつだらり……刀で扉を…………』

『……大丈……られるの…………』

足音は部屋の前で止まる。外でシュランという綺麗な音がしてドアノブに切れ目が入る。鍵が破壊されたとしか考えられない。

「一夏！ なぜ居留守を使うんだ！」

「一夏さん！ なぜ出てくれなかつたのです？」

「難去つてまた一難。布団に潜り込んで誤魔化そうとするシャルルの横で一夏は必死に言い訳をする。

今日も織斑一夏の部屋は騒がしい。

私の居場所は常に闇だ。

いつ頃から闇にいるのかなんでもうすでに覚えていないがどうせ生まれたときから闇にいるのだろう。人は光の中でしか生きられないと言われている。それは間違いだ。私の居場所は常に闇。闇で育ち影で生まれた。それは過去も現在もこれからも変わることはないのだろう。

私の名前はラウラ・ボーデヴィッヒだ。だがそんなことはどうでもいい。名前など識別番号だ。固体番号だ。ただの文字の羅列だ。なんの意味もない。世間では名前は大切といわれるが私にはなんの意味もない。

ただ織斑千冬に呼ばれるときは心が高揚する。血が沸き立つ。肉が騒ぐ。あの人の存在と強さが目標で自分の存在理由。

一日見たときからその姿のありように心が見とれた。私はこうなりたいと常に思うようになり、目が覚めている時も夢でも思うようになつた。

自分が重ね合わせただ一人の人物の名前を汚すやつが許せない。織斑一夏を排除する。IS学園に来た目的の一つ。絶対に遂行してみせる。

あの私の腕を足で止めた男。あいつは何かを隠している。あいつはどこかおかしい。ただの男にこの拳を遮られるほど軟弱ではない。織斑一夏とそれなりに親しいようだが邪魔をするなら排除する。絶対に遂行してみせる。

9回目 転校生くるー ふたりー（後書き）

遅くなりましたああ！ 学期初めは忙しくて……。テストとかテストとかテストとか。でもストックが一つ出来たよー。

物凄く読みにくいですね。精進します。

どこか矛盾があつたら指摘をお願いします。

以下、どうでもいい独り言

stein's gate フェイクエンジキター！ もう一回原作
を最初からやろう。

さて、専用機の名前は何にしよう。誰か格好いい厨一溢れる案を出してくれないかなあ（チラッチラッ
でもしつくりこなかつたらどうしよう。そのときは僕が厨一溢れる
ようで溢れない名前にしよう。

タイガー＆バニー一週遅れだけど面白くなってきた。マー・ベリック
のいばになにか仕掛けがあればいいのに。

1-0 話題 転校生は過激（前書き）

やつはー矛盾しまくってる気がするぜ！
ああー、見捨ててアリウザバックしないで！

「あー面倒くせー。トイレが三つしかないなんどぞの女子校?」

喜色は廊下をゅうくらでも速くもないスピードで歩く。次の授業が千冬ならば教室からトイレまで行き帰り全力疾走をしなければならぬが次は真耶の授業。焦る必要はない。

(とこりか専用機はいつ来るの? いい加減待ちくたびれたよ)

いつも考えることはたわいもなじどうでもこい話で、今日はいつ来るかもわからない専用機のことのようだ。

なぜ束が自分に専用機が『えられる』ことを知っていたのかが若干気になるが、どうせハッキングでもしたのだろう。今現在束の前にセキュリティーなど水に濡れたティッシュペーパーよりも脆い。『気にある』ことではないと喜色は一つ欠伸をする。

「なぜこのやうなとこりで教師なビー。」

「やれやれ……」

角を曲がりとすると聞き覚えのある声が一つ聞こえてくる。出歯龜根性いつぱいに角からそりと覗き見る。

見ていけないという理性とこんなとこりで話してゐんだから聞いてくれってことだと囁きかける欲望の戦いは一瞬でついた。

「こりのような極東の地で何の役田があるといつのですか!」

覗き見た視線の先にはラウラ・ボーテヴィッチが織斑千冬にむけて懇願していた。

今聞いた限りでは千冬の現在の仕事について不満や思いの丈をぶつけているようだ。

「お願いです、教官。 我がドイツで再びご指導を。 ここではあなた

の能力は半分も生かされません」

「ほ？」

「大体、この学園の人間など共感が教えるに足る人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、EISをファッショング何かと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど」

「そこまでにしておけよ、小娘」

「う……」

ラウラの言葉を遮つて千冬が出した声は冷たくラウラは言葉が出せない。

千冬は腕を組む。

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもつ選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

声が震える。目の前にいる人物との力の差を知っているのと、自分が尊敬し、憧れている人に嫌われたくない。二つの恐怖。

「さて、授業が始まるな。さつさと教室に戻れよ」

「…………」

千冬は声色を元に戻しラウラをせかす。一言も喋らず早足にラウラは去っていく。

千冬は超人的な身体能力を持っている。すぐそこには隠れている人の気配など簡単にわかつてしまつ。

「そこ」の男子。盗み聞きか？ 随分と面白い性癖だな

「千冬ちゃん、盗み聞きじゃないよ盗み見てたんだよー」

「……はあ。お前に先生と呼べと言つのは諦めた。ほら、さつさと戻れ。遅刻するぞ」

「次は千冬ちゃんがいなから遅刻しても大丈夫なんだよ」

バシン！

「次の授業に私も行きたくなってきたな」

「わかつたよー走るから叩かないで」

喜色は走りだそと足に力を入れる。

「ああ、蒼崎」

「ん?」

「フランスのデュノア社の社長が逮捕されて工事開発許可がキサラギ社に移っていたんだが、何か知らんか?」

「知らないなあ。知らないよ。知ってるわけがないよ。デュノア社社長のパソコンに違法なファイルをつっこむことなんてこれっぽっちもしてないよ!」

白々しい態度で公にされていない逮捕理由をペラペラと話す喜色はワザと話しているのか、それとも本当に知らないと言っているのか。

千冬はせつねと行けとこいつに手を追い払ひ手に振る。

「放課後に私のところに来い。ほら遅れるぞ」

千冬は用は済んだと背を向けて歩き出す。それを見て喜色はゆっくつと歩き出す。

当然授業には遅刻。

そんなに自分の授業は受けたくないのかと涙目になつた真耶を田にしながら喜色は授業を受けるのだった。

「それで『テュノア社になにをやつた？』向いつでは社長はロリータコンプレックスだペドフィリアだと根も葉もない噂が流れているらしい。警察もあそこまで証拠が揃つていては見逃しようがないと異例のスピード逮捕らしきだ」

「ざまあ。僕は権力をもつた調子にのつた人間が大嫌いなんだ。その証拠をバラした人はもつとやつてほしいよね」

一つの部屋の中で一人は話す。中には苦虫を噛み潰したような顔の千冬とは対照的に、一二二二と笑つている喜色が向かい合つて座っている。

「ここには盗聴対策は万全で校長と理事長からの命令でここには人は近づけないようにしてある。ほら、起承転結、事実を詳細かつ簡潔に述べる」

「しかたないなあ、ここから話すこととは誰にも言つたら黙口だよ？」

「ああ」

小さくうなずく千冬を見て何から話したものかと考え始める。

「シャルルちゃんが女の子でここに居れるように『テュノア社社長を社会的に殺すこと』にしたんだ。以上、終わり」

「待て。『テュノアが女だからといってなぜ『テュノア社社長を社会的に殺すこと』になる」

喜色の説明は確かに簡潔だ。過程をぶつ飛ばして結論だけを述べている。だが、簡潔に言つただけで詳細に述べるという部分をこれっぽっちも満たしていない。これだけの説明でわかるのは一を聞いて百を知るような天才にしか理解できないだろう。

というか普通の人間が理解出来るわけがない。出来るのならばその人は天才だろう。

「え？ わかんない？」

「わかるか。わかつてたまるか。私はどじきのウサミミ女ではない」

「……まったくしうがないなあ。主人公がここに居させたいって言つたのもあるけど本人がここに居たいっていつたからだよ」

「ああ、そういうことか。デュノアをここに留まらせんにはエリがないといけない。だがデュノアの枷となつている一夏とお前のデータを盗むのを止めさせるため、元凶の『デュノア社社長を潰して開発許可をキサラギ社に譲渡させたと?』

「やうこいつこと。ド、あのウサミミ女がやうにかならない?」

「無理だ」

「無理だよねえ」

「「はあ……」」

2人そろつてため息を深々とつく。
喜色がところでと話題を変える。

「あのウサミミの考えることが全くわからないんだけど。なんか第三世代の設計図を送ってきたんだけど。ぱっと見たけど現行HSの性能を余裕でぶつけきるほどだつたんだけ」

「あのウサミミ……！ また余計なことを！ 第三世代のトライアールが始まつたばかりだというのに、百式に続いて！」

「まあ、天才の考えることを凡人が理解しようとするのが無理なことだよね」

「は、笑わせる。HSの参考書を一週間足らずですべて覚え、教師に参つたと言わせるお前が凡人？ 腹がよじれるからやめてくれ」

鼻で笑われた喜色は傷ついたと肩を竦め、目元を拭う振りをする。

「それで何故かウサミミが僕の専用機がもう少しで届くって言つてたけど、まさか一、一枚噛んでないよね？」

「いや、聞いたことはないが」

「織斑先生！ 転校生が！」

扉が大きな音を発して開かれポーテールが部屋に飛び込んでくる。

「篠ノ之、この部屋がある意味がわかっているのか？」

「すみません……。そんなことより！ ラウラ・ボーデヴィッヒが、セシリアと鈴を……それに一夏が……」

部屋に飛び込んできた篝は反省したように謝るがなぜ部屋に飛び込んだのかを思い出す。

ガタツ！

「……何かあつたようだな。蒼崎、ついてこい。何かあつたらお前も動けよ」

「え、ちよ、僕も？ といふか説明ブリーズ」

「いつまでもノロノロするな」

一夏の名前が出ると即座に千冬は立ち上がって喜色の首を引っ張る。喜色は抵抗する事も出来ず連れ去られていった。

「おおおおおおー！」

セシリアと鈴をいたぶるラウラの口元が愉快そうに口を歪めるのを見たとき、俺の中で何がが切れた。

白式を開すると同時に雪片一型を使い零落白夜を発動、勢いをつけてアリーナを取り囲むバリアを斬りつける。

零落白夜はバリアを軽々と斬り裂き、バリアに出来た隙間をすり

抜ける。

零落白夜を発動したまま瞬時加速を行つ。二つの同時使用はエネルギー消費が半端じゃなく、シールドエネルギーがガリガリと削られると千冬姉や蒼崎も同じように戸に言つていたけれど今は悠長そんなことをしている場合じやない。

「その手を……離せ！」

「ふん、絵にかいたような馬鹿だな」

振り下ろした雪片が突然動かすことが出来なくなる。なんで、どうやって、完全に死角からの攻撃だったのになんで反応出来た？『IJSはハイパーセンサーのおかげで360°を見渡せるから死角なんてないんだよ。だからいつもと同じ感覚で戦つてたらすぐに死角にまわりこまれるよ』

蒼崎の言葉を思い出す。そうか、こいつの言動を見ていると軍人みたいだし、蒼崎もそんなことを言つていた。それならば死角から繰り出した攻撃に反応したのも当然だろう。

「なんだこれ！ 体が急に！」

俺は宙に固定されたように指の一本さえも動かすことが出来なくなる。眼帯で隠れている右目が俺を見つめているように錯覚する。シールドエネルギーの斬量も少なくなってきたのか、零落白夜のエネルギー刃が消失していく。

「見え透いた攻撃、戦場で敵を目の前にしての混乱……敵ではないな。消えろ」

肩に装備されている大型のカノン砲が回転し、砲口を俺に向ける。

ラウラは軍人だ。殺すことなど躊躇はしないだろう。くそ！

「一夏つ、離れて！」

俺の背後からシャルルがアサルトライフルを2丁構え、銃身をラウラに向けて引き金を引く。

「む……雑魚が。鬱陶しい」

俺を見つめていた右目が逸らされ、体がいきなり動けるようになる。

おそらくシャルルが時間稼ぎをしてくれるだろ？ から俺はラウラの傍に倒れているセシリアと鈴を抱きかかえる。

すぐそばではシャルルがラウラをうまく俺たちから引き離していく。

（瞬時加速で一気に離脱する…）

エネルギー残量を見ると瞬時加速が一回行えるかどうかの量だった。

後のことば後で考えればいい！ 今はラウラから距離を取るのが最優先だ。

背中にあるスラスターがエネルギーが取りこんで圧縮し、一気に放出する。爆発的な加速力を持つて世界が歪み、ラウラの傍から離脱する。

「一夏、一人は！？」

「う……一夏……？」

「無様な姿を……お見せしてしまいました……」

「喋らなくていい。大丈夫だ、意識はある。今すぐ死ぬよつなことは無い」

セシリアと鈴を抱えた俺を援護しながら喋るシャルルの手にあるアサルトライフルの銃身は休むことなく弾丸を吐き出し続ける。その弾丸をラウラは避けて、防いで俺に使った動きを止める力で凌いでいたが攻勢に出ようと身をかがめる。

「面白い。そこの男と一緒に潰してやる!」

瞬時加速を行つようだ。このままじゃ一人を守ることはできない。一人を床に寝かせ、カウンターを狙おうと雪片を身体に隠すように構える。

「行くぞ!」

「ちくしょう! 急ぎ過ぎなんだよ!」

ラウラのエリのスラスターがエネルギーを放出しようとし、俺は一瞬で近づいてくるであろうラウラに向けて雪片を横に薙ぎないとしあたそのとき俺の前とラウラの前に影が割り込んできた。

ギインツ!

金属のぶつかり合ひ耳に不快な音を出してラウラは加速を中断させられ、俺が薙いだ雪片も途中で止められた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れるんだ」

「千冬姉！？」

「やあ、フランスコベビー。元気？ って元氣すげるくらいか。しかし軍人が力をふるう場所を間違えるとはね。千冬ちゃんがそう教えたの？ だとしたら千冬ちゃんは最低の教官つてことになるよね。それでも獣じやなくてひとなんだから言葉で解決しようとは思わないの？」

「貴様、何故私の生まれを……！」

その一つの影はISを装備しておらず、ISスーツも来ていない。だけど、千冬姉の手には170センチメートルはあるうかというIS用近接ブレードで、蒼崎は右手に持った甲龍の落ちていた双天月牙でラウラの手刀を受け止め、ブルーティアーズのインター・セプタ一を左手に握りいつでも投げられるよう構えてる。

二人ともが普通、生身では持つことさえできない武装を軽々と振りまわしている。千冬姉は超人じみているからまだ分かるけど、蒼崎はちよつと信じられない。

「模擬戦をやるのは勝手にしろ。だが、アリーナのバリアを破壊するのは無視できん。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらひ！」

「教官がそう仰るなら」

「あ、さすが軍人、冷静になるのが早いね」

ラウラは素直に頷きISを解除する。アーマーが粒子になりはじめて消える。蒼崎も構えていた武器をおろすが手放したりはしない。

不意を突いてくるつて考えてるのか？

「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな」

「あ、ああ」

確認を取るのではなく既に決まつたことの確認。つい生返事で返してしまう。

「教師にはハイと答える」

「は、はい」

「僕もそれで構いません」

俺は蛇に睨まれた蛙のように縮こまつてしまつ。仕方ないじゃないか、有無を言わせないという嫌といつたら強制的にうんと言わせる田で見てくるのだから。

千冬姉はアリーナを見渡し大きく声を張る。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

強く叩いた千冬姉の手からは銃声のような音が聞こえ、アリーナに響き渡つた。

10話 四 転校生は過激（後書き）

最近やつとラウリの良さが分かつてきただよくな気がしないでもないです。

さて、うちの主人公は何者なのかなあ……。

次はもう少し早く投稿できるはず。というか、こんな感じで話を進めていいのか疑問に思つ今日この頃。

以下、どうでもいい独り言

steins ; gateが楽しみすぎる。早く一週間がたたないかなあ。

カラオケにこの前強制連行されたで「やるの巻。
みんなが知つてそうにない曲ばかり歌つてたらみんな知つていたで
ござります。

ちくせう。なぜ強制連行されたのに一本調子と言われなければならなかつたのでござりますかああああ！
シメでスカイクラッドの観測者歌つてやつたぜ

1-1話 四専用機（前書き）

やっぱ一専用機だぜい

詳しきは描写していないのでみんなの妄想力で補完してください。
みんなの想像力が試される！

織斑先生と専用機のことを話した後、ボーネヴィッシュさんにやられていた2人が気になつて保健室の扉を開けた僕の目に映つたのは、喜色に体をつつかれて悶絶するセシリ亞と鈴の二人だった。

「……なにしてゐるの？」

「あ、シャルルちゃん。今T-Sのダメージレベルがこなのに学年別試合に出よつとする一人を懲らしめてるの」

そう言つてまた一人の体ツンツンとつつき始める。セシリ亞と鈴が本当に痛がつてゐるんだけど大丈夫かな。

「あ、蒼崎い……あんた、治つたら見てなさいよ……ヒグッ！？」

「あ、蒼崎さん……あなた、楽しんでませんか……ヒイー！」

「楽しんでいる？ そんなことないよ。君たちを引き留めようとする口実で一人をつづいてその反応を楽しんでいるなんてことは無いからねー！」

「蒼崎、血出しちゃう血出しちゃう」

一夏の忠告に大きな動きと共にしまつたと喜色はこゝ。
楽しそうだなあ。

「どうかなんでラウラと戦つたんだ？ いつもの一人なら無視しそうなのに」

「それは……」

「イロイロあるのですわ。そう、イロイロ」

「ふーん」

「どうせボーデヴィッシュちゃんに主人公を馬鹿にされたんでしょう？ 具体的には種馬って」

喜色は二人の耳元で話していたから最後あたりは聞こえなかつたけど、それなら納得だね。

二人とも顔を真っ赤にしてるから図星みたいだし。

「ああ、そつか。一夏格好いいもんね。二人とも一夏がすむぐつ！？」

「つ つ！」

「…………」

二人に口を一瞬で塞がれた。というかそんなに痛いならじつはていなきやいけないのに。本人には知られたくないみたい。

ドドドドドードー

「ん？ なんだこの音」

「なんか福袋を買いに走る四、五十のおばさんたちの走る音みたい
な……」

「喜色、それはないよ」

遠くから聞こえる音に僕たちは顔を見合せた。

ガラツ！

「織斑くん！」

「蒼崎くん！」

「デュノアくん！」

『私と学年別試合のペアを組んで…』

「…………」

「…………」

扉を開けたのはこの学園にいる女の子たちだった。でも、一年生や三年生はいなくて一年生だけがいる。

そつか学年別試合はペアなんだ。この間に襲撃があつたからなのか？ もし同じようなことがあつたら一人だと危険だから一人組になつたのかな。

「えーと、悪いなみんな！ 僕はシャルルとペアを組むんだ、蒼崎か他の人をあたってくれ！」

「えーもう組んじゃつてるのかー」

「残念だよー」

「男同士……」

「ジユルリ……」

最後あたりの人はなにを考えてるのー? 僕は男装してるけど女だからね。

ふと思いつ出して喜色の方を見てみる。

「…………」

ジリツジリツ

いつの間にか僕たちの近くからは遠く離れた窓際にジリジリと追い詰められてる……。さっきからチラチラ僕を見るけど「ゴメン、無理。あそこに飛び込む勇気はないよ。

「さあ」

「蒼崎くん」

「私と」

「ペアを」

「組んで!」

「なんでホラーー!? 助けて主人公!」

あそこに飛び込むなら織斑先生の出席簿を受けた方がいいかも。僕が首を横に振ると喜色の顔には汗が滴り落ちる。

「ぐ……」

『ぐ?』

「……Good Luck!」

『あ、待てーー!』

後ろの窓を開け喜色は外に飛び出す。ていうかいまの英語の発音すくよくなかった?

「ふはははは! いつまでも俺を主人公としか言わない罰だ! ……ゴメンナサイ」

僕とセシリ亞と鈴のジト目に耐えきれなくなつたのかすぐに謝つてくる。謝るなら言わなきやいいのに。

……でも、こうじう騒がしいのもなんかいいよね。後ろも騒がしくしてゐじ。

「織斑先生……」

「ん? どうした天才からT字が届いたような顔をして」

いつもと同じように決まり切つた時間にテスクワークをしている

と山田先生が困惑というか迷っているというか判断がつかないと、つた顔をして私に声をかけてくる。

「いえ、天才からではないんですけど蒼崎くんのヒヒを持ってきたという人が……」

蒼崎のヒヒ？ ああ、近々来るとか言っていたな。蒼崎の話を聞く限りあのウサミミが関わっているようだし万全の体勢でいいと何が起こるか分からん。

「わかった。私がいヒヒ」

「え、えっと、お氣をつけて！」

何故山田先生は戦場に行く人を見送る顔をするのだろうか。

「お待たせしました。IS学園教師の織斑千冬です」

「待つなんてとんでもないです。モンドグロッソ優勝者を間近に見ることができて光榮です。機会があればぜひその身体を調べさせてほしいのです」

山田先生が言っていたのはこの事か。いやらしい口つきでは無く研究者の目で見てくるやつは久しぶりだな。

防諜対策の取られた部屋にいたのは見た目は私と同年代であつた男だった。

「ははは、それは勘弁したいものです。それで今日来られたのは蒼崎喜色の専用機の搬入と聞きましたが」

「ええ！ 我が社の全てを使い、篠ノ之博士からのいまだ世に公表されていない技術を使い、試行錯誤を繰り返し、二週間完全徹夜で篠ノ之博士には劣りますが一般的には天才と呼ばれる私を含める五人の魂とも言えるものが詰め込まれたＩＳを持つてまいりました！」

「そうですか。蒼崎喜色は呼んだほうがよろしいですか？」

突然立ち上がり熱く語り始めた男の田元には濃い隈がある。二週間完徹とは恐れ入る。

これは蒼崎のことであるからあいつもいたほうがいいだろう。

「いえ、その必要はないです。私どもとはＩＳの通信で連絡が取れるようになつておりますので結構です。私はＩＳを持つてきただけですし、まだ研究があるので」

それでは、と立ち上がりフラフラと男は部屋から出ていく。研究

……か。束のようなやつだな。

しかし一つのクラスに専用機が五機……いや鳳がいるから六機か。六機もあれば戦争も可能なレベルだ。それになぜ委員会は私のクラスだけに専用機持ちを入れてくる？ 何か目的もあるのだろうか……。

まあいい。私は一夏が無事であればそれでいい。一夏が大切にしているものが無事であればそれでいい。む？ あのガキどもも大切にしていたな……。むう……これが姉離れといつものか？

「蒼崎くん蒼崎くん！」

「あれー？ ビーしたんですかー？」

俺が蒼崎と食堂に歩いていると山田先生が走ってきた。おお、素晴らしい揺れですね。どこがとは言わないが。

最近は蒼崎も結構一緒にいるようになつたし、入学した時みたいに近寄りがたい雰囲気はそれなりに少なくなつた。他の女子とも結構話すようになった。表情を隠すようになり二口二口してるのは変わらないけど。

「はあ、はあ、はあ」

「落ち着いて落ち着いて。僕は逃げないから」

ふむ、思荒く、顔を赤くして胸に手をあてる山田先生もいいな。げふんげふん！

「え、えっとですね、蒼崎くんの専用機が

「来たのー!? さあ行こー! 専用機が待ってるー。あ、主人公も来る?」

「お、おひ」

勢いに押されてつい頷いた。どうか目がキラキラしてプレゼントを貰う直前の子どもみたいな感じがするな。今までそういうことが無かったのか？

まあ、蒼崎の専用機も見てみたいしついでいくか。

「何これ！ 涙い！ かつこいい！」

「これは……格好いいな」

「気にいつて貰えたか。よかつたよ」

ピットの中央には全身装甲の2メートル50センチは超えるかという巨体のISHが静かにあった。濃いグレーに所々に白と黒のラインが入っている。そのISHの横にはワイルドに顎鬚を生やしてオールバックの中年のおっさんが歯を見せて笑っていた。

「あんたがこれを作ったの？ スペックとか特色とか詳しく教えてほしい」

「俺のほかに後四人いるぞ。スペックや特色だつたな。まず見てのとおりこれは全身装甲だ。篠ノ之博士が送ってきた未知の技術にとても頑丈な装甲があつたんでな、ここは防御を完璧にしておこうとなつてな」

「篠ノ之？ 束？ 技術……ゴジマ技術か！」

ああ、まだ。またこの蒼崎の肌を刺すような威圧感。あのクラス対抗戦のときと同じような威圧感。蒼崎は『コジマ技術』という言葉にアレルギーみたいに過剰に反応する。何があったのかはまだ教えくれないけどなにかあるんだろ?……。

男の人も慌てて何かを空間ディスプレイに映し出す。

「落ち着いてくれ。篠ノ之博士から取り除く方法が送られてきている。見てみろ」

「あの技術は不完全だ。戦闘に耐えうるようなものじゃない」

「ああ、分かっている。一度シユミレートしてみた。激しく動いた後は何パーセントか有害物質が取り除かれていなかつた。ならば、さらに改良すればいいじゃないか。こちらには大天才には及ばないが天才が五人もいるんだ」

「……続けて」

蒼崎は真剣な目でディスプレイを見つめ続ける。俺が口を挟める空氣じゃないな、黙つていいよ。千冬姉も黙つているし。

少し前にコジマ粒子の有毒性を聞いたけど凶悪すぎる。核の数百倍なんて馬鹿な俺でもヤバいと分かる。

「不完全な点を全て洗い出した。ここと、ここと、ここだ。俺達でもやつと気付けたところだ。一人では気付けなかつただろう。そして改良を施した。さらに同じ有害物質除去装置を五重にし、外側にはグレートウォールの装甲を使った。これを突破するのは今稼働しているIISが一斉に攻撃しても無理だ。この俺が断言する。不可能だと」

「……信じるから。裏切らないでよ」

「ああ、大丈夫だ。」JのHSは既存のものの攻撃、防御、機動性、耐久性、作戦継続能力など全てを軽々と越える性能だ。これに乗れるんだ、悪い話じやないと思うぜ」

これを最後に男は口を閉じ蒼崎にHSに乗るよう囁いて訴えてかけている。蒼崎はゆっくりとHS近づき後ろに開かれたところに手を入れたところで動きを止めて振り返る。

「JのHSの名前は何？」

「ああ、忘れてたな。『アンサー・テイン・リイ』だ」

「ふうん『不確定』なのか『頼りない』なのかどっちなのかな」

「嫌なら自分で付け替えればいいぞ」

システム起動 プログラム初期化……コンプリート 搭乗者の個人情報登録……完了
以降、操縦者と認定します。機体名『アンサー・テイン・リイ』から変更しますか？……NO。機体名『アンサー・テイン・リイ』に固定。プログラム最適化……少々時間がかかります。そのままお待ちく

ださい。音声ファイルメッセージがあります。再生しますか？

YES。 篠ノ之東からのメッセージを再生し、NOを連

打しないでください。

『やつほー束さんだよー元気？ 束さんは元気だよー。どうやらISは届いたみたいだね。そのISは私からの命令も拒否するようになっているから私からも介入できないから安心してね！ あ、でもコア・ネットワークはそのままだからねー。それじゃあ適正化のためにこの前のISの劣化版送るから戦つてね。コジマは使ってないよ。もうしばらくしたらまた会えるから待つてね！ 具体的には海で会おうねー』

「……」

メッセージは以上です。六時の方向から敵機複数接近。アリーナに出た場合600秒後に接敵します。

装備を選択してください。……標準モード。性能を制限しますか？ 制限なしではまだ機体に振り回されると予測します、五十パーセント制限することを推奨します。……性能制限五十パーセントに設定。

田の前に次々と現れるウインドウに表示される選択肢を戸惑いながらも喜色は選んでいく。ISの中は意外と狭苦しくなく、ちようどいい。全身装甲で視界は狭いと思われたがハイパー・センサーが起動しており360°全方位を見渡すことが出来る。

有害物質除去装置は正常に作動。有害物質は0パーセントです。プライマルアーマー正常に作動。ブースター問題なし。チェック項目オールクリア。武装展開。左腕にはライフル、右腕にはブレードを展開。

左手にはライフルが握られ、右手には手の甲に刃がまだないブレードが展開される。ブレードは攻撃の際に出現するのだろう。

ブースター点火。

戦闘準備完了。あなたの戦いに幸あらんことを。

ブースターから光がほどばしり甲高い音を出してアンサー・テインリイはピットから飛び出していった。

その場に残された三人は何故飛び出したのか分からず顔を見合わせていたが千冬の端末に通信が入る。

『織斑先生大変です！ この間のIISがまた強襲してきました！ そちらの方には避難してもらつて織斑くんはいつでも出撃できるよう準備をしてください』

「……いや、必要ない」

『ふえ？』

「いま蒼崎が迎撃にいった。足止めくらいなら出来るだろ？

「そうだ、私たちが作ったIISが無人機に負けるとでも？」

「私の弟は一機にやられたが？」

「ぐつーー？」

一夏のこのころに言葉の槍が刺さる。

「それはただ単に弱かつただけだらう。その弟が

「ぐふつー?」

「ククク、私の弟が弱いと言つことか?」

「フハハ、事実だろ?」

「ククククククククク

「フハハハハハハハ

「ハツハツハツハツ!」「

千冬と男がいきなり高笑いを始める横で一夏は心の傷の部分を押さえており復活にはもう少し時間がかかりそうだった。

いまはまだ専用機は詳しく描寫する気はありません。

次は戦い。すぐ終わります。

ストックが結構出来たので一気に投下します。

以下、どうでもいい独り言

steins;gate 見終わった。最後はインパクトが足らなかつた気がするけど23話が凄すぎただけだと思つ。

エースコンバット体験版始まつてた。やりたい。やりたいけどPS3がないのよおおお！ 中古のxb0xが1万ちょいで売つてた。買つたほうがいいのかなあ。

god eater 2発売！ PSP！ 予約決定いやつふーいでキャラの絵をみたらFFになつてた。なにがあつたのさ。もちろんリンクさんとジーナさん出るよね？

1-2回目　あひと魔王を開け（前書き）

戦闘……むりほ

12話 四 あつと驚け田を開け

モニターの向こうに空中に立つようにして静止する蒼崎の専用機
『アンサー・テイン・リイ』は静かに敵が来るのを待ってるみたいだ。
となりでレーダーを見ていた山田先生が声を出す。

「レーダーに敵影確認！ 1……2……3……6機！？ 多すぎ
ます至急専用機持ちに出撃準備を！」

「6機！？ あんなのが6機もいっぺんに来るのか！？」

俺と鈴の2人がかりで足止めしか出来なかつたのにそれが6機も
来るなんて……。

無意識に待機状態の百式に手を添える。

「待つんだ。それは必要ない。アンサー・テイン・リイだけで十分だ」

「え？」

おっさん言葉に俺と山田先生の言葉が重なる。
「ぐら高性能だったとしてもそれは無理だと思つて千冬姉を見る。

「…………」

「千冬姉……それ塩……」

「何故塩がここに…」

「織斑先生、それ織斑くんが戦つたときもでしたよね？」

「一ヒーを飲もうとしていた千冬姉がスプーンに取っていたのは塩。誰がなんと言おうが塩。千冬姉らしくない失敗だな。つていうかセシリアと戦つたときも塩を入れてたのか。

「……あ、やっぱり心配なんですね？ ね？」

「千冬姉、俺のときも塩を入れたのか？」

ギリリッ！

「いたいいたいいたい！」

「あうあう……」

「山田先生私は言いましたよね。からかわれるのは嫌いだと。一夏も私はからかわれるのは嫌いと知っているだろ？」「

わかつたからアイアンクローはやめてくれ！ 頭が変形しそうだから！

「次はない」

千冬姉の手が頭から離される。うー、頭歪んでないかな……。ふと横を見ると山田先生も頭をチェックしていた。……同士よー……

「それでなぜT-1機で足りると言つんだ？ それなりに理由があるのだろう？」「それでなぜT-1機で足りると言つんだ？ それなりに理由があ

「ああ、無いのならほかのヤツに任せや。折角の初陣だ、黒星は縁起が悪い」

せつほつ、IISの調子を見るためにもIISにいるんだな。
続けてと三人で促す。

「まあ、ゆづくつ話すとしよひ。そら、来たぞ」

「あ、数に変わりはありませんー」

アンサー・テインソリイが動き始める。
まずは手慣らしとしてか先頭のIISに向かつてブレードを一閃。

「は？」

「え？」

「ええー？」

「どうだ？　まだ実力の一割も出していないぞ。あれはレーザーブレード。一瞬しかエネルギー刃を展開しない代わりに莫大な威力を生み出す。燃費もいいぞ」

蒼崎が切り裂いたIISは上下真っ二つに分かれて爆発した。え？

無人機？

……威力ありすぎだろ！？　あれがバカスカ繰り出されるなんて悪夢じやないか。

出会い頭に1機落とされて敵IISは少し動きが遅くなるがすぐに戻る。蒼崎を一斉に狙い始める。

「さあ、次だ。機動性だ」

敵I.Sの右腕から一斉にレーザーが撃たれる。Jの前のようじにキラキラした物質はないらしい。よかつた。

撃たれたレーザーが蒼崎に当たる瞬間、蒼崎の姿がそこから消えた。瞬間移動ではないと思つ。消える直前に姿がぶれていたから。確証はないけど。

「どこに行つた？」

慌ててモニターを見つめると遠くに蒼崎が豆粒のよつに見えた。一瞬での距離を？

「フツフツフ……」Jが瞬時加速のように無駄なエネルギーを使うことなく瞬時にブースターを使い距離をとるクイックブーストだ

「クイックブースト……。エネルギーを使わず瞬時にあの距離を移動するか……」

「おや、攻撃するよつだ。見てろ……田をむくなよ……」

姿が消え、蒼崎を探すI.Sの後ろからライフルの弾丸が着弾する。弾丸はI.Sの胴体を貫通し、地面に大きな穴を開ける。

それが頭に一発、胴体に一発、各四肢に一発ずつ撃ち込まれI.Sは墜落する。

「ちなみにあのライフルだが、性能でいえば一番下のランクだ。量子化されている中にはもつとすごいヤツもある。……が、使うことは無いだろうなあ」

どこか寂しそうに言つおつさん。一番下でのレベルなら最上級はどんなものなんだろうか。

残りは四機。俺が戦ったときはもつと追いつめられていたのに短時間であそこまでやるとは。

「次は防御だ」

「シールドがあるが？」

「そんなもの篠ノ之博士が作ったISの前では何の意味もない」

今度は時間差攻撃を始めている。蒼崎はクイックブーストとか言うので避けてるけど少しずつ回避が遅れてきてる。当てられてしまうな……。

「あつー！」

山田先生の声がでた瞬間蒼崎はついに被弾してしまった。だけど蒼崎が落ちてくる様子はなかつた。俺のときは掠るだけでヤバそつだつたのに。

「さあ、見ろ。あれが実弾には無敵を誇るシールド、プライマルアーマーだ。コジマ粒子を空中に散布、固着させて生み出してるんだ。レーザーにも多少は耐えるぞ！ ISスポーツのルールにはシールドエネルギーを増やしそぎるのは禁止されている。だがしかし！」

ビクッ！

おっさんが突然大声を出したから俺たちは驚いて飛び上がりかけた。千冬姉は眉を動かしただけだつたけど。

「だがしかし！ 別のエネルギーでシールドをつくりてはいかんとは何処にも書いていないじゃないか！ 僕たちはならばと思いついた！ 新しい動力を持つてきてそれでシールドを作ればいいじゃないかと！ 篠ノ之博士の寄こした技術を流用し、プライマルアーマーを造らせた！」

「確かにそのようなルールは無いが……普通のEISは性能を伸ばすことだけに視野をおいているからそのようなことを考えるやつはないのか……」

「だらりっ、今までない事をするから新しいと言われるんだ！ そして全身装甲など考えたやつはいなかつただろ？ そして絶対防御が発動した後の事を考えた人はいないだろ？ 僕たちは絶対防御が発動したとしても操縦者の生命を守るために見たことのない理論の装甲を全身に使った！ 操縦者が死ぬことは無い！」

ものすごい熱く語つてるけどモニターの向こうでは蒼崎が必死に戦つてるからな？ ものすごい頑張つているからな？

モニターの向こうでは蒼崎が敵EISの攻撃をクイックブーストとか言うのでビュンビュンかわして、もうほとんどビクイックブーストを使わずに避けてる。

「あまり手の内を晒すのはよくないな。それでは、目をじっかり開いておけよ？」

蒼崎は自分が四機の敵EISの中心に来るよう日に立ちまわっていた。
そんなことをしたらいっせい攻撃をされると思うんだけど……。

「さあ、ちびるなよ！？」

カツ！

突然蒼崎から光が溢れ出る。轟音がし、マイクはブツリと壊れ、モニターからは光が逆流する。

「なんだ!? なにがあった!」

「ふええ!? また敵襲ですか!…?」

「ハツハツハツ！ 今のもアンサー テインソリイの攻撃の一つだ！ 驚いたか！」

イタズラが成功した子どものよつこ声をあげるおっさんの中年を聞いて、塞いだ目を恐る恐る開ける。

うわ、目がチカチカする。どんな攻撃があんな光を出すんだ。クラスター爆弾を使ったとかじやないよな？

「モニターは……ちつ。カメラがやられているか。一夏、プライベートチャンネルで問い合わせて見る。おい、いまのはなんだ」

「あーマイクも壊れちゃってます……」

『あーびっくりしたー。オペレーション通りにやつたらいきなり爆発するとか』

千冬姉の言葉に応えるようにピクト「蒼崎の声が響きわたった。バツとおつやんを見るとニヤニヤしながら手に持ったボタンを押す。

空中にディスプレイがで、空に静止する蒼崎を映す。見る限りIISに損傷はない。よかつた。ひどいことにほなつてないみたいだ。

「蒼崎、無事か？」

『あ、千冬ちゃん？ 無事だよ、といつか傷一つ無いよ。すごいねこれ』

「ハツハツハツ！ 傷なんぞついてたまるかー 自分の攻撃で自滅しちばりやる」

『このおつせん殴りたい。なにがあつたかくらい教えてくれてもいいの』。

「あ、敵IIS全機墜落します。えーと、ボロボロです……」

「すげえ……こんな簡単に倒せるなんて……」

「ふん、お前にも出来ることだ。簡単にな。蒼崎、最適化は終わつたか」

あ、まだ初期設定のままだつたんだな。いや、待て。一つ引っかかるぞ。

「えつ！？ 初期設定であんなに動けるのかー！」

『うーん、なんか残り時間がまだ50秒あるんだよね。分じゃなくて時ね』

「なんだそれは……」

「なあ、おっさん。どうこいつことだ？」

「お、おっさん！？　いや、まあいい。今までに前例のないEISだからな。なんとも言えんよ」

前例が無いって全身装甲の有人EISは初めてだらうけど適當すぎる気がする。

アンサー・テイン・リイは戦つているときは比べものにならないくらい遅いスピードでピットに戻つてくる。あの無人機のEISを6機も相手にしたんだから労らないとな。

アンサー・テイン・リイの稼働状況を見ていた男は表立つて喜びはしなかつたが、心では狂喜乱舞をしていた。

いきなり降つてわいたEISの開発、未知の技術。技術者としてこれほど興味をそそられるものはない。科学者としても興奮させられた。見たことのない兵器に見たことのない理論、考えたこともない構想。二週間の徹夜など気にもならないほど最高だった。

寝不足で瞼はもう閉じそうで気を抜けば寝てしまいそうな状況だ。

だが、そんな眠気などアンサー・テインソリイが動くのを見たときから次元の彼方へ吹き飛んでいった。他人が考え、まとめた技術でもそれなりに改良は加えた。シユミレートでは完璧に出来ていたが、実際はどうなるか分かりはしない。

それがどうだ？　蓋を開けてみればどうだ。悠々と空を駆け、素早く走り、攻撃するISが男の目に映った。

男は興奮で息も忘れそうだった。アンサー・テインソリイは本来のIS技術は殆ど使っていない。ハイパー・センサーや武器の量子化程度だ。未知の技術がこのISの主体だ。今のISが強いと言つ風潮を打ち崩すことができる一步にもなる。

男には今の世の中は非常につまらなく感じる。なぜ？　簡単な話だ。ISの開発は難航、新しいことをしようとはせず、同じことだけをやり続け失敗する。つまらない。非常につまらない。この未知の技術を公表すればもっと素晴らしい開発競争が見られるのではないか。素晴らしい。さっそく実行に移そう。

ここまで考え思い出す。この技術はどこからきたか。篠ノ之博士からだ。あのアンサー・テインソリイの操縦者も知っているようだ。バラせば私は壙の中、最悪三途の川のむこうだ。どうやら楽しいことは出来ないようだ。ならばどうしようか。ならば新しい兵器を作ろうではないか。そしてそれがどう転がるかはわからないが楽しいことには違いない。

「ククク……フハハハハ……」

部屋には男が高笑いをしながら頭の中では新たな案をうだみしていた。

オーバースペックテラワロス~~~~~
何故か開発したおっさんが黒幕っぽくなる不思議。黒幕にする気はないのに。

性能は制限してるし大丈夫だと見た！

ああ、なぜそんなに「ジマ粒子の煌めきは美しいの？

以下、どうでもいい独り言

god eaterがFFすぐる。ハンマーとランスどっちか?
ランスで突撃しかないでしょう！

機動型のファンリル支部みたいなのが出てたけど
械とかつて凄くカッコイイと思う。
型つてつく機

リングドウさんであるかなあ？ ソーマでもいいよね。大穴でオウガ・
ド・マスクとか出できたらガチムチのおっさんキャラでプレイする。
なにが楽しくておっさんの尻を見てゲームしなければならないのか。

中国が永久機関を開発したっていうスレを見つけて、クマ一のAA
貼ろうとして見てみたら野菜ジュース吹いた~~~~~
アームに磁石をつけて車の前方に鉄板をつけるとか~~~~~
磁石は永久に磁力が弱まらないなんてあるわけがないのに~~~~~

W
W
W

明日も更新する予定です。

1-3話
少し、話してみようか（前書き）

予約投稿するつもりが予約出来ていなかったの巻。
1-2話が今日の午前零時投稿予定でした。
とこりわけで追加投下するでござる。

13話 四 少し、話してみようか

「SHRを始める。号令」

キリツ！ キラツケ！ レイ！

いつものI-S学園の朝、一年一組の教室ではいつものように千冬の号令でSHRが始める。軍隊のように動きがきびきびしているのもモンド・グロツソで優勝しどいつで特別教官と務めていた千冬が担任だからであろう。クラス全員欠席もなく、教室に声が響いた。問題は特に起ることなくSHRは順調に進み、最後に真耶がなにか言つことはありますかと千冬に視線を向ける。

「あー、そうだな、蒼崎の専用機が先日届いた。ちなみに機体名はアンサー・テインソリイ。コアはの所属は一応あるが、まあ建前のようなものだ。諸君はまだ若い。専用機があるが無からうが違いはさほどない。量産I-Sで専用機に喰らいつけるのは蒼崎が証明した。せいぜい励め。あるいはあのモンド・グロツソを制覇できるやもしれん。以上だ。号令」

キリツ！ キラツケ！ レイ！

号令が終わり教師の二人は授業のために教室を出て行つた。それを見届けた生徒一人が一夏と喜色の机に近づく。言つまでもなくセシリヤと第の一人だ。

セシリヤは専用機を持ち始めた喜色にむけて突撃し、第はどうでもよさげに一夏のそばにくる。

「蒼崎さん、専用機を持ったというのほ本当ですのー?」

「本当だよ。まだ一次移行も終わってないけどね」

「といふことは今この場には無いのですわね?」

喜色は首を軽く振り自分の首を指差す。首もとこほーつの鎖が見えた。一つは先にメモリがついてある。喜色が肌身離さず持つものだ。セシリ亞は疑問に思つ。

「なぜー一つチヨーンがあるのです?」

「あ、ごめん、こちちだよ」

ーーつある鎮の内一つ摘んで持ち上げる。鎮の先にはドックタグのような板がついており、板には何かが刻まれている。

『『C o n e q u a l w o r l d』』……不平等な世界、ですか?
それに文字にもチヨーンが巻かれてる意匠が……。どういう意味
ですの?』

「さあ? 僕にとっては特に意味はない。どうでもこことだよ」

「それより蒼崎はもの凄かつたよな」

意味深いような言葉を言つ喜色を見て首を傾げたセシリ亞を見て、一夏が話に入つてくる。

「なにがですか?」

「ああ、セシリアは居なかつたんだよな。蒼崎がISを装着したときにクラス対抗戦に乱入してきたISが来たんだ」

「まあ、なんてことが！　それを蒼崎さんが一人で倒したのですね！」

「そつなんだよ。機体も格好よかつたけど動きとかも凄かつたんだ。もう最初からハイスピードでさー！」

手を動かしながら凄さを伝えようとする一夏の言葉をセシリアは聞き逃さなかつた。一人白熱する一夏にセシリアは待つたをかける。

「ちょ、ちょっと待つてくださいます？　あのISは複数機いたんですね？」

「六機いたんだよ。あれ、言つてなかつたっけ？」

「聞いてないですわ！」と思つセシリアだが彼女は淑女だ。はしてない真似はしない。

「六機もですの！？　それでは一、三年生のかたが援護しましたの？」

「いや、蒼崎だけだ。もう、圧倒的だつたんだ。いきなりブレードで一閃したんだよなー。格好よかつたぜ」

「単騎で戦われたのですか！？　それはどうやつたんですか！？」

話が若干、噛み合わずお互に首を傾げる。困った顔をする一夏

に喜色は助け舟を出した。

「IJの間アリーナで爆発があつたの知ってる？　あれ、その時の影響なんだよね」

「え？」

「は？」

氣の抜けた声を出すセシリ亞と筈。喜色が使ったプライマルアー
マーは余波だけでも風が吹き荒れ、建物がいまにも倒れそうな程軋
んだ。

事情を知らない生徒の間では強襲をかけたテロリストを千冬が殴
りとばした音だという噂も流れている。プライマルアーマーが使わ
れた直後、どこぞの17代目当主が何事かと偵察に来たりしたがそ
れは別の話。

「あれはEIS-1機が起こしたことだよ」

「なつーー？」

「……面制圧兵器でも使ったのか？」

「えーと、蒼崎なんだつたつけ？　あ、あ、あれ」

「アサルトアーマーね。あれでも威力は絞ってるんだよ。9割くら
い。それでも半径10メートルはあるんだよね」

「きゅ、9割……」

「アツハツハツ、安心して大丈夫だよ。千冬ちゃんに使用を控える
ように言われたから」

大きく口を開けて楽しそうに笑う喜色とは対照的に三人は目を見
開いている。ISが世界最強の兵器としても明らかにオーバース
ペックだ。もし自分に向けて使われたらと考へ、三人とも体が震え
てしまう。

「千冬ちゃんもひどいよねー。ピットに戻るなり使用を控えろだつ
てさ。おかげで普通の装備しか使えないじゃん」

「で、では、馬鹿みたいに威力の大きいものは無いのですわね？」

「うん、ないよー」

「それならばわたくしと戦つてくださる？」の間のリベンジを果
たしたいのです」

「あ、セシリ亞、ま……」

アサルトアーマーにそれほど威力があるなら、アンサー・テインリ
イの装備は普通のものと思い、セシリ亞はリベンジを果たそうとす
る。一夏が忠告しきつとするが、時すでに遅し。

「いいよ。それより真耶ちゃんから聞いたんだけど、千冬ちゃんが
コーヒーに塩を入れてたって本当？」

「織斑先生がコーヒーに塩を入れた？ なにかの間違いじゃないか」

「そんなことを間違えるなんて……織斑先生にも人間らしいといふ

があるのですわね

「ああ、俺も田をうたが……」

仲良く話す四人に近づく黒い陰。陰は静かに近づき何かを持った腕を勢いよく振り下ろす。

パパバンッ！

「痛い！？」

「あやー!？」

「いっ！」

振り下ろされた何かは出席簿で、出席簿の持ち主で人の頭をポンポン叩く人は千冬しかいないと喜色は叩かれたと分かった瞬間に抗議の声を出す。

「僕の頭はポンポン叩いていいものじゃないんだよっ！ 千冬ちゃん！」

「ふん、教師の呼び方を忘れているんだ、衝撃で思い出してもいいと思わんか？ ほら、貴様ら席に戻れ」

パンと手を叩く千冬を見た生徒は我先にと席に着く。喜色のジトツとした視線を感じながらも満足そうに教室を見渡す。

「山田先生、授業を」

「あ、はいー」

わたわたとしながらも真耶が教科書を読みを始める。クラスに欠席は無くいつも通りの光景で、響くのは文字を書く音だけだった。

昼休憩、珍しく一夏たちと一緒に食事を取らなかつた鈴音が、屋上のベンチに背を預けて空を見上げる喜色を発見した。

田頃から喜色にからかわれてしまつ鈴音は「こ」が仕返す場面だと静かに、じつそりと息をとめながらゆきくつと近づく。

「蒼崎、あんた専用機持ちになつたらしごじゃないの、え?」

「……誰? 鈴音ちゃんじゃないか。あ、あれ? どうして朝までうつづつてしゃべつてくるの?」

「気にかかる」とは無いわよ。田頃の仕返しだもの」

ふん、と満足げな顔で喜色の身体を見つめる。喜色は自分の顔ではなく身体が見られてこると仄づき、腕で身体を隠すしぐさをかる。

「な、何見てるの? ややーおーそーわーれーるー

「誰が襲うか！ 襲うんなら一夏を襲つわよ

「え？ ふーん……ふーん……ふーん……ブッ！」

「笑うんじゃないわよー。」

「痛いー！？」

喜色から漏れた笑い声に、つい鈴音は拳を振るひ。その顔は怒つてこるみたいだが真っ赤で怖くもない。

鈴音は胸倉を掴み、喜色をガツクンガツクンと前後左右にゆする。

「いい、あんたは何も聞いてない！ いいわねー。」

「わ、分かったから揺らすのやめてーー。」

「…………ふう。一夏に言つちやダメだからねー。」

「まあ、鈴音ちゃんが主人公を好いてるのは分かり切つたことだからどうでもいいんだけど、なんで僕をジッて見てたの？」

ひとまず落ち着いて一つ息をつく。絶対言つなど指を指しながらいつ鈴音に、ときほどの行動の意味を尋ねる。

「あー、あんたが専用機持ちになつたって言つからビートあるのかなつて」

「なんだ、つまんない。ああやだやだ。」この生徒は何かあれば二

喜色にはHABAばかり。もつと楽しい会話をしないのかなあ「

「あんたにひとつ楽しい会話つて何なのよ。つていうかあんたつて
いつ言い方めんどくさいわね」

他の専用機持ちと仲良くするのもいいだろつと喜色の隣に腰掛け
る。何なのよと問われた喜色は数秒ほど考え込む。

「なら好きに呼びなよ。楽しい会話……か。そうだね、家族の話と
か聞いてると楽しくなるよね」

「それなら喜色つて呼ぶわ。他人事を聞くのが楽しいの?」

他人の家族の話などどうでもいいし、気にすることでもない。と
いうのが普通の人の考え方だろつ。ただ、喜色は良くも悪くも普通
ではない。

「楽しいよ。あーこんな家族もあるんだなーって。今まで聞いた
数は片手で足りるけどね」

「それ、少なすぎない?」

「しようがなによ、僕と話してくれる人なんて片手で数えられるく
らいだつたからね」

「だつた?」

鈴音は何かを含んで話す喜色を疑問に思つ。自分のことを話さな
い喜色にしては珍しく、疑問に大きく首を縦に振る。今日は天氣も
いいから舌もよく回つて、固い口も弛んだのだろうか。

「だつて殺されたんだから。あの女こ。ま、それも四年くらい前だけど」

「あ、『ごめん……殺された？ そんなニュース聞いたこと無いわよ？』

「大丈夫。気にならないから。知らないのも当然だよ。大陸の違法な研究所にいたからね。死のうが死ぬまいがそこにいたっていう証拠がないからね」

何か普通ではない雰囲気を意識ではなく、本能が感じ取りすうつと背中を流れる汗を鈴音は知覚する。夏は近いがまだ涼しいし、今居るのは影だ。汗が流れたのは決して暑いからではないはず。

「違法な研究所？ デジコリヒ」と？」

「んー……簡単にいうと表には出せないことを研究するといふ」

「違つわよ。喜色は何者つてことよ」

「それは秘密。いつかは話すよ。結構グロッキーだし、聞かないほうがいいかもしけないけどね」

喜色の口調も表情も、いつものように一夏と話すように軽い。鈴音は傷つけないよう、傷つけなによくこと言葉を選びながら話す。

「あなたはなんで表情を隠すよつて笑つのよ。つらになつたら
そうな顔すればいいじゃなー」

無理に決まつて。自分は一夏みたいに人の心の動きに敏感じゃない。どうしても直球になつてしまつ。

「……えー？ 隠してないよ。つらつらとなんて全然ないよ？ 笑つてるかなー？」

喜色はペタペタと顔に触れて表情を確かめようとした。それを鈴音はチラリと盗み見た。

「自覚無いの？ 教えといてあげる。喜色は常に表情を隠してるし、感情に起伏が少ないわ。というかあんたが悲しんだりするとこりを見たことがない。もうちょっと子供もみたいに振る舞つてもいいんじゃないの？」

「アハハー子供もがどんな風に振る舞つているかわかんないんだよー」

「ほり隠さない。また笑つてる」

鈴音は田畠く指摘をする。指摘された喜色はつゝ、と声を漏らして普通の表情に戻そぐとする。

「……鈴音ちゃんつたら

「なによー 変なこと言つたら殴るから」

「なんかあの人によく似てるんだよね

「あの人？」

あの人とは誰だろ？ 鈴音は少し考えてみる。千冬さん？ — 夏？ 山田先生？ それとも、もう死んだって言う人？

「そう、用もないのに話にきて、いつの間にか人の心に入り込むような人。いろんな話をしてくれたし、たくさん話を聞いてくれた。と言つても僕が話すことはほとんど無かつたんだけどね」

「ふーん……。その人は優しかったのね」

「とつても優しかったよ。それに凄く綺麗だった。見た目も、心も。僕みたいな化け物にもにこにこしながら話してくれたから」

「……」

鈴音はこういつ時の自分の少ない語彙が嫌になる。一夏ならこそからどんどん心に入り込んでいくだろうに……。気の利いた言葉を返すことも出来ず、横目で喜色を見てみる。

「でもね、時々話してると顔が泣きそうになつてたんだ。なんでだろ？ ね？」

横目で見た喜色は今まで見た表情を隠すようにして笑うのではなく、昔を思い出して心から笑つてこむように見えた。

「……さあね。心に残つてるならそれが思い出つて言つんじやないの？ 私はよくわかんないわ」

「思い出かあ。その思い出もいつか消えちやうのかな？」 記憶を保存できたらいいのにね

「薄れてしまつのが思ひ出なのよ。ずつと覚えてるならそれはただの記録でしょ？……さて、そろそろ授業だし、私は戻るわ。喜色もサボつたら駄目よ」

いい答えを返せた気がする。そう思ひながら勢いをつけて立ち上がる。時計を見ると授業開始五分前だ。

サボりやうな雰囲気の喜色に一応注意しておぐ。

「確かにそうだね。もつともだ。ちなみに次は千冬ちゃんがいるからちちちゃんと出るよ」

「そう。あ、今度模擬戦しなさいよ」

最後の言葉は聞こえていても聞こえていないくともどっちでもいい。どつかれ授業で戦うだろうから。

屋上への扉を閉めるときに見た喜色は来たときと同じベンチに背を預け、空を見上げていた。ただ、一つ違うのが喜色の表情が少しだけ柔らかくなっていた。

「初めまして。シャルル・デュノアです」

「初めましてだ。『シャルロット・デュノア』」

「……」

「ああ、心配しなくていい。別にとつて食おうなどと考えてない
ぞ」

「どうして僕の本名を知ってるんですか」

「篠ノ之束さ。第三世代の設計図とともに搭乗者データも送られて
きたよ」

「篠ノ之、束？ あの篠ノ之束？」

「そうさ。大天才・天災・変人・確保不可能・IS開発者の篠ノ之
束さ」

「どうして……」

「知らないしることも出来ぬだらうし、知る気もなーいさ」

「なにがしたいんですか」

「簡単なことだよシャルルクン。篠ノ之束が第三世代の設計図を送
つてきた？ 知るか。我らは他人の考えたものなど不要。ISは
我らが全て構成する。よつやくコアが手に入ったのだから」

「BT兵器？ AIC？ 衝撃砲？ 展開装甲？ 知るか
そんなもの。既存の、既に理論があり、興奮しないものなど何の魅
力もありはしない。我らを満たすのはロマンのみ！」

「……え？」

「取り扱いの出来ない大砲を気合いで使うのは心が踊る。その大砲の火薬を嗅いだのならばさらに心が踊る。

「一丁拳銃など憧れる。現実では不可能、合理的ではない、話にならない。だからこそ憧れるのだろう。

武装がブレード一本だけ。素晴らしいじゃないか。それだけでもう失神しそうだ。それで敵を倒したのならば失神確実だ。それで負けたときは碎けそうな程歯を食いしばるだろう。

生身で使うための技を機械に乗つて行う。不可能ではない、なんのために科学があるのか。それを実現させるためだろう。

搭乗者に過大な負荷をかける代償に莫大なパワーを手に入れる。血肉が沸き立つだろう。それでこそロマンだ。

ドリルは穴を掘るもの。当たり前だ。穴を掘るために開発されたのだから。だがそれを武器にするなど誰が考えるだろうか。それでこそロマンだ。

パイルバンカーの炸薬の臭いなど嗅ぐだけで失神するだろう。絶大な威力。極小の射程距離。素晴らしい。素晴らしい！ 素晴らし！ い！！ それでこそロマンだ！！

「え、いや、ちょ、あの……」

「女性で例えるとするならばルビーだ、サファイアだ、オパールだ、金だ、銀だ、ダイヤモンドだ。滅多に無いものならとも興奮するだろう。それだよ。その興奮を我らは科学に求めるのだよ」

「えっと、その……」

「待っていたまえ、シャルロットクン！ 女性のキミでも興奮するであろうエスを作つてくるぞ！ 大体性別など関係ないのだ！」

興奮するものには興奮する。それが真理だ！

さあ、期待しろ待ちわびろ渴望しろ求めろ求めろ求めろ
求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ
求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ
求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ求めろ！

素晴らしい機体を作り上げようではないか！ ファーハツハツ
ハツハツハツ！！

1-3話四 少し、話してみよつか（後書き）

この話はいい出来。

鈴音がヒロインみたい！ でも違うよー。

それで主人公の過去を少しバラす。鈴音は誰にも話さず、HIS学園で知っているのは本人と千冬と鈴音だけ。
どうせすぐには専用機持ちはみんな知る予定。

そしてシャルロットのリファール魔改造フラグ建設完了。
でも活躍はかなりあと。

自信を持つてこの科学者は変態だと言える。

以下、どうでもいい独り言

tiger & amp ; bunny 見終わつた。

おじさんなんで降格してゐんですか。

終わり方がものつそい一期に繋げられる終わり方だった。
一期はルナさんと楓ちゃんのコンビだよね？ ね？

PVの伸びがわるいなあ……

やつぱりタイトルに魅力を感じないとか？

まさか面白くないとか？

まあ、気にする必要は無いんですけど。ただ自分の妄想を書き殴つてるだけだし。

ぜ、全然寂しくなんかないもんつ（チラツ

P . S .

ネギまが……書けない！

千鶴ちゃんまじ強敵

14話
トーナメント初戦（前書き）

ストックこれまで打ち止め

14話目　トーナメント初戦

織斑一夏とラウラ・ボーデヴィッシュの一悶着から数週間。蒼崎喜色の専用機が届いてからも数週間。一人が居るEIS学園は少しばかり騒がしくなつていた。

EIS学園では今日から一週間、トーナメント戦が行われる。例年とは違いペアを組んでの試合があるので、パートナーとの息の合わせようが勝利への重要なキーになることは間違いないだろう。

一夏と喜色は更衣室でEISスーツに着替える。男子生徒は三人しかいないので、こここの更衣室は貸し切り状態だ。その代わりにどこの更衣室では定員以上の生徒がいるので女子生徒は狭苦しい思いをしている。

一夏はEISスーツに着替ながら喜色に話しかける。

「しかし、驚いたな」

「なにが？ 僕としては主人公の鈍感さにいつも驚いてるけど

「蒼崎がラウラとペアを組んだことだよ。ていうか俺は鈍感じやない

「確かに驚いたよ。あの時の喜色少し怒つてたでしょ。それなのに組むとは思わなかつたよ

「なんかラウラちゃんが余つたから組めつて言つてきたんだよ。…よつ、と主人公が鈍感じやなかつたら全人類が超感覚持つてゐることになる件について。ねえ、シャルルちゃん？」

喜色はIRS-1を着終わった。首もとに待機状態のIRSをかける。ドックタグのような形状に一つの単語、鎖の意匠。数週間前と変わったところはない。

「うひ、ふーん……専用機持ちが余るなんて珍しいこともあるんだな」

一夏もIRS-1を着終わる。一夏の右腕には待機状態の百式がある。ふう、と一つ息をつき観客席を映し出すモニタに目を向ける。モニタにうつったのは各国の政府関係者、研究員、企業のエージェントなどなど滅多に揃うことのないいろいろ顔がたくさん見ることが出来た。

「うわ、テレビで見た顔がたくさんあるんだけど」

一夏の弦きにシャルルと喜色もモニタに目を向ける。

「ああ、気をつけておかないと誘拐されるかもね。IRSを動かせる男なんて貴重な研究材料だからね」

「それはないよ。ここには国家代表もいるし、候補生もたくさんいるし。それに何より織斑先生がいるからね。IRSに乗ったのを見たことが無いけど、乗れないってわけじゃないからね」

「千冬姉って、IRS用の武器を生身で振りまわすんだぜ？」千冬姉専用に学術上の分類を作つていい気がする

「学術名、超人チフーゴつて？ 僕もそれくらいなら出来るんだけど」

「ああ、喜色も振りまわしてたね。片手で」

「よし、いまから蒼崎の学術名は超人チフーゴだ」

シャルルと一夏、喜色は数週間でとても言葉に表せないほど打ち解けている。それもシャルルと一夏の訓練に喜色が参加し、戦つたからだろうか。親友への近道はまず喧嘩だという人もいるがあながち間違いではないのではなかろうか。

本来、例年通りならば既に対戦相手は決まっているのだが、ペアを組んでの対戦に変わったためトーナメント用のプログラムに不具合が生じ、前日に発表されるトーナメントは今日の今朝から生徒と教員がくじという初步的な方法でトーナメントを組んでいた。

更衣室でIIS薪水に着替えて談笑しながらトーナメント表の発表を待つ三人に緊張という文字は何処にもないよう見えた。

「あ、決まったみたいだ」

「ホントだ」

観客席をゆっくりとカメラを切り替えながら表示していたモニタがトーナメント表へと切り替わる。それを見た一夏はつい思考を停止し、モニタを穴があくほど見つめる。

「は？」

「なにこれ」

「これ絶対千冬ちゃんが仕組んでるでしょ」

一年の部Aブロック一回戦

『織斑 一夏 & シャルル・デュノア VS ラウラ・ボーデヴ
イッヒ & 蒼崎 喜色』

アリーナに立つたラウラと喜色の二人の間には見ることはできな
いが、あると確信できる不可視の壁が有った。仮頂面のラウラとい
つものようにニコニコと笑う喜色のコンビはうまく合っていないよ
うで、あつている雰囲気があつた。

相手の一夏とシャルルに向けて飛びだすまで残り1分を切つたと
き、それまで目を閉じていたラウラは瞼をあげて、喜色に向けて命
令をする。

「私が全てやる。貴様は後ろで見ていろ」

「はい却下ー」

「聞こえなかつたようだな。貴様は後ろで見ていろ」

「だから君は弱いんだよ。強さは叩き伏せるだけじゃダメなんだよ」

「ふん、強さは力だ他になにがある。まあいい。織斑一夏は私が貰う。怖気づいたのならアーティノアも私がやる」

ラウラは鼻息をし、当たり前のよう答えると喜色はやれやれと言つたように溜息をついた。

「まあいいけどこれはチーム戦だからね、頭に入れといて。僕も負けたくないからね」

20秒前です。用意してください。

組んでいた腕を解くとぶらりとラウラの腕は自由になる。

「一戦目であるとは貴様も運が悪いな、織斑一夏」

「は、運が悪いのはどうかな。負けそうになつても泣きだすなよ」

まだ始まつていないと、闘志があふれ出す一人の頭にこれはチーム戦ということは頭から抜け落ちている。二人は獰猛な笑みを浮かべた。

「でもよ」

「どうでもいい」

「呑きのめや」

試合開始！

けたたましいブザーが鳴ると同時に一夏は瞬時加速を使いラウラの懷に向けて飛び込む。一夏とラウラの技量の差は素人と軍人、比べ物にならない。実力差がある相手に傷を与えるのに必要なのは思いもしない攻撃である。ならばどうすればいいか。一夏は開始早々に一撃を加える気でいた。

「うおおおおー！」

「やはり、間抜けか」

ラウラは右腕を一夏に向ける。眼帯の奥にある瞳も一夏に向かられる。

(AICが来るー)

AICとはアクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称でありPICを応用して作られた慣性停止能力である。慣性を停止するということはかなりのアドバンテージとなる。それは相手の動きを止められること他ならない。だが、どんな兵器、武器にも弱点は必ずある。例にもれずこのAICは発動するために多大な集中を必要とする。つまり、ラウラ程度の技量では攻撃をよけながらAICを発動することはできない。

「……くつー」

「もう終わりか？」

ラウラのHSの肩部分に装備されている大型のカノン砲が回転し、

砲塔が一夏を捉える。開始直後のピンチ。体は動かせない。普段の1対1ならここで既に詰みだ。だがこれは2対2の勝負、まだまだ詰みには程遠い。

真横から実弾が飛来するのをハイパーセンサーが感知した。ラウラは即座にAICOを解除して回避する。

「一夏、まだ大丈夫だよね？」

「やーごつめんねーラウラちゃん。一人でやるって言つてたから1対1で戦つてたよ。助けはいるー？」

「大丈夫だ、余裕だ！」

「……いらないと言つた！」

「あつ、そつ」

数秒間のインターバルを挟み、また自分の前に居る敵に集中する。ただしシャルルと喜色は相方の様子も気にしておく。

「さあ、続くで行くぜ！」

「やれるものならなー！」

開始直後に一人だけで戦いを始めた一夏とラウラだが、残りの二人は開始直後から全力で戦うという真似はしないようだった。

「さつすが主人公。いきなり突っ込んで行くとはね」

「あはは、まあ一夏だから……ねつ！」

直後、シャルルの手にはアサルトライフルが展開され一瞬で照準、引き金を引く。喜色に向けて発射された弾丸は着弾する瞬間に目標を見失い、そのまま直進する。

「不意打ちってひどくない？」

「避けといて言つ」とじやないよ

性能制限……70パーセントを制限します。装備選択……標準。追加武装はミサイルです。

喜色が操るEISの速度が比べものにならないほどゆっくりになる。同時に右腕部にはブレード、左腕部にはライフルが装備され右肩に4連ミサイルポッドが展開された。

「あ、主人公早速ピーンチ！」

「や、りせないよ」

シャルルのアサルトカノンがラウラに向けて火を噴く。そのままラウラに向けて照準を向ける。

「一夏、まだ大丈夫だよね？」

「やーごめんねーラウラちゃん。一人でやるって言つてたから1対1で戦つてたよ。助けはいるー？」

「大丈夫だ、まだ余裕だ！」

「……いらないと言つた！」

「あつ、セツ」

ラウラの前には一人がいて、喜色の視界内には誰もいない。ここで喜色が奇襲すればここで勝負は終わるかもしない。しかし、ゆっくりと動く喜色は装甲の上から頭をかいた。

「まだまだ！」

喜色が頭を搔く間もシャルルのアサルトライフルは弾丸を吐き続ける。時折一夏の斬激をも混ぜて決定打を食らわそうとする。

「シャルル、このまま行く　っ！」

突如、横から飛んできたレーザーをハイパーセンサーが感知し、一夏はスラスターを吹かしてレーザーをかわした。

レーザーが飛んできた方向を見ると案の定、喜色がライフルをこちらに向けて立っていた。

「いやーごめんねー？　なかなかいい戦いで観戦しようとしたんだけど、千冬ちゃんに怒られちゃってさー。ラウラちゃんもごめんねー？　千冬ちゃんの命令だから仕方ないよね」

いつもと変わらない調子の声が聞こえるがそれは恐いことだ。普通、人間は武器を持つと個人差はあるが好戦的になつたり口調が変化したりする。だが喜色の声を聞いた限りではいつもと同じ平常心のようだ。

いつもの掴めない考えで何をしてくるかわからない。

一夏たちは集中的に攻撃し、戦力を減らそうと頷きあつ。

『喜色はダメだ。牽制しながらラウラを先に倒せ!』

『わかつたよ。田の前だけに気を取られないでね!』

「なにを話してるかわからないけど僕はラウラちゃんに手を出すなつて言われるからね。過剰に攻撃はしないよー」

「……ふん、それでいい」

喜色はゆっくりと空に飛び、流れ弾などが飛んでこない場所へと移動する。一応というようにスナイパーライフルを展開しておいた。シャルルはそれを視界の隅においておきながらも、既に突撃していつた一夏を援護するために両手に展開した銃器に新しく弾を込めた。

「ふわあ……織斑くんとトコノアくん、けやんと連携がとれていますねー」

「トコノアが合わせてこるからあわじがでやれるんだ。本来ならすぐこもられても仕方がない」

モニターを見て、驚いたように息を漏らした真耶に千冬はフンヒンヒンヒンと鼻を鳴らした。

「でも蒼崎くんとボーテヴィッシュも……」

「ああ、連携をとる気もなこらしこな。蒼崎は隅で構えているだけだしな」

「でもなんでそんなことを……。あの二人の武装ならすぐ決着が着きそうですが」

「ワウワウが言つたのだからな。手を出すなどでもな

「あ、転校してきたときのことと解決しようとしてるんですけどかね?」

思ひ出しあった尋ねる真耶には視線を向けず、千冬はこいや、と答えた。

「モンド・グロッソの事だらうな。あいつは思つ節が有つたのだろう。それにまだ強さの意味を取り違えてこる(蒼崎がなにか言つたよつだがな)。」

「え? なんですか?」

呟くような小さな声を真耶聞き取れず聞き返すが、千冬はそれに答えずモニターを見つめ続ける。見つめたモニターには一夏が零落白夜を発動させたのが見えた。

「ほら、零落白夜が来たぞ」

一夏の必殺技と言えるだらう零落白夜を発動させたことで観客席が沸き立つ。歓声が一人が居る部屋まで響いてくるほど大きな歓声だ。

「あ、本当ですね！　うまく行きますかね？」

「どうだろ？　な。蒼崎もあそこを狙えばいいのにな

「まったくです！　蒼崎くんは今度補習です！」

ブンブンと怒る真耶を横目に千冬はモニターを見る。表面は冷静だが内心ではハラハラしているのだろう。指が小刻みに動く。幸い真耶が気づくことはなく、千冬はモニターを見つめ続ける。

「これで…」

「ふん、貴様では私にさわる」とすら不可能だ

一夏は零落白夜を発動させラウラの懷に飛び込もうがAICOを使用されて動きが止まる。

「不可能だと言つたのが聞こえなかつたか？」

「さて、それはどうかな？」

肩のカノン砲を一夏に向けると後ろから肩を叩けて大量の弾丸が飛んできた。すぐさま回避を行い後退する。

「あめえよー、これはチーム戦だぜー！」

「こゝかー。」

後退したラウラの背後にはすぐそこニシャルルが大型のショットガンを二丁展開していた。ラウラの腹部に銃口を当て零距離からトリガーを素早くマガジンから弾が無くなるまで引く。

「クッー。」

「おうあああああー！」

ラウラが逃げた先には示し合わせたよー一夏が武器を振りかぶつている。AICOが使えないこと判断したラウラはワイヤーブレードで一夏の腕を縛りつける。

「あ、ラウラちゃんそれ駄目だ……」

「うぬせーー 黙つていろー。」

喜色の忠告を無視してまたカノン砲を発射しようとすると、一夏はしてやつたりと笑みを浮かべた。

「やつと捕まえたぜ……シャルル！」

「了解！」

「貴様、へつ、離せ！」

「断る」

ワイヤーブレードを一夏から解いて逃げよつとするが一夏が自分でワイヤーブレードを掴んでおり身動きがとれなくなる。シャルルは急接近し、ラウラの腹部に何かを当てる。

「IJの状態なら外さない。第二世代威力最強を体で味わうといいよ！」

「おかわりもあるから遠慮すんなよ！」

シャルルが構えているのは一般的にはパイルバンカーとよばれる武器でだつた。このパイルバンカーは普通のものとは一味違う。通常『灰色の燐殻』とよばれるこれは従来の使いきりで単発の物とは違い、連続で繰り出すことが出来る。つまり、高威力の攻撃を連続で叩き込むことが出来るのだ。全てがクリーンヒットすればIJを簡単に強制解除することが出来る。

「やああああーー！」

炸薬が爆発し杭がラウラの腹部へ食い込む。シールドエネルギーで身体は傷一つないが衝撃は殺せずラウラが苦痛の表情を浮かべる。

だがまだシールドエネルギーは無くなつていない。『灰色の燐殻』の最大の特徴である連射機能を活かし、シャルルは新たに炸薬を装填する。

「まだまだ行くよー！」

「うぐう……」「うなれば！」

ワイヤーブレードが一夏に絡みついてほどくことが出来ず、身動きが取れない。一応パートナーでもある喜色もいるが手を借りる気はない。ならば織斑一夏だけは、ヒラウラは腹部に走る激痛を耐えながらもカノン砲を一夏に向け、ワイヤーブレードを射出す。

「織斑一夏！ 貴様だけは倒す！」

「なつ！？」

追加で射出したワイヤーブレードを一夏の四肢に絡みつかせ、身動きを取れないよう拘束する。シャルルが慌ててまた炸薬を爆発させ杭を打ち込むが、このくらいならまだ耐えられると歯を食いしばり我慢する。

「ぐりええええー！」

「一夏！？」

さらに打ち込まれる杭。その衝撃がラウラの体に伝わると、一夏にカノン砲の砲弾が当たるのは同時だった。
度重なる瞬時加速と零落白夜の使用で少なくなつてい白式のシールドエネルギーにどじめを指すには砲弾の威力で十分だった。

シユヴァルツェア・レーゲンはパイルバンカーの連撃によりバチバチとショートし、出てきた紫電は強制解除の通知にも見えた。

だが、異変は突然表れた。

14話目　トーナメント初戦（後書き）

バトルはむりぽ

次の更新は一週間くらい後を予定。

え？　主人公の専用機がちーと？　さあ？　お、俺はなにも悪くねえ！　キャラが暴走したんだ！

さて、次の更新はヴァルキリートレースシステム戦。

バトルだよ！

ダメダメだよ！

彼女は気に入らなかつた。不愉快だつた。その手で殴りつけてや
りたかつた。彼女が尊敬し目標にしている織斑千冬。その弟が氣に
入らない。

考え方が。
目の光が。

脳天気な性格が。
その存在の仕方が。

気に入らなかつた。その弟の姉はなによりも立派だといつのに腑
抜けた顔が腹が立つ。

彼女は気に入らなかつた。不愉快だつた。自分と同じような生き
方なのに心を隠すような男が気に入らなかつた。

腑抜けた顔で笑う顔が。

彼女の目的の人物を守るようにする態度が。

同じような経験をしているはずなのに何も思っていない考えが。
強さは一つではないと言う顔が。

気に入らない。彼女はシンパシーを彼に感じた。だが氣の迷いだと
切つて捨てた。なぜか？ 簡単な話だ。彼女は強さは攻撃力だけ
だと考え、彼は強さは複数あると最近考え出したからだ。
人間とはこんなものだ。気に入らないから気に入らない。腹が立
つから腹が立つ。そんなものだ。

(私は負けるのか？ ……負けるわけにはいかない！)

彼女には母親も父親もない。母はフ拉斯コ、父はいかれた科学者だからだ。

彼女は生まれるなり戦闘のための知識を覚えさせられた。彼女は優秀だった。だから実験体にされた。『越界の眼』の実験体にされた。

結果を言えば失敗。彼女は軍の部隊最強の座から転がり落ちた。落ちこぼれの烙印を押され後ろからは嘲笑と侮蔑が降りかかった。彼女は閉じこもった。自分の殻に。

「君が噂の落ちこぼれか。元部隊最強。遺伝子強化試験体か」

「……」

「まあ、そんなことはどうでもいい。重要なのは君が私の訓練を受けることだ。なに、心配することはない。私が教えるんだすぐに部隊最強に戻れる」

織斑千冬に彼女は出会い最強に返り咲いた。だが彼女はそんなことは興味がなかつた。

彼女は憧れた。在り方に。強さに。信念に憧れた。彼女は望んだ。

この人のようになりたい。

と心から望んだ。

ある時彼女は千冬に尋ねた。『なぜそんなに強いのか』と。千冬は見たことのない優しい笑みを彼女に向かえた。

「私には弟がいる」

「お……どう……と?」

「あいつを見ていると直感で分かるんだ。強さとはなにか。なんの為にあるかがな」

「……フランソワ・ベリーの私には理解できません」

「フランソワ・ベリーは関係ないさ。そして今はわからなくともいい。日本に来たならあつてみるといい」

千冬はさらに優しい笑みを浮かべた。彼女はその笑みにも憧れた。同時に心がなぜかざわついた。

数年後、彼女は日本にやつてきた。数年ぶりに会った千冬は彼女に同じような事を言つた。

「まだ強さがわかつてないみたいだな。私の弟にあつてみると。それと、もう一人の男もあつて損することはないだろう」

もう一人の男をスニークリングしてみたがなにか分かることもなかつた。男を見ているとイラついた。

千冬は強さと攻撃力は違うと言つた。彼女には分からなかつた。だから彼女は織斑一夏を叩きのめすと決めた。そうして千冬に真実を教えようとした。

(力が欲しい!)

(力が欲しい!)

そう願うと彼女の心の奥底で何かがうごめいた。
何かは彼女に問いかける。

「汝、力を望むものなり。変革を望め。破壊を以へせ。そりなる力を求めよ……」

その問いかけに彼女は間も置くことなく答える。

（寄^こせ！ あるなら寄^こせ！ わあ、早く寄^こせ！ 私は、あの男を潰す！ 力を……寄^こせ！）

D a m a g e L e v e l	D
M i n d C o n d i t i o n	U p l i f t
C e r t i f i c a t i o n	C l e a r
V a l k y r i e T r a c e S y s t e m	b o o t

ヴァルキリートレースシステム起動

「ああああああ！」

ラウラの突然の絶叫とともにシュヴァルツェア・レ ゲンから電撃が放たれシャルルの身体が吹き飛ばされた。百式を強制解除されていた一夏は気合で顔を上げ、何が起こったかを確かめる。

「ぐー？ いきなりなに！？」

「山田先生！ 織斑先生！ 不味いよ！ 今すぐ観客を避難、シリードのレベルを引き上げて！」

『蒼崎、何があつた！ カメラが壊れて状況が把握できない！』

一夏がやられ、シャルルが灰色の鱗殻を打ちこんだときから一切を見ていた喜色は明らかに異常を感じ取り、千冬たちに通信をする。通信をしながらもISSを強制解除された一夏を守るため、一夏の前に立つ。

「わかんない！ シャルル、一夏は無事！ ラウラ・ボーテヴィッヒの無事は不明！」

『要領を得ていない！ はつきりしろー』

「いや、だから！ ……なに、あれ……」

『どうした！ おい！』

取りみだす喜色はISSの理論を覆す光景をその眼にして自分の目を疑う。視線の先にはショувアルツェアレ・ゲンがあり、そのISSは装甲がとけ、液体のように姿を変えながらラウラの身体を包みこむ。一夏、シャルル、その光景を見ていた人も一つの言葉を思うか口にする。

「なんだ、あれは……」

ISSは初期操縦者適応と形態移行のときにしか変形出来ない。篠

ノ之束が言つたことだ、間違はないだろ？

それなのに彼らの目には変形するISが映っていた。

溶けた装甲はいきなり変形し、形をつくる。ゆっくりと地面に降りたISの装甲は最小限のアーマーのみで頭部にはフルフェイルスの奥にはセンサーの赤い光が見えた。片手には何かを握っている。

「雪片……」

一夏はその刀を見て息をのむ。それはかつて千冬が振るった刀でありその刀に酷似していた。彼が見間違ふことは無い。その刀を間近で目にし、それが振るわれるところを見ていたのだから間違うことなどない。

一夏は身体に鞭を打ち駆けだす。黒いISに向けて。

「つねおおおおおおおおー！」

「主人公！？」

駆けだした一夏を止めようとするがその手は届かず宙をきる。

ISは解除され武器は無く、拳だけで殴りかかるとする一夏にISは武装を中腰に引いて構え、間合いに入るまで静止して一夏が間合いに入るまで待つ。

間合いで一夏が入るなり一気に刀を振り切る。

「それを持つなああああ！」

「なにしてんだこの馬鹿！？」

「ぐうーーー！」

切り裂かれるはずの一夏は突如後ろに引っ張られ鼻先を刀が掠る。引つ張った喜色はすぐさま工仕から距離を取る。だが、一夏はまた殴りつと駆けだそうとする。

「なにしてんだ馬鹿！ 死ぬぞ！」

「あれを振つていいのは千冬姉だけなんだ！」

「意味が分からぬ！ 工仕もないのに死ぬだけだ！ 千冬ちゃんはそんなに取り乱したりはしないよ」

「……あ、ああそ'だな、そ'だつたな」

頭を冷やすことができ、ある程度落ち着いた一夏は黒い工仕を觀察する。黒い工仕は動かない。なにか理由があるのでどうか。飛ばされていたシャルルが復帰する。

「これはどうこいつとなの？ いきなりこんなになつて……ボーデヴィッヒさん！ ボーデヴィッヒさん！」

「おい、お前！ なにしてんだよ！ なんで千冬姉の雪丘を使つてゐるんだよ！」

「……」

一夏とシャルルの呼びかけにも反応しない工仕を見て喜色はぼつりと眩く。

「見込み違い。所詮は獸。人の言葉も解せん……か」

「獸？」

「いや、なんでもないよ。一夏、下がって。シャルルも」

「嫌だ。」

一夏を後ろに押しやり前に出た喜色を一夏は手を掴んで引き止めた。喜色は怪訝な顔で振り返る。

「なんで？ 展開はできない、武装は刀一本、技量は初心者、意地だけは一人前。おまけに絶対防御がちゃんと発動するかわからぬいのに？ 死にたいの？」

「それでも俺は！」

「理由は？ 真っ当な理由なら考慮しないこともないよ」

「……あれは千冬姉のなんだ。千冬姉のデータだ。なのに千冬姉を使つてるんだよ！」

「千冬ちゃんのデータ？ 他人が人の技術を使うつてこと？
……ああ、バーチシステム。それなら尚更行かすわけにはいかないね」

「なんでだよ。張り倒してもいいぞ」

一夏は怒りを露わに拳を握り込む。今にも殴りかかるような雰囲気だ。喜色は飄々とした態度で話す。

「この状況を作り出した元凶はその場に微動だにせず立っている。武器に反応して迎撃する自動プログラムなのだろう。」

「だつて千冬ちゃんだよ。勝てるの？　ISも展開できないのに」

「勝てる勝てないじゃないんだよー。」

「知ったことか。戦力外だ、引け」

冷たく言い切る喜色は一夏の背筋を大きく震わせた。フルフェイスのはずなのに冷酷な視線が一夏を捉える。無意識に一夏は一步下がる。それを見た喜色はふん、と鼻を鳴らした。

「ようするに一夏は千冬ちゃんのデータを盗られたのと、それに飲まれたラウラちゃんが気に入らないんだよね？　大丈夫だよ。あれは破壊し、ラウラちゃんは助けるから」

その言葉と突風をあとに喜色は黒いエスに向かって飛んでいった。

「忠告は無駄になつたか。わあ、やあ！」

喜色はトリガーを引く。前回と同じようにレーザーが飛び出す。もちろんそこからはずっと引きっぱなしだ。

黒いエスは自分に向かつて飛んでくるレーザーを手に持つた刀で斬りつけた（・・・・・）。

「ええー？　千冬ちゃん、ちょっとおかしくない？」

斬られたレーザーは全て一つに分かれ黒いエスの後に着弾した。

着弾したレーザーは壁や地面にぶつかり爆発する。

黒いISは攻撃してきた喜色を敵と認定し、攻撃体勢に移る。

「瞬時加速！？ そんなの聞いてないよ！」

ISは瞬時加速を使用する。喜色と距離を詰める間に居合いをするように腰辺りに刀を構えた。

ただ居合いと侮ってはいけない。居合いの達人の反応速度は0.5を軽く超える。後手に立ったとしても余裕で相手を倒すことができる。その神速をもつ居合いで先手を打つたとしたら。つまり、喜色は絶賛大ピンチと言つことだ。

「んなわけないじゃん」

ISが居合いの間合いに入り、今刀を抜こうとしたとき喜色はクイックブーストで横にかわす。ISは大きく刀を振り抜き僅かに隙ができる。喜色はそこを見逃すことなくトリガーを引く。レーザーを見てもISは回避をしようとしている。それどころかまた居合いの構えをとる。

「なにやつてんのかな」

喜色は首を傾げる。そのまま見ているとISは肩部分に申し訳程度についたスラスターが大きく開きそこからレーザーを取り込んだ。

「え？ んな馬鹿な」

瞬時加速の仕組みはエネルギーを外部から取りこんで圧縮して放出し爆発的な加速力を得る。要するにエネルギーさえあればどこから取りこもうがどうでもいいのだ。いまISがやつたようにレーザ

ーを取りこんで瞬時加速を行うことも理論的には可能であるし、過去に千冬が実際にやつて見せた。

そしてエネルギーを得たスラスターは圧縮し放出す。またしても居合いで斬り込んだ。だが、コンピュータは同じことを何度もするかもしれないが喜色は一回も同じことはしない。

「やつと同じ手は普通使わないよ」

再度クイックブーストで後ろに移動し、ISの居合いはまた空振った。また僅かに隙が出来る。喜色はそこに向けて今度はトリガーを引かずもう一度クイックブーストを行う。前方に向かつて。クイックブーストの推力で喜色は一気に刀を振り切ったISに向かつて距離を詰めた。

「多少早いけどこれで終幕！」

ブレードのある右腕を左から右へと一閃。切り裂かれたISは紫電を発し、動きを止める。

喜色が切ったのはVTSシステムを制御する部分とラウラを包み込んでいた部分のみだ。ラウラにけがなどは無い。

外殻の中から出てきたラウラは眼帯がとれて右目が見えていた。だが意識はほとんどなく、すぐに目を閉じ意識を失う。

それを見て喜色はぽつりと呟く。

「やっぱり放つてはおけないかなあ……最後まで敵対心丸出しだつたら簡単だつたんだぞ、あんな顔されたらねえ

喜色は倒れる直前のラウラの表情を見ていた。そしてどんな表情だったかわかるのは喜色のみだ。

1-5 話題 VTシステム（後書き）

「ワカラの心中はもう少しあとにやるつもりです。あそこは時間がわかれにくいんです。

瞬時加速ですが、千冬なら簡単にやりそつた気がするんですよ。敵の攻撃を利用することを。バトルはうだうだですがじ勘弁を。

以下、どうでもいい独り言

随分と朝が寒くなつて毛布にくるまつてます。なのに口中は結構暑い。おかげで風邪気味。

次は更識さんが出るよー。どちらかはあえて言わない。

1-6 話題 生徒会長（前書き）

この一次創作は
面白くないようだ
ひやしづい

16話目 生徒会長

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため』

「……」

「……」

食堂。一夏と喜色は向かい合つて座り何も話さない。二人の前にはそれぞれが頼んだ学食があつた。その横でシャルルが我、関せずと言つたように一人パスタを口に運ぶ。

「……」

「……」

「あー美味しい。一人も食べたら? やっぱりトーナメントは中止かあ」

三人はついさつきまで教師たちから、主に千冬と真耶から事情聴取を受けていた。ラウラは意識が無いため不参加だった。

事情聴取が終わるなり一夏と喜色は食堂に向かう。一言も話さない一人に愛想をつかしたシャルルはもういいやと、一人に何があったのかを尋ねるのをやめた。

「……で、なんではぶてんの? 主人公は

「……蒼崎が頼みを聞いてくれないからだろ。転校してきたときから

「何の話？　主人公に戦わせなかつたことでしょ？」

喜色は一夏が話さないのはあの時、自分が戦わせなかつたことだと思つてゐる。あの時あれほど、IISに生身で殴りかかるほど我を忘れていたのだから。

「それはどうでもいいんだよ。いや、どうでもよくないけど。俺が言いたいのは……」

「言いたいのは？」

拳を握り込む一夏に首を傾げる喜色、無視を決め込んで黙々と食べるシャルルを見て、話しかけようとする猛者はいない。そして一夏はバツと立ち上がり人差し指で喜色を指差す。

「蒼崎がいつまでも主人公としか言わないことだよ！　なんで事情聴取のときも主人公なんだよ！　山田先生が一々困つてただろ！　いい加減一夏つて呼べよ！　それがいやなら織斑でもいいから名前で呼んでくれよ！」

「やだ」

即答である。なにか信念もあるのだろうか。

「なんでだよ、笄や鈴音やシャルル、挙げ句には千冬姉も名前で呼ぶなのになんで俺だけ主人公っていう有象無象の呼び方なんだよ！」

「えー、だつて主人公じゃん。弾ちゃんの言つとおりそのイケメンフェイスで女の園について、ハーレム構築中の主人公のほかに誰が主人公っていうのを」

「ほらモブキヤラっぽい弾さえも名前で呼んでる！ 誰がハーレム構築してるんだよ！ 名前で呼んで見ろよ！ さあ、レツツスピーカー！」

「主人公」

うがー。頭を振り回す一夏を見てシャルルは小さく溜め息をついた。実はシャルルも一夏がはぶてているのは戦わせなかつたからだと思っていた。だがどうやら勘違いだつたらしい。

その横で一夏は喜色に詰め寄る。

「なんか恨みでもつてあるのー？」

「ふふん、無いよ」

ふつと鼻で笑った喜色を見てまたうがー。暖簾に腕押し、柳のようにならじくらじく答える喜色は楽しそうだと、そこにフラフラと簞が一夏に近づいてきた。顔を真つ赤に問いかける。

「い、一夏！ 」の前のお前の部屋の前の約束だがつ

「ん？ 」の前……？」

「わ、私が優勝したら付き合つといふ話だ」

「いいぜ」

「ほ、本当かー?」

篠は一夏に詰め寄り興奮しながら問い合わせる。それに対し一夏は何を当たり前のことを言つて居るといつよつな顔で答えた。

「そのくらいお安い御用だ」

「え? お安い御用?」

「おひ、買い物に付き合ひくらいな」

「ほら、見てよシャルルちゃん。これが主人公じゃなかつたらなにが主人公だつて思うよね」

「確かにね。わざとやつてるのかつて思つ時があるよ」

突然動きを止めた篠を不思議そうに見つめる一夏の横で一人は話しあう。

喜色は同意を求めるように言い、シャルルはそれに同意する。

「そんなことだらうと思つたわ!」

「ぐえつー?」

腰のひねりを入れたほれぼれするような勢いの正拳突きが一夏の鳩尾にミラクルヒットする。だが、篠ノ之篠はここで手を止めるわけがない。

足を大きく振りかぶる。

「ふんー。」

「ぐはあーーー？」

またしても蹴りは綺麗に決まり一夏の鳩尾に追撃をかけた。二連続鳩尾にヒットしたダメージは決して軽いわけがなく一夏はその場に倒れ込む。倒れ込んだ一夏を一警し篠はドスドスと食堂を去つていった。

「ほらね、言つたとおりでしょ？」

「本當だ。僕も今度から主人公つて呼んでみよつかな？」

「そ、それだけはやめてくれ。頼むから」

懇願する一夏にシャルルは一「コリと真意のわからない笑みを浮かべた。

「あ、そうだ、ISにオープンチャンネルとプライベートチャンネル以外に通信手段つてあった？」

「うーん、聞いたことがない……いや、もしかして相互意識干渉かもしれない」

「そ、相互意識干渉？　なんだそれは？」

まだ痛む腹部を撫でながら少し回復した一夏は聞き慣れない単語に首を傾げた。

「HIS同士の情報交換ネットワークの影響で操縦者同士の波長があつと起らるいじいことだよ」

「ふーん、また頭の痛くなつそつな話だな。でも蒼崎、なんでそんな話を？」

「まあ、気になつたんだよ」

「ふふーんそつかそつか」

「こわなりなに?」

一 夏は一ヤリと意地の悪い笑みを顔全体に広げる。

「その相互意識干渉の相手つてラウラ・ボーテヴィックだ。ふつふーん」

「ち、さあね? 真実は僕のみぞ知る、だよ」

「なにを話したんだなにを? ほらひとつと白状するんだ」

オラオラと催促する一夏から逃げようとするがすかせすシャルルが回り込んで逃げ道を塞ぐ。

残念! 喜色に逃げ場はない!

「い、いや、ただ強さはなにって聞かれただけだよ」

「へ? なんだそんなことか。蒼崎はちゅういちゅうにラウラを気にかけてたみたいだけど違つたみたいだな」

「そんなことないよ！　僕がラウラちゃんを気にかける？　ありえないよ！」

「ダウト。田が泳いでる」

「あ、あははははははははは」

笑つてごまかそうとする喜色をジジ田で一夏とシャルルは見つめ続けるが笑い続けるばかりで埒が明かない。一夏がこうなれば、とシャルルに作戦を教えようとすると

そこに一人小さな人影が三人に近づいてきた。

「三人ともここにいたんですね。せっかくお疲れさまでした」

「あ、麻耶ちゃん。いいところ！　なにあったの？　あつたんだよね？　あるんでしょ！？」

「蒼崎、逃げられると思つたよ。山田先生こそずっと書いてばかりで疲れませんでした？」

ちょうどいいと話を必死に逸らすうとする喜色の一夏が釘をさしておく。麻耶は胸を張り、えへんと答える。

「大丈夫ですよ。私はああいう地味なことが得意なんですよ。それですね、蒼崎くんの言つとおりのことがありますよ！」

「いいこと？」

「はー！　今日から男子の大浴場が解禁ですー！」

わーいと両手を上げ万歳をする麻耶の胸の部分に一夏の日はくぎ付けになる。そんな一夏をシャルルが冷たく見つめる。その視線に若干居心地が悪くなり咳払いをして田を逸らす。

「本当ですか？ 来用からだとばかり思つてました」

「今日、ボイラー点検があつたんですよ。それで点検はもう終わつてるので男子の三人に使ってもらおうと織斑先生がおっしゃられたんですよ。もともと生徒は使えない日ですからねー」

「よっしゃあ！ ありがとうござります！」

麻耶の両手を一夏は握りしめる。わたわたと慌てる麻耶の横で喜色がぼそっと声を漏らす。

「シャルルちゃんがいるのに？ ビックリするのか

「あ……本當だ。どうしようか」

「どうかしましたかー？ ほら、着替えを取りに行つてきてください。私は脱衣場のまえでまつてますからー」

一人でボソボソと話す喜色とシャルルを見て首を傾げたが用件を伝えた麻耶はすたすと食堂から去つていった。

「それじゃ、また後で」

やう言つて部屋に入ったシャルルと一夏を後にして喜色は寮監室のとなりにある部屋の前に立つ。

「ん？」

部屋の前に立ち喜色は違和感を感じた。確証は無かつたが直感的に違和感を感じた。とりあえず部屋に入つてみることにした。隠し持つた武器をいつでも取り出せるようにして音をたてずに扉を開ける。

部屋を見回すが特に異常は見つからない。

「（気のせい？　少し警戒しそぎか？）」

一応シャワールームをのぞき込んだがやはり誰もいない。吐息をつき警戒することを止めて足音を立てないように歩くのも止める。こつもと回じようにベッドに向けてダイブする。

「どうー？」

「……わわわ」

「え？」

飛び込んだベッドは小さく驚いた声をあげた。それだけではなく喜色の顔には布団ではない、別の柔らかい感覚がある。

慌てながらも体は冷静に動く。右腕に隠し持つたナイフを素早く振り下ろした。

「あら、怖いわねえ。おねーさん怖い人は嫌いよ?」

「……ひづ

振り下ろしたナイフは扇子によつて止められる。扇子によつて。ナイフを受け止めて傷一つない扇子は、はたしてどんな素材でできているのだろうか。

「初めまして。今日来たのはあなたに聞きたい」

「……」

自己紹介をしようつと話しだした彼女から喜色は距離をとる。彼女が身につけている服はシャツのみであった。喜色が着地したときには床が音を立てる。彼女がいる場所からほんの三歩の間合いかない。

「侵入者か。目的は……まあ、俺がIDSだらうな。居場所を奪われてはたまらん。悪いが死んでもらうぞ」

足に力を入れナイフを構えて飛びかかる。床がへこむ。

「あら、聞いた話とは……随分つ! 違うわね

その鋭い一撃を彼女は受け止めのではなく受け流し、隙の見えた脇腹に脚を振る。喜色は不安定な体勢だが空いていた左腕で防ぐ。骨がぶつかり鈍い音をたてる。

「聞いた話が全てではないといつことだ。良かつたな。また一つ偉くなつたぞ」

「わー嬉しい。それにしてもいきなり襲いかかってきたのは何故?」

「言つ必要があるか? まあ、教えてやるつ。……死にたくないからだよ」

「嘘ね。死にたくないからって言つてもいきなり人を殺す人なんていないわよつ」

喜色が持つてゐるのは殺傷力の高いナイフ、彼女が持つてゐるのは戦いには向くことのない扇子。このままではやられる、と彼女は喜色を押し倒して危険を減らそつとする。

「くつ! ……この!」

「ほら! そんな危ないものなんて離しなさい!」

「離したらお前が使うだろ! 僕はまだ死にたくない!」

「使わないわよ! 危ないでしょ!」

『Jingūji no SUNDON GORON GORON BATTAN BATA

上へ下へと入れ替わり立ち替わり縋れ合つ。二人は自分が優位に立つ事に必死で立てる音はすでに部屋の外まで響き渡るほど大きくなつていた。

部屋の外まで音が聞こえたならそれを聞いた人は疑問に思つたことが普通だ。その音を聞いて扉をたく人がいた。

「……さつきから音がすゞい……けど、大丈夫?」

必死な一人は扉越しに開かれた声に気付かず、ドタバタと音をたて続ける。

「「」の……あ？」

「フフフ、みづめくわづくと話せるわね」

「……話す？ 脅迫の間違いだらう？」

喜色は手からナイフを奪われ腹の上に乗られる。悔しそうな表情で唇をかむ喜色とは対照的にしてやつたりと口角を吊り上げる彼女。彼女の名は更識楯無。ICS学園生徒会長で国家代表をつとめる。楯無というのは更識家当主の名前だとか優秀な姉に劣等感を感じる妹がいるがいまは話す必要はないだらう。

彼女は先日アリーナであつた爆発の原因をつきとめるためにその日のアリーナ使用者の喜色の部屋に潜り込んだのだ。
まさか喜色がベッドにダイブし、人がいると把握したとたんにナイフを突き刺していくとは思わず、彼女の心臓は今激しく胸を打っていた。

「あら、素直に話せばおねーさん、優しくするわよ？」

「残念だが何故男なのにICSを動かせるかなんて知らんぞ」

指を突き出し不規則につねつねと動く様子に喜色の顔が引きつる。その顔が引きつる原因の楯無の顔は満面の笑みを浮かべていた。

「（どうしよう……急にバタバタし始めた……）」

彼女は寮監室の隣の部屋から聞こえてくる音に困惑していた。彼女は更識簪。更識楯無の妹である。特徴としてあげられるのは眼鏡型の投影ディスプレイだらうか。

アリーナで異変が起こり、部屋で待機していた時に隣から突然、人が暴れるような音が聞こえてきたのだ。彼女は少し様子を見るつもりで扉の前に立つたがいつまで経っても音が止む気配はない。

今までこの部屋から大きな物音がする事など無かつた。だからこそ心配なのだ。

「（侵入者……はないよね。IS学園だもん……でも、……もしかしたら……）」

簪は悩む。ここになにがあつたか確かめるか、放つておくか。

「（……あ、静かになつた。見てみよつかな？）」

突然物音がしなくなる。簪は何があつたのか気になつてしまだがない。何か非日常的なことが起こつていてる気がした。彼女は好奇心を満たすために勇気を振り絞る。

「さつきからいひるせい、けど、何があった……の？」

一応ノックをしたが返事がない。ならば突入しかあるまい、と扉を開けた。

「…………え？…………え？」

「さあ、言ひなさい。…………あら？」

「知らんと言つていい、だ、る…………う？」

扉を壊す勢いで開けた簪は田の前の光景が信じられず、信じたくない扉を一度閉める。

パタン、ガチャ

「これは、夢？　幻覚？」

簪は目の前の光景を信じくなかった。なぜか？
自分の姉がシャツ一枚で男の上に跨つっていたから。表情を見ると
注視しなくともわかるほどに顔が赤い。跨られた男の顔も赤い。
彼女が倒れると予想するのは容易いことだった。

16話 生徒会長（後書き）

シリアルが続いていたので少し柔らかめのギャグっぽい話を。
え？ ギャグじゃない？

……またまた。御冗談を。

分かつてた自分に文才なんてないことぐらいいい！

それで、楯無姉妹登場！

なんか違和感が半端ない。

以下、どうでもいい独り言
特になし

あれ、別に書く必要なくね？

17話 生徒会長の相談（前書き）

サブタイトル 詐欺

寮監室の隣の部屋。喜色の部屋には三人が向かい合つて座つていた。一人は部屋の住人の喜色である。もう一人は更識姉妹である。眼鏡型投影ディスプレイをかけているほうが簪、シャツ一枚に扇子を広げているのが楯無だ。

喜色はこめかみを押さえながら確認する。

「僕の部屋に入り込んだ理由はアリーナでの爆発の原因を調べるために、侵入者とかじやなくて生徒会長の義務として入り込んだと？」

「そうこう」と

楯無の語尾にハートマークでもつきそうな口調に喜色の口角がピクピクと動いた。

「え……でもどうして、馬乗りに……？」

「「言わないでいいから」」

喜色と楯無の声が重なり合つ。そのときのこと思い出したのか楯無の顔に少し赤みが差す。自分の妹に男の上に跨り、頬を染めていたところを見られたからだろう。

「まず一つ。不法侵入って言葉、知ってる？　一いつ旦、なんでべツドに隠れてたの？　三つ目、どうしてさつきと違つてそんなによそよそしいの？」

「ファーストインパクトは大事だと思わない？」

「ファーストコンタクトって大事だと思わない？」

しつと答える櫛無に喜色は呆れたような表情をつかべる。

「で、なにしに来たの？」

「ここの前アリーナで爆発があつたでしょ？　その原因を探りに来たのよ。その日アリーナを使ったのはあなただけだつたし」

「ああ、なんだ、そんなこと。千冬ちゃんに聞けばよかつたのに

首を傾げ続きを待つ櫛無に専用機のことを説明する。

アンサー テインリイ、アサルトアーマーを詳細は伏せて話した。流石、生徒会長といったところか、全身装甲やコジマ粒子の非常識さに目を見張る。

その横で簪が興味津々で耳を傾けていたのを喜色は知っていたが、聞かれても損失はないと知らない振りをする。

簪は何か思うことがあったのか突然立ち上がり部屋に戻る。

「……私は、戻るけど、あまりつるさんしないでほしい。……それじゃあ、

「あ、ちよつと、簪ひやん！」

かけ出で行つた簪を引き留めようと櫛無は声をかけるが、すでに遅く扉はバタンと音を立てて閉められた。

「……ああ

「なんかいろいろ有るみたいだけど、喧嘩したの？」

ぽつりと漏らした声に喜色は話しかけた。彼女はしばらく黙つていたが、何か自分たちの隙間を埋める打開策を出してくれるかもしれないと淡い期待を持つ。

「どこから話したらいいのかしら…………そつね、私がロシアの國家代表ということとは知ってるかしら」

「え、なに？　重い話？　自分のことで精一杯なんで結構です」

「い・い・か・ら・聞・き・な・れ・い」

どうでも良さげに顔を逸らした彼を楯無は腕力で顔を自分にむけさせぬ。

「織斑くんの専用機に掛かりつきりのせいである子の専用機は実質開発中断状態になっている。それに私への劣等感もプラスされ専用機を自分で作るって言い出してね…………しかもたつた一人で作るうとしてるのよ。私だってたくさん的人に手伝つてもらつたのに」

「ふーん」

「他に反応はないの？　生徒会長が悩みを打ち明けているつていつのに」

「いやいや、僕になにが出来るつて言つたのさ。一般常識の欠けてる僕に言つてもねえ？　ま、じつこのつを提供するつてのもあるけ

「……………」

ジト目で見つめられながら喜色は机に安置されているノートPCに首に掛けたメモリーを差し込み、何度もクリックとスクロールを繰り返す。何をしているのかと楯無が後ろからディスプレイを覗き込む。

「……………ねえ」

「あら、どうかしたの？」

「当たってるんだけど」

「当てるのよ」

椅子に座った喜色の後ろからのぞき込むといつことは必然的に体の一部が当たることになる。この場合は喜色の首もとに楯無の豊満な胸が押しつけられている。おいやょっと替われ。

「ま、嫌な感触じゃないからいいけど。……」そんなのを渡すことを口実に話す機会を作つてみる?」

「ナニコレ」

楯無が片言になるほどスペックを持つ銃、それは喜色のISの性能制限を解除した出力には及ばないが、現行のIS武装を越える性能を持っていた。具体的に言えば十発ほど命中すれば勝てるという性能は個人が持つにはあまりにも大きすぎるものだ。だが楯無は今は黙つておくことにする。まだ喜色が危険な人物だと確認したわけではないから。

「専用機を作らうとしてるんでしょ？ ならそれを渡してお姉ちゃんす」「ってなるかもよ？ あ、これ天災の考え方だ」

「いや、明らかにオーバースペックよ、それ。第一に簪ちゃん、私と田を合わせてくれないのよ。本音から様子は聞いてるけど……」

「それなら地道に近寄れば？」

「ああん、冷たいのね」

打つ手なしと表示していたデータを閉じ、クルリと振り返る。楯無はどうしたものかといつものように考え込む。

「他に手段が無い……」とも無いけど？

「なにか問題があるの？」

顔を少ししかめる喜色に藁にもすがる思いで聞き返す。それほど更識姉妹の関係は亀裂が入っているのだ。

「確實にとこつかー20パーセント惚れる……」

「え？」

「絶対にその人の前だと顔が真っ赤になってしまおらしくなる

「いや、もうこいつじやなくてね

「もう世界が収束するところが運命とこちが、テレッテレになる」

「それってまさか……」

喜色は大きく頷き樋無の考え方を肯定し、その更識姉妹の関係を修復することのできる人の名前を口にする。

「そり、全男性の敵、女性の天敵、歩くフラグメーカー、鈍感神、その鈍感さに涙を流した女性は数知れず。 名前は…………織斑、一夏だ……」

「ダメよ！ 簪ちゃんが彼の毒牙にかかるなんて認められないわ！」

捻り出すようにして言った名前を聞くなり樋無は却下する。喜色が言っていることは実際に真実なのだから本当に困るのだ。

「えー他にどうしようもなによ

「…………そつね、最終手段として覚えておくとするわ

絶望する一歩手前の表情でフランフランとした足取りで部屋を出ようとする樋無に後ろから声がかかる。

「ま、非常識な僕でもいいなら何時でも話とか愚痴なら聞くから好きなときに来なよ。次はお菓子と漫画くらいならあるから」

「そり、気が向けば来るわね。それじゃ

一一「りと笑いかけられて喜色は顔が赤くなる。樋無はそれを見てさらに笑みを浮かべて部屋から出て行った。残された喜色は一言もいさす。

『ここまでいやらしい笑いだったのに素で笑つとか……不意打ちす
がれのよ』

彼女は考へる。

強さとはなんだらうか。

彼に力は強さではないと言わた時から考へる。

力ではないのなら強さとはなんだらうか。

『知るわけないじゃん。まあ、力ってのも間違いじゃなこと悟つた
どね』

ならば何故あの時私の強さを否定した。

『いや、僕も昔は叩きのめすのが強さだと思つてたんだよ』

いまはどうなんだ。

『強やつていう答えは一つだけじゃないって思つてるよ』

お前の答えは何なんだ？

『うーん、今は守り抜くってことかな。居場所と約束を』

居場所？

『そう、居場所。僕でも安心して行られる場所。一夏が篠ちゃん、鈴音ちゃん、セシリ亞ちゃん、シャルルちゃんに追いかけられて僕がさらにガソリンを投げ込む。そんな風に過ごせるような場所を守る抜くことだよ。ああ、そこにラウラちゃんがいるのも悪くないね。約束の事は教えてあげない』

何故私がそこに入る？

『え？ 入りたくないの？』

別に……

『なんで？ 楽しいよ？ 僕が一緒にいても何にも言わない人たちだよ？』

私の存在意義は戦うことだけだから……

『じゃあさ、他の意義を探せばいいじゃん。人生は長いんだから

でも

『ま、逃げるのは無理だと思つよ。千冬ちゃんに一夏がいるから。

それに……』

それに？

『僕もいるからね』

「う、あ」

ラウラの意識が深い場所から浮かび上がる。優しい光が目にさすのを感じてゆっくりと目を開ける。

「気がついたか」

自らが敬愛する人物の声が聞こえた。

「何が……あつたのですか？」

「全身に無理な負荷がかかり筋肉疲労と打撲がある。無理をするな

自分を見つめる赤と金の瞳を見て千冬は彼女が何があつたか聞くまで全身に走る痛みをこらえ続けると悟つた。

「機密事項だが……。IS条約で禁止されているV-Tシステムがお前のISに積まれていた」

「……」

「様々な条件と操縦者の意思……いや、願望と言つたほうがいいか。それらが揃つと発動するようになつていて。学園がドイツ軍に問い合わせてこる」

「ウラの手はシーツを握り締め、視線は安定せずにはれ動く。

「私が……望んだからですね」

あなたになることを。そして力を。

口には出せなかつた。

「ハカラ・ボーテヴィッヒー！」

「はこつー？」

突然の声に驚き顔を跳ねあげる。千冬の顔はいつも見ていたように自信に満ち溢れている。

「お前は誰だ？ 何故存在していぬ？」

「わ、私は……」

「答えられないのならそれでいい。自分の名前も存在意義も答えも自分で探せ。ああ、逃げる」とは許さん。逃げるならば四肢くらいはもひつていぐれ」

「ヤコと歯を吊り上げ、血のことは言つたと踵を返して出て行く千冬の背をただ見ていく」としがラウラはできなかつた。

しづらくなれのままでいたが不意に笑いがこみ上げてきた。

「ククク……卑怯すぎるじゃないか。教官だけでも無理なのにあいつがいるなんて……無理に決まっているじゃないか」

扉がたたかれる。

「まあ、長い人生だ。じつくつと決めていけばいい。なにせ……」

「みあげてくる笑いを必死にこらえる。

「リウリちゃん……あり、起きてる」

「お前もこらんだからな。なあ、喜色?」

17話 生徒会長の相談（後書き）

なんぞこれ。

ラウラが夢見る乙女になりそつな……。

生徒会長もすぐに再登場の予定！ 横無の口調に違和感。誰か教えてほしいなあ（チラツチラツ

さて、一巻もこれで終わりまして。え？ ラウラのチューが無い？ んなことチャーリーボーイの自分が書けるわけないですよ。まあ、したことにはしておく予定ですが。なにを、とは言いません。

さあ、二巻の予定ですが、覚えてます？ 喜色のヒヒはまだ適応化が済んでいないことを。いろいろと非常識な喜色のヒヒですが、さらに非常識になります。超非常識です。

そして二巻といえば束さんの出番ですよ。伝わっているといいのですが、喜色は束に対し非常に敵意を持っています。喜色の過去のことも挿みます。

ネタバレにもならないネタバレはここまでで、感想とお気に入り登録ほしいなあ。

1-8図
左の図の一部(前輪)

久しぶりの更新

織斑一夏の朝は早い。5時には既に起きており、その日の授業の予習をする。

今日もいつも通り椅子に座り教科書とにらみ合いながら予習をする。

「瞬時加速は…… Hエネルギーをどうするんだっけ」

はかどっているとは言い難いが。だがそれでも十分だ。予習は覚えるものではない。その日に行われる授業がどんなことをするのか理解するというのが大事なのである。

例えるなら人の話を聞く際にまずどのようなことを話すかを言って話を始めるのと、いきなり本題に入るのとでは話の把握のしきりがとても違つてくる。

一夏がそのことを知つて行つているのかは定かではないが、決して悪いことではない。

6時。寮が少し騒がしくなつてくる。生徒たちが起き出す時間帯だ。一夏は固まつた筋肉をほぐしながら制服に着替える。いつもなら着替えたあとは食堂へ朝食をとりに行くのだが、今日は少し違うようだ。

「うわああああああー!？」

朝の静かな空気を破るのは一夏ではない別の男の声。その声は寮中に響き渡つた。

「な、なんだ！？」

自分は叫んでいないしシャルルの声はここまで低くない。第一にシャルルの本当の性別は女だ。とすると、この声を出した人物は一人しかいない。

一夏は寮監室の隣の部屋に向けて走る。

「喜色！　どうした！」

走つて向かう部屋は喜色の部屋。申し訳ないと想いながらも絶叫するほどのことがあつたようなので、扉を蹴り開ける。部屋に飛び込んだ一夏は田につつた光景に驚愕する。

「む？　織斑か。まだ朝も早いうちに人の部屋に突入するとは儀がなつていねいな」

「朝早くに男の上に裸で跨つているやつに言われたくない！」

ベッドの上には泡を吹いて気絶している喜色とその上に裸で跨つているラウラがいた。

ラウラは失礼などという表情で少し眉間にシワをよせた。

「細かいことは気にするな。夫婦とは包み隠さないものなのだからな」

「誰と誰が夫婦だつて？」

「私と喜色に決まつているだらう。他に誰がいる」

フンと鼻を鳴らすラウラを見て一夏はため息をつく。

「はあ、あんな、ラウラと喜色が教室でキスをしたのは見たけどな
女の子が思春期の男の部屋に入るのはマズいってわかるだろ?」

「なにがマズいのだ?」

首を傾げるラウラは嘘や一夏をからかっていふよつには見えず、
本心から言つてこるようだ。

1ヶ月ほど思春期の女子と一夏が言える話ではないが、なにがマ
ズいかを説明しようつと一夏は唇を濡らせる。

「思春期つてのは大人に近づく時期だつたり異性を意識し始める年
だつたり、体つきも男は男らしく、女は女らしくなる時期なんだ。
考え方も変わつてくるし、異性に興味を持つ。言いにくいけど邪な
考えもしてしまつ。ここまで言えば俺が言いたいことはわかるよな
?」

「わっぱりわかる?」

即答である。いやけもせず本当に意味が分からないよつなラウラ
を見て一夏はがつくりと肩を落とす。

今度千冬姉に教えるように言おうかと考えるがラウラはもぞ
もぞと氣絶した喜色の横に潜り込む。

「だからそれが駄目なんだつてー!」

「織斑、ボーデヴィッシュなにをしてこる

「げつー!」

話が通じないラウラに困った顔を向ける一夏の後ろから聞き覚えのある声がした。

ゆっくりと振り向くとジャージを着て顔に不機嫌ですと表示を貼り付けた千冬が扉の横で腕を組んでいた。

「い、いや、千冬姉、俺は喜色の声が聞こえたから……」

「ふん、おかげで目が覚めたよ。して、ボーデヴィッシュは何故裸で男の部屋にしかも布団に入つて添い寝をしている」

「夫婦は包み隠さるものだからです」

「千冬姉、一から話ないと理解できないと思つ。さつき俺も説明しようとしたから」

「……そのようだな。で？」

先ほどと同じように首を傾げるラウラを見て千冬はこめかみを押さえため息をつぐ。そしてまだ氣絶している喜色にギロリと目を向ける。

「ここはいつまで寝ている。いつものコイツなら部屋に忍び込むと起きるんだがな」

喜色を見ながら首を傾げる彼女は以前この部屋に忍び込んだことがある。忍び込んだ際は気配も音も消していたが何故か喜色がナイフを持って飛びかかってこられた。もちろん実力行使で叩きつけてノックダウンさせたが。彼女が疑問に思うのは自他ともに認める強者である自分が忍びこんだときは気付いたくせに、大きな音を開けて入ってきた今日は飛び起きもしない喜色の事だ。

「本当に何者なんだうつな、コイツは」

「え？ 喜色は喜色だろ？」

「私の嫁でもあります」

「……まあ、いいか」

微妙に噛み合わない一夏とラウラを見て千冬は少し口を釣り上げた。

「蒼崎、いい加減に起きろ」

「いたああああ！」

どこからか取り出した出席簿を喜色に振り下ろす。小気味よい音とは正反対の喜色の悲鳴が寮に響き渡った。

「ふーん、ラウラちゃんが裸でいたから氣絶、ねえ？」

生徒会室には一人の男女がいた。一人は紅茶を飲み、一人はお茶

を啜る。一人の田の前には超高級菓子の詰められた箱がある。

「それってちょっと純情すぎるわよ？」

「よし、楯無ちゃんが起きたら隣に全裸の男がいたらどうする？」

「握りつぶすわ。おねーさん、上品だからナーニがとは言わないけど」

「ヤバい。いまキコッてきた。田が本気だった」

キラリと田を光らせた楯無をみて喜色はある部分が縮まる感覚を
覚えた。

「やあねえ、冗談に決まってるわよ。冗談」

「ダウト。まあいいや。なんで呼んだの？」

本来生徒会室には生徒会役員以外は入室することはできない。今日は生徒会役員はおらず、いるのは楯無と喜色だけだ。学園最強の生徒会長がいる部屋に盗聴器を仕掛ける人がいるわけもなく、扉の前で盗み聞きをしようとする人もいない。よつて今この部屋は内緒話や聞かれてたくない話、聞かれてはならない話をするにはうってつけの場所だ。

「あら、わかつてゐんじやないの？」

「さあ？　僕は呼ばれたから来ただけだよ。適応化の時間を減らしてね。」

最後の一文を聞いて楯無は少し田を見開く。

「あら？ アナタのIRSが来たのは1ヶ月くらい前よね？ もうとつこの昔に済んでいてもいいと思つただけだ」

「うん、僕も予想外だつたよ。IRSを装着した時間じゃなくて装着して戦わないといけなかつたからね」

IRSの専用機は世の中に一つと無い单一品だ。適応化のしかたも様々だ。喜色のIRSは適応化に必要な時間は50時間。だが、一つどうしようもなく面倒くさい条件があつた。

『表示された時間は稼働時間ではなく戦闘時間とする』

つまり、戦つた時間が50時間でないと適応化は完了しないのだ。

「ふーん、随分と個性的なIRSねえ。おねーさん、ちょっと調べたくなつちゃつた」

甘つたるい声で耳を、手を組み腕で胸を寄せて喜色の視覚を攻撃する。一夏あたりなら一ひとつ返事で差し出すだろうが普通の人間とは一つ一つどころではなく、二桁単位で違う喜色は目を逸らしながら箱に入つた和菓子を口に入れれる。

「あー流石更識。出でぐるもの全てが凄いね」

「あら、そつけない」

何ともないよつに見える喜色だがそんなことはない。表面上は何も思つていないうつな態度をとつてゐるが心臓は激しく脈打ち一步氣を抜けば鼻から血液が飛び出す寸前だ。

意外とシャイボーイなのである。

「それで、なんで呼んだの？　また妹ちゃんの相談？」

「今日は簪ちゃんのことじゃないわ。あなたのＩＳのことよ」

和氣あいあいとした空気がピシッと張り詰める。それを感じ喜色も目を楯無にむける。

「アンサー テインリイがどうかした？　ゴジマ粒子が漏れ出した？」

「報告にあつた超有害物質ね。大丈夫よ、それはないわ。ただね、もう疲れたのよ」

「なにが？」

疲れたと言う楯無の目元をよく見るとつらすらと隈があつた。言われてわかる程度の物だが疲れていることにかわりはない。

「あなたと織斑くんのＩＳの所属についてよ。もーおはようからおやすみまでひつきりなし」

世界に一人しかいない男のＩＳ操縦者。一人はすでに单一能力が発現している。しかもブリュンヒルデと同じ単一能力が。^{ワン・オフ・アビリティ}さらにブリュンヒルデの弟である。見る人が見ればカモがネギを背負つて火のついた鍋に入っているように見えるだろう。

もう一人はこれと言つた特徴はないがＩＳが異常だ。ＩＳの生みの親『篠ノ之束』が開発した技術（本当は違うのだが）を使い、篠ノ之束ほどではないが天才たちが手掛けた渾身の力作だ。腹を空かせたライオンの前にシマウマが火に焼かれながら自分で塩と胡椒を

かけているようなものだらう。

「えーそれだけの『』とで呼んだの?」

『』の一人の所属は決まっていない。決めようとするらしい。いかなる権力も無効になる『』学園でもこれには辟易していた。

「……それだけの、こと?『』めんなさい、おねーさんちょっと耳の調子が悪いみたい」

しかもその矛先は『』学園生徒会長の楯無に向かつ。ただの『』学園教師に話してもしかたないという理由で。

「だつて主人公は千冬ちゃんの弟だよ? 千冬ちゃんが盾とか最強すぎるよ。僕だつて建て前はあの女が開発したことになってる技術を使つてゐんだよ? 機嫌損ねたらその国の『』が壊れるかもね」

「……! それだつ……! それだつ……! まさこつ! 壓倒的な切り札つ……!」

「ほらそんな」とでしょ?」

「ええ、そうね。そんなことだったわね。これでジャイアニアズム満々のあの国を黙らせられるわ!」

憑き物が落ちたようにすつきりとした笑顔を見せる楯無はどこかの国に恨みがあるのか、背中に炎が見えるような気がするほど何かに燃え上がっていた。

「それじゃ、僕は帰るね。合宿も近いし適応化させとかないといけないから。ばいばー……い、つー?」

「あら、まだ話は終わってないわよ?」

用は済んだと退散しようとする喜色の制服の襟が引っ張られ、エルが潰されたような声が出る。せき込みながらも振り向くと腰に右手を当て左手には開いた扇子をもつた楯無が一人。扇子にはでかと一文字。

『次』

「えー? 簡潔つてところはいいけどもう少し女の子らしくしたら?」

「更識頭首に女の子らしさなんて必要ないのよん」

「女の子なのにな。確か対暗部用暗部だつけ? 大変だね。暗部つてスペイのことでしょう? 〇〇七みたいのはいるの?」

少し目を輝かせる喜色。やはりスペイだとアサシンだと今は男の心を擗るのだろうか。

「こるわよー。未来から来たロボットみたいな人もいるわよ」

「T-1000型の? ならエツ イオさんもいる?」

「その人はいないけどその人の祖先っぽい人ならこるわよ

「マジで? ヤバいものすぐ会つてみたい」

「また今度、機会があればね。今日あなたを呼んだのは簪ちゃんの件よ」

流れかけた話を取り直す。喜色は眉を顰める。

「今日は簪ちゃんの話じゃないんじゃなかつた？ 生徒会長が嘘ついていいの？」

嫌そうな顔をして喜色はそらこーとの適応化の時間が潰れたと思つ。嫌そうな顔をした喜色を見ても楯無はそり気なく無視をして話を続ける。

「今の私は生徒会長ではないわ。簪ちゃんの姉の楯無としてここにいるわ」

「そんなことを言つても他人から見れば生徒会長更識楯無なわけで」

「姉のくせにその妹に避けられてたら世話ないよね」

「ぐつー。」

痛いところを突かれたのか胸を押さえる。

「何年話してないかも聞いてないし妹ちゃんのこととかわかんないしい？」

「ふつ……的確に痛いところばかり突いてくるじゃないの……」

今にも吐血しそうな表情で胸を押さえる。喜色は今さつき立つた椅子にもう一度座り、新しくお茶を注ぐ。

茶菓子をパクッと一口食べてため息をつく。

「で？　その妹ちゃんと同じしたいの？　仲良くなりたいの？」

「やうね、一緒に出かけるへりこかしい……」

「エリカ？　HIS研究所とか？」

喜色は少し温めのお茶を飲む。

「籠ちやんとHIS研究所……。籠ちやんの真剣な眼差し……それで
しきめじょいー！」

吹き出す。

「ブウツー？　え、本気で言つてるの？」

「汚いわねえ。本気よ。帰りの車で肩に寄りかかる籠ちやんが簡単に想像できたわ」

吹き出したお茶を拭いながら思わず口が開きっぱなしになってしま
う。原因の櫛無は頬を若干染めながら自分の体を抱ぐ。そこまでみ
た喜色はもう、投げ出すよつこぐ。

「だめだ！つや。カリスマはす」こねだハーフ＝ケーショングダメだ

「家についたら籠ちやんを揺すって起して寝やつた田で「おねえちゃん？」って……。キヤーシー」

暴走。妄想が一人走りし手が着けられない。

喜色はお茶を飲み干し茶菓子を食べて席を立つ。樋無が気づく様子はなく、暴走は止まりそうにない。

「まあ主人公にでも話してみなよ。それじゃ、僕は水着買いに行くからばいばーい」

大きめの音をたてて扉は閉まる。未だに樋無は暴走を続ける。

「ベッドに運んであげたら服を離してくれなくてそこからなじ崩し的に……キャーッキャーッ」

……しばらく放っておいても平氣だろ？。

数時間後、生徒会室に入ったのほほんとした子も流石にその状態も理解できなかつたらしい。

大変申し訳ない。アーマードコアフォーアンサー やつてました。ウインディさん が強い強い。何度も失敗したことか。虐殺ルート？無理。今はフラジールでアンサラ一撃破をば。簡単に言うと無理。というかステイシスがかなり使いやすかつたり。バズーカをBFFの突撃銃に変えてやつてます。

さて、次から三巻になります。と言つてもリアルがかなり忙しくなるので超 不定期更新になると思ひます。
見てくれてる人がいるといいなあ。

あ、主人公のISがやつと適応化します。三巻中で。

一九三〇　波紋の予感（繪書き）

シリアル。シリアルスレーブを買ってもできない……
なぜ？

「やあ、久しぶり」

「おう、久しぶりだな。待つてたぜ」

臨海学校を間近に備えた真夏のある日、喜色は暑い日差しが降り注ぐ中クーラーの効いたバスを乗り継ぎ弾の家に来ていた。家の前で待つていた弾は暑いのは勘弁と喜色を手招きし実家が経営する食堂に入る。

「最近どうよ。なんか変わったことあつたか？」

「あつたよ。VTシステムっていう千冬ちゃんの動きをトレースするプログラムが暴走したり」

「千冬さんの動き？　あの人第一回モンド・グロッソ優勝だろ？」
「どうやって事態を収めたのさ」

さらつと機密事項を話す喜色に機密事項であることを知らない弾はその強さを想像したのか、眉間にありつたけのしわを作る。

「僕が倒した」

「ダウト」

「なんで…？」

「いや、喜色ついでにいつが起きたも自分に関係ないなら無視しちゃうだし」

「いやいや、何を隠そつ絶体絶命だった一夏ちゃんを助けたのは僕です」

「はいはいそうこうとこしとく。で、一夏はなんか進展したのか？」

弾は軽く受け流し I.S 学園に行つた親友の近況を知りたがる。妹も親友に惚れているため早く特定のあいてを作つて妹を諦めさせてほしいのだ。

だが、現実は無情だ。

「ゼーんぜん。寧ろわざわざ増えたよ」

「はあ！？　あいつまだ増やすつてのかよ……。なんでだよ。この前、クラスにはもう惚れそうなやつはいないって言つてたじゅねーか」

「転校生が来たんだよ、しかも一人。一人は大企業社長の娘。一人は I.S 部隊の隊長。千冬ちゃんが少しイライラしてたよ」

「なんだその豪華な転校生は。それで一人ともか？」

「いや、社長娘だけだよ。隊長の方は特にないね」

弾は中学生の時のように頭の内からがんがんと打ちつけられるよ

うな痛みを感じる。また増えたのかと胃も痛み始める中で一人ともが惚れなくてよかつたと少しだけ安心する。

「あ、蒼崎さん、来てたんですか。今日一夏さんは……」

「来ないよ。新しく惚れた子と樂しくデート中」

とそこへラフな姿の蘭がやつてきた。名前を覚えていてもらえたのが嬉しかったのか喜色の機嫌が少しよくなる。

喜色とは反対に一夏が今日はいないと知り、がっくりと肩を落としたが続いて聞こえた喜色の言葉に素早く反応する。

「新しく、惚れた？」この前もういな『いつ』て言つたじゃないです
か！　ああ、またライバルが……」

「ちなみに社長の娘だつてよ。もうあいつは諦めとけよ　　痛い痛
い！」

弾の頭にアイアンクローラーが炸裂。身をよじり逃れようとするが逃
れられない。

「ああ、僕つ子で気遣いもばつちし。勝ち田ある？　　あるわけな
痛いつー」

喜色の頭にアイアンクローラーが炸裂。時刻は丁度昼時。食堂にいる
客は何事かと三人を見つめる。

「あります！　来年IJS学園に入るんですからー！」

「……本気で言つてるの？　本気で言つてるんだつたら少し話さ

なきやならない」

「う……」

突然口調が変わる。今までのようく軽い話し方ではなく、冷たい声色。突然豹変に蘭は怯んでしまう。

「君は」

「喜色、待て。」ヒーヒヤ迷惑だ。みんなこっちを見ている」

喜色が周りを見渡すと食堂の客の殆どが自分たちを見ていた。

「俺の部屋で話やつ。蘭もいいな」

弾が珍しく蘭に有無を言わさない口調で言つ。蘭もそれに気圧されてうなづく。

「よし喜色、続きを頼む」

弾の部屋に移動しそれぞれがそれぞれの場所に座つた。喜色は腕をくみ指を小刻みに動かしている。蘭は不満げな表情を隠そつともしない。

「……君はEIS学園に入学しようとしている。そうだね？」

「せうだつて言つてゐるじゃないですか」

「ならIS学園の目的は何か言つてみてくれ

「ISの操縦者や技術者の育成です。いかなる権力も

話を途中で遮り喜色は新たに質問する。

「ああ、そこまででいい。ちゃんと分かつていいようだ。だがISの主な使用目的は知つていいか?」

「宇宙空間での活動です。絶対防衛やハイパー・センサーによつて……」

「そこだ。そこを間違えているんだ。現在ISの殆どは何に使われてこるかわかるか?」

蘭は喜色に怪訝な視線を向けたが喜色はただ答えるのを待つている。

「……宇宙開発に決まつてゐるじゃないですか

「違うね。ISの実に9割が軍事力として扱われている。知つてた?

既存の兵器を凌駕する力、絶対防衛により操縦者はほとんど死ぬことはない。この特徴により本来の目的である宇宙開発とは違う、軍事力の要にISはなつていて。過去を振り返ると宇宙開発の裏には戦いがあるとはいへ、今の状態はやりすぎだ。

喜色は一人に答えると田を向いた。

「あ、ああ。一応は、な」

「で、ここからだ。軍事力のISを動かす操縦者の所属は自然と軍になる。しばらくしたら世界が大きく動く。偵察、戦闘、破壊、虐殺。簡単に効率よく行うには必ずISは優先的に使われる。なにが言いたいかわかる?」

「操縦者は戦わなければならぬことだよな」

「そうだな。ならば聞こう。ISの絶対防衛とは衝撃から斬撃、打撃のダメージを全てなくすことはできるのか?」

「できるんじゃないですか? 絶対って付いてるわけですし

当たり前のように答えた蘭を喜色は落胆の田で見つめた。

「否だ。衝撃は伝わる。絶対防衛と言つても絶対じゃないんだ。やりようによつては殺すことなんて簡単だ」

シャルロットがもつパイルバンカー や 鈴音の衝撃砲がいい例だ。さらに絶対防衛が発動しISが解除されたときに攻撃でもしようも のなら赤子の手を捻るより簡単に人を殺すことができる。

「でも死んだなんて聞いたことないんですけど」

「そりやあ一応『絶対』つてついてるわけだし。でも死にかけた奴 なさいむ。……ここにな」

喜色は親指で自分の胸をトン、と突いた。当然、蘭と弾は疑問に

思つ」ことがある。

「証拠はあるんですか？」

「もちろん。この体がその証拠だ」

そう言つて喜色は唐突に着ていた服の裾を捲り、腹部を一人に見せる。

「う……あ……」

「それは……」

見えたのは斬られ抉られ叩かれ撃ち抜かれて傷痕が変色した皮膚だった。その傷を治すために治療した縫合痕も多々あつたが傷の数と比べても明らかに足りない。

青ざめた二人の顔を見て喜色は捲り上げた裾をおろす。

「さて、これを見ても考へは変わらない？　変わらないなら後は知らない。勝手にすればいい」

「……」

「僕もただ単にやめると言つてゐるわけじゃない。ただ入学するならそれ相応の覚悟をもつてこい。そうでなければお前の大切なものが無くなるだけだ」

「んー？　んんー？　なんじゃこりや」

篠ノ之束は何かを見つけた。

辺りに縁はなく、見えるのは焼け焦げた大地と大きくへこんだクレーター。クレーターの縁には大理石が白く太陽の光を反射し墓標のようにそびえ立っている。そして大理石の根元には花が添えられていた。

「んー？　犬なのか猫なのかハムスターなのか……」

束が見つけたものを一言で表すなら『毛玉』だろう。くりつとした目、手に乗るくらいの体長、オメガの小文字のような口、短い手足、丸い胴体、一番目を引くのは首もとにつけられた首輪だ。

「ふーむ？　君、冬に一緒にいると暖かそうだね。どこから来たの？」

言葉がわかるのか束の質問にわからないと黙つて首を傾げた。

「わかんない？」と黙つた言葉がわかるのかーそうなのかー。名前なんて言つの？」

またわからないと黙つよう前に首を傾げた。それを見て束は数秒間考える。

「よーしなら名前はストレイドだー！　なんかビビッと来たのさ

！ 異論は認めないよ？

突然指指された毛玉は身を震わせるが、ただ指を指されただけとわかると短い足でジャンプして束の頭にふわっと着地した。

「おー？ 軽いねー君い。そしてモフモフだねー。いいよいよーそこがスーくんの専用席だねー」

毛玉を軽く撫でて束は歩き出す。頭についたウサ耳は毛玉が振り落とされないようににじめつている。

「なんなんだるーね？ 天才の束さんがお墓参りするなんて。普通なら氣にもしないのにねー。し�ょっちゅう来ちゃうんだよ」

そびえ立つ大理石の前でスカートが汚れるのも気にせずトスツッと腰をおろす。毛玉も頭から飛び降りて添えられた花を珍しそうに見つめる。

「あの目が忘れられないんだよ。自分は死にかけだっていうのに両足でたつてあの子を守るよつとしてたあの目が。おかしーよねー」

「それにここに来るとなんか安心するんだよ。ただ荒れ果てたところなのに向でかなー」

「モフッ！」

「おおつー！？ 変な鳴き声だねーモフッて、モフッて変なの」

一声泣いた後毛玉はまたピヨンと跳ね、束の頭に静かに着地する。束はもう一度毛玉を優しく撫でると立ち上がり服についた砂を払

う。

「あはと、あなたが行なつたか？」 もうすぐ暮れやんとも分かんない
「おやんともこつくんとも会えぬよ。あの子ともね」

19話 四畳 波乱の予感（後書き）

うーん、やっぱりシリアル。

もつひとつと掘り下げればよくなると思つんだけどなあ。

さて、

なぜ首輪つきがでてきた！？

意味が分からない。どこまでもただの毛玉で束のペットになる予定なんですね。

さあ、3巻が始まります。どうなるんでしょうかねえ 他人事

20話
臨海学校初日（前書き）

臨海学校開始。

夏。

普通の学校の生徒ならば夏休みを堪能しているこの夏の日差しが降りそぞぐ今日、E-S学園の一年生生徒はバスに乗っていた。臨海学校のために移動するバスの中はとても騒々しかった。

「おえええ……」

訂正。一部を除いてとても騒々しかった。

「しかし予想外だね」

「なにが？」

顔を真っ青にしながら吐き氣を呑み込む一夏を見ながら喜色眩い。一夏に水を手渡しながらシャルロットが首を傾げる。

「E-Sはあんなに振り回してもケロッとした顔をしてるの? バスで酔つとはね」

「あはは、まあ、E-SにはP.H.Cがあるし、操縦者を保護する機能もあるからね。それに多分、遺伝的なものなんじゃないかな?」

そう言つて顔を動かしたシャルロットの視線の先には弟と同じように真っ青な顔をした千冬がいた。

その弱つた千冬を見た喜色は目を輝かせる。

「うはーー! 千冬ちゃんが弱つてる今が積年の恨みをはらすチャ

ンス！　いつも頭をたたいてくれたお返しを今こそ…」

「蒼崎さん、それはまずいと思いませんが……」

「あやあーー？」

セシリアの忠告は当然、無駄になる。超人じみた握力を持つて喜色の頭を握り締める。

「……蒼崎、そんなに死にたいか？　いまの私は氣分が悪い……。
がまつてほしいなら、ラウラあたりが適任だろう……」

「待つて待つて！　頭が弾ける！　ザクロになるー」「うるせー
……頭に響く……」

「だれだよ！　千冬ちゃんが弱つてるって言つたバ　　」

「お前だ……馬鹿者が……。ラウラ」

千冬は手に力を込めた。片手で成人近い男を氣絶させるなどといふことができるのは彼女くらいだろう。

千冬は意識を失い、全身の力が抜けている喜色をラウラに渡した。

「教官？」

「いやなら……床に投げておけ

「……」

気絶した喜色の横には心配そうな、しかし嬉しそうな顔をしたラ

ウラがいたとか。

バスは近づいていく。

波乱が手ぐすね引いて待つ地へと。

彼らと彼女たちはまだ知らない。

この数日に何が起こるかを。

「ああ、死ぬかと思った。誰か絶対に酔わなくなる薬を作ってくれないかな」

「無理だよ。人には免疫があるからね」

旅館の部屋で一人は話す。毎年工学園の臨海学校で使われるこの旅館は国民の税金からできることもあるって、まだ新しく綺麗で豪華だった。

その一室に一人は荷物を投げるよつに置いた。

「だよな。でも千冬姉の部屋の隣とはな。夜に騒げないな」

「そんなことより千冬ちゃんって何者？　いろいろおかしいと思

うんだけど

喜色が言つのはHIS用の武装を生身で扱つたり超人じみた身体能力を発揮していることだ。人のことを言えない喜色なのだが。

「千冬姉は千冬姉だろ。なんせ俺の姉だからな」

「ああ、忘れてた。主人公はシスコンだった」

「シスコンってなんだよシスコンって。家族だからだよ」

「ふーん。で、何してるの?」

急須に茶葉をいれポットからお湯を注ぎながらお菓子を食べる喜色の横では一夏が鞄からなにかを取り出していた。

「え? 海に行かないのか? すぐそこだぞ? セツカグだから行こつぜ」

「あー、うん、行こつか

「ん?」

「つづつづつとする一夏に返す返事はどこか歯切れが悪い。一夏はそれには僅かな違和感しか感じず、喜色の手を引いて部屋から飛び出す。

海。何を思い浮かべるかは人それぞれだろう。泳ぎ、水着、パラソル、バーーと答える人もいればナンパ、カナヅチ、青春、水没と答える人もいるだろう。だが喜色はどれにも属さない。一人パラソルの影で楽しそうに騒ぐクラスメイトをぼんやりと見ただつた。

「……」

楽しそうに騒ぐクラスメイトを見ても喜色は何も感じることはない。

「……」

寂しいだとか楽しそうだとか、混ぜてほしいとは思わずただ眺めている。

「……」

水着に着替えずいつも来ている制服を着て砂の上に座っていた。

「……」

「あれ？ あんなにしてんのこなんじるで？」

「……あ、鈴音ちゃんか。どうしたの？ 主人公は？」

喜色のつま先に人の形をした影ができる。鈴音がキヨロキヨロとあたりを見回しながら尋ねる。

「一夏を探してゐるよ。セシリ亞がなにか企んでたみたいなんだだけ

ど、見あたらぬの

「セシリアちゃん? セツキサンオイルとか持つてたのは見たよ」

セシリアが喜色に皿もくれず駆けていったのは記憶に新しい。

「なんか企んでたみたいなんだけど……わからないわね。あなたは泳いだりしないの?」

「……まあ、ね。あれだよ。僕が」

「あつ! 一夏見つけた!

「あんた泳いどきなさいよ? 海にきてした」とは海を見てましたじや悲しいでしょ? あ、セシリアも……水着脱いでる!?

少し遠くで一夏とセシリアがいるのを見て鈴音はよからぬ気配を感じて駆け出す。もちろん喜色は放つておいてだ。

「えー、それって無いよ……」

喜色が一人ボツンと残った。

喜色は考える。篠ノ之束は何故、HSを開発したのか。

「……」

何故、女性しか使えないものを作ったのか。それでは産業廃棄物、

所謂産廃にしかならないではないか。狙つて女性しか使えない「よう」にしたのか、はたまた意図しないものだったのか。

「……」

天災とも言われる天才が女性しか使えないものを世界に広めたら起ることを考えないなどありえない、はずだ。となると意図的なものとなる。だがそれではすこし疑問が残る。

「……何故、本来宇宙開発に作られたI.Uが兵器にされているのにノーアクションなのか」

技術者は自分の作ったものに誇りを持つ。喜色の専用機を作った人たちも嬉しそうに、そして誇るような顔をしていた。そこが疑問だ。

そして、何故ここ最近はいつも動きが無いのだろうか。

「……」

そう考える喜色に誰か一人が近づいていく。

「あ、喜色。ここにいたんだ。……ほら、ラウラ恥ずかしがってないで」

「喜色！？ シャルロット、そこに喜色がいるのか！？ だ、だめだ、恥ずかしい！」

よくにあつた水着を着たシャルロットの後ろにはタオルを頭からふくらはぎまで巻いた何かがいた。声と反応から察するにラウラの

ようだ。

「大丈夫だから。僕が見ても可愛かつたんだから喜色も可愛いって言つてくれるから」

「一 夏はあつちでセシリアちゃんとなにかしてるよ。もしかしたら……」

「えつ？ セシリア、抜け駆けはなしつて言つたのに……。早く行かないと何が起つるか！ ラウラ、ちゃんと見せるんだよ！」

「……」

「……」

鈴音と同じようにシャルロットは駆け去る。後に残されたのは喜色とタオルのなにか。

喜色はラウラをちらりと見た。

「ラウラちゃん、暑くない？」

「……暑い。がお前に見せるともつと顔が暑くなる。……うう」

炎天下のなか、日差しはラウラを容赦なく照らしタオルのなかは蒸し風呂のようになるが、ラウラは羞恥心からなかなかタオルを外すことができない。

「き、喜色は、笑わないか？」

「なんで笑うのさ？ どうせラウラちゃんが着ている水着はとて

も似合つてゐるんだから笑つ必要が無ことよ」

「や、そつか。……ふう、はあ、すう、はあ……っー」

深呼吸をし覚悟を決めたラウラはその身に巻いたタオルを一瞬ではぎ取つた。

タオルの下にあつたのは決してグラマーとは言い難いが、成長をしている体とそれにくつつくラウラの白い肌によく似合つ黒い水着だった。

「ビ、ビうだ?」

「……」

「……喜色?」

「あ、うん、よく似合つてゐる。可愛いや

その瞬間ラウラの顔は赤に染まる。恥ずかしい気持ちとついに気持ちが混むり、言葉が出てこない。

「あ、あ……」

「ビうしたの?」

そんなラウラを喜色は下から覗き込んだ。こつなつたラウラがとする行動は最早一つしかない。

「うあああああー」

逃亡」。持てる力をすべて注ぎ砂浜を走り出した。全速力を維持したまま海へダイブ、全力で沖に泳ぎ始める。

「……あれ、なんかまづった？」

『ねえ、これはなんの研究なの？』

『あ？　これか。世界のエネルギー状況が代わるかもしれない研究だ。この研究が完成すればお前も外に出られるぞ』

『それって本当？　なら、ならや、海つてとひびきつけよ、マザー！』

『ああ？　海い？　あんなもんし�ょっぱい水があるだけだろ。…まあ、初めて行くんなら楽しいかもな』

『だよね！　絶対樂しいよね！　マザー、約束だからね』

『はん、なにことしなくていいにこでも連れてってやるよ』

「蒼崎、なにをしている。泳がないのか……水着すら着ていないのか」

11

一
蒼崎
?

半分眠る喜色のまえに今度は千冬が立つ。ウトウトとして返事をしない喜色に千冬は首を傾けた。

「んん……マザー？」
「なんだ、千冬ちゃんか？」

「マザー？」　ああ、前に言つていた人か。それより何もしないのか？　一夏たちといえば楽しいはずだが……ラウラはどこに行つた

「ハウリちゃんはどこかに走つていつたよ。それにしてお、千鶴ちゃん」

「ヤーヤと口元を吊り上げる喜色を見て千冬の眉間に微かにしわが入り、指の関節がゴキツと鳴つた。

「その水着、誰が選んだの？」

「……言つ必要があるか？」

「なるほど、主人公ね。選んでもらつたの？」

「ああ、家族だからな。それくらいは当然だろ?」

白慢げに胸を張る。千冬が着ているのは所謂ビキーで、胸を張る
と当然その大きさが主張される。喜色は鋼の精神でそれに目を向け

ない。

「わあ、この人はブランだつた。やっぱり遺伝だね」

「ふん、それで？　何の夢を見ていた？　生徒の話を聞くへりいならできるんで」

「何でもない夢だよ。海に行こうって約束した夢を見ただけ。それだけの話」

なにを思つたのか千冬はゆっくりと喜色の隣に腰を下ろす。

「もう無理な話だけどね」

「そうか。お前は何故着替えてないんだ？」

「イヤだなあ千冬ちゃん、僕の体なんて他人様に見せられるものじやないんだよ？」

喜色は苦しげことを隠すよつて不器用に笑つ。千冬はしまつたと僅かに顔をしかめたが、口からでた言葉は戻すことができない。なので、不自然に話を変えずに続ける。

「自意識過剰かもしれんぞ？　まず他人に見せてみる。案外思つていたのと違うかも知れないな」

「ハツハツハツ、ものは言つてやつだよね。可能性を示しただけで、その可能性は〇に等しいんだよ」

「それで可能性が増えるかもしれんぞ？」

「……そんな中せせない。わかっているだらう。ブリュンヒルデ」

「つー?」

喜色から殺氣がずるつと溢れ出す。その密度、千冬の呼吸が一瞬止まるほど濃かつた。

「千冬ちゃんもこんな奴のとこにいって、弟と一緒にいたら?」
だが、それも一瞬のことで殺氣はすぐに霧散し、いつものように話します。

「せひ、弟くんがキラロキラしてると?」 千冬ちゃんを探してゐんじやない? 来年はこんなことないはずだし、楽しんできたら? それよりその水着似合つてると、主人公に選んでもらつたんでしょ? なら見せてこなきや。せひ、行つた行つた

「……なら、行くぞ」

すこし、思いつめていた千冬は素早く立ち上がり、喜色の首を掴む。普通女性が男を持ち上げるなどとこいつことは出来ないのだが、千冬はズルズルと一夏たちがいるところへ引きずつて行く。

当然、喜色はもがいて抵抗しようとするが彼に抗つすべはない。

「ちよー? 首、くび、なんでー? なんで僕引きずりられてるのー?」

「お前が行けと言つから行つていいだけだが?」

「僕が言つたのは千冬ちゃんだけでつてことで、僕はこじる……」

「聞こえんなあ。たまにはあいつらと遊ぶのもいいだらう。お前も、たかが16の子どもなのだからな」

白々しく答えながら千冬はズルズルと進む。もちろん、その左手には喜色の首がある。

「あ、千冬姉。と、喜色？ なんで千冬姉が引きずってるんだ？」

引っ張つてきたのはバーレーボールを片手に持ち、チームをどうじょうかと考える一夏のもと。自分が選んだ水着を着てもらえているからか頬が若干緩む。そして、千冬の後ろに猫のようにして連れてこられた喜色に視線が行つた。

「なに、お前たちのビーチバレーに混ぜて欲しいんだぞ」

「千冬ちゃん！？ 何言つてんの！？」

「お、喜色もやる気になつたか。制服だけ……代えもあるし大丈夫だろ。千冬姉もやるか？」

「コスツ

「織斑先生、だ。私は後で不利なほうへ入ることにしてやるわ」

半年近く出席簿で叩かれ続け耐性がついた一夏はけりとした顔で頷いた。千冬は不満足げな表情を浮かべながらもパラソルの陰に座り、観戦の体勢にはいる。

「さて、男も一人だし俺と喜色は別でいいよな。それじゃあ、好きなほうに分かってくれ」

「はーーい」

「私織斑くんのほうに行く！」

「なら私は蒼崎くん！」

「私は、どっちにしようかなー？」

「僕はまだやるとは……」

抗議しようとした喜色の背筋が凍りついた感覚に見舞われる。ギギと振り返ると不敵な笑みを浮かべながら声を出さず口だけを開く千冬がいた。

『いいな？ や・れ』

「やらせていただきます！」

その後旅館に戻った喜色の制服は砂まみれで、本人も砂まみれ。千冬にシャワー室に叩き込まれていたが、海を見ていた時の思いつめた表情は影も見えず、その顔には堪能して満足そうな表情しか見えなかつた。本人に言つたとしたら全力で否定するだろうが。

「嫁よ、何故砂まみれなのだ？」

「ラウラちゃんこそなんできぶ濡れで疲れてるの？」

「いや、頭を冷やすために鮫に襲われたイルカを助けていた」「イルカがいんの！？ というか鮫と戦つたの！？」

「ああ。イルカの背中に乗せてもらつたぞ？」
「……さいで」

これといったイベントは無し。

なぜかヒロインのつむりのラウラが不遇で千冬がヒロインみたいに。
僕は悪くない。こんなことは予定してなかつたのに。

今はフランジールにブレードでアンサラー撃破にチャレンジナウ。全
ミッションひどいとかカーパルス占領すらできないのになにやつ
てんだろ。

さて、次は喜色の過去。九十割はできます。因みに「」で解決は
させません。しかし、悲しいことに一話で終わっちゃう（、；
、）
うまく書けてればいいなあ。

釣られてシシ「//」をしようとしたなら感想に釣られたクマーテーと一
言。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2815v/>

IS インフィニット・ストラトス 2人目の操縦者

2011年11月20日08時57分発行